



中東現代文学リブレット③

シンポジウム「《文学》からシリアを考える」

中東現代文学研究会

#3

**Modern  
Middle  
Eastern  
Literature**

中東現代文学リフレット③

シンポジウム「《文学》からシリアを考える」



〔序〕

## 《文学》が映すシリアの人々の過去・現在・未来

二〇一一年三月に「アラブの春」が波及する形で発生した反体制デモを発端とする現在のシリア情勢は、アサド政権による反体制派への激しい弾圧、過激派の台頭、外国勢力の介入など、多くの要因によって日々混乱を深めています。シリア情勢を理解するための様々な試みがここ日本でもなされてきた中で、「政治アクター」や「難民」として集団化され、無名化されがちなシリア人の個々の声に触れる機会を持ちたい——そのような思いから、シンポジウム『《文学》からシリアを考える——独裁、内戦、そして希望』は企画されました。

《文学》とカッコをつけたのは、狭義の文学だけでなく、映画やアートなど、シリアの人々の文化的・知的営みを幅広く取り上げたためです。そして実際に、シンポジウムで取り上げられた作品は時代、内容ともに多岐にわたりました。それでもシリアの作家やアーティストたちが、様々な制約と格

闘し、あるいはそれをすり抜けながら、長年にわたって作り続けてきた作品のほんの一部にすぎません。

第一部の基調講演ではまず、ブラックな笑いと奇想でシリアの人々の苦境を多彩に描く短編小説家の作品世界について、森晋太郎氏（アラビア語通訳・翻訳者）から紹介がありました。岡崎弘樹氏（アラブ近代政治・文学思想）は、抑圧体制下での収監経験を記した「監獄文学」の系譜を振り返り、シリアの未来を見据えた作家たちの知的努力の跡を辿りました。柳谷あゆみ氏（中世アラブ史・現代アラブ文学翻訳）は二〇〇〇年代を中心に、文学や映画、演劇といった表現活動を例にとり、検閲を潜り抜けるための曖昧化の手法と近年の変化について解説しました。岡真理氏（現代アラブ文学）は、日本でも劇場公開された映画『シリア・モナムール』について、三つの文学的テクストとの関連性を解き明かしつつ、難解なその作品世界から立ち上がる痛みと希望について語りました。

第二部のヴィデオ・メッセージには、四人のシリア人アーティストが登場していただき、彼らの肉声を届けました。ムハンマド・アッターール氏は今、

世界が注目する若手脚本家です。イブラヒム・サミュエル氏は監獄文学の担い手の一人でもあるベテランの短編小説家です。演出家のオマル・アブーサアダ氏は、四人の中で唯一、今でもシリア国内で暮らしています。映像作家のウサーマ・ムハンマド氏は、映画『シリア・モナムール』の監督として国際的に高く評価されています。

第三部のパネル・ディスカッションでは、第一部の講演者四人に、前田君江氏（ペルシア文学・絵本翻訳者）、鶴飼哲氏（フランス文学・思想）、ナジーブ・エルカシュ氏（映像ジャーナリスト）、山本薫（アラブ文学）が加わり、福田義昭氏（アラブ文学）の司会で、シリアにおける文学やアートの現状や役割をめぐって、聴衆からの質問にも応答しつつ、幅広く活発な議論が行われました。

シリアの現状や、その発端となった二〇一一年三月の出来事をどう理解するのかについては、「民衆蜂起」「革命」「反体制運動」「内戦」「戦争」「シリア危機」など、本シンポジウムの登壇者のあいだでも様々な呼び方が錯綜していることに示されるように、単純に整理できるものではありません。上記

のような複数の呼称をあえてそのまま本文中に残してあるのは、安易な単純化を避け、登壇者の一人が述べているような「わけが分からない状況」を表現するためでもあります。

しかし同時に、シリアで起きていることを「わけが分からない」でやりすごすのではなく、なぜ今のような状況に至ったのか、そしてこれから先、シリアはどのような方向に向かうのかについて、まずはシリア人自身がどう考え、模索してきたのかを《文学》を通じて知ること——それは同時代を生きるわれわれに突き付けられた課題としてシリアの状況に向き合い、動きを起すために必要な一歩であると信じてやみません。

二〇一八年二月二七日 山本 薫



シンポジウム

# 《文学》からシリアを考える

— 独裁, “内戦”, そして希望 —

2017年6月17日(土)

東京大学 東洋文化研究所 3階 大会議室 13:00 - 18:00 (開場12:30)

東京外丸ノ内線/都営大江戸線(4番出口)本郷三丁目駅。東大・懐徳門入る。  
緑の小道を抜けた右手、正面玄関に唐獅子像のある建物。

参加費無料 / 定員80名 ◆要・予約◆ PJ21kyoto@gmail.com

参加される方は事前にお申し込みください。

I. 基調講演 13:10 - 15:20

1. 森 晋太郎 (アラビア語通訳・翻訳者) 「半島の壁に描く太陽—ムスタファー・T・ムーサーの短編世界」
2. 岡崎弘樹 (アラブ近代政治・文学思想) 「やられても、やりかえさず—シリア小説における監獄経験の表象」
3. 柳谷あゆみ (中世アラブ史・現代アラブ文学翻訳) 「どこかの誰かの奇妙な話/自分たちの国の話—シリア人が書くシリア」
4. 岡 真理 (現代アラブ文学) 「瓦礫のなかの希望—映画『シリア・モナムール』と3つのテキスト」

II. シリアの作家から日本の市民へのビデオ・メッセージ 15:40 - 16:00

III. パネル・ディスカッション 16:00 - 17:50

鶴岡 哲 (フランス文学・思想), ナジブ・エルカシュ (映像ジャーナリスト), 前田君江 (ペルシア文学・絵本翻訳者),  
山本 薫 (アラブ文学), 岡崎弘樹, 森晋太郎, 柳谷あゆみ, 岡真理, 司会: 福田義昭 (アラブ文学)

MMEL 中東現代文学研究会

中東現代文学研究会 / 東京大学東洋文化研究所3階(中東現代文学研究会事務局) 事務局: PJ21kyoto@gmail.com  
事務局: 東京都千代田区千代田1-7-7 東京大学東洋文化研究所3階(中東現代文学研究会事務局) 事務局: PJ21kyoto@gmail.com  
www.mmel.jp / 03-5841-3000 (受付時間: 10:00-17:00)

目次

〔序〕《文学》が映すシリアの人々の過去・現在・未来 ..... 山本 薫 3

第一部 基調講演

牢獄の壁に描く太陽——ムスタファー・タージュディーン・ムーサーの短編世界 森 晋太郎 11

やられてもやりかえさず——シリア文学における監獄経験の表象 岡崎弘樹 28

どこかの誰かの奇妙な話／自分たちの国の話——シリア人が書くシリア 柳谷あゆみ 48

瓦礫のなかの希望——映画『シリア・モナムール』と三つのテクスト 岡 真理 64

第二部 シリアの作家から日本の市民へのビデオ・メッセージ

ムハンマド・アッタール／イブラヒム・サミュエル／

オマル・アブーサアダ／ウサーマ・ムハンマド 85

第三部 パネル・ディスカッション

福田義昭／前田君江／鵜飼 哲／ナジブ・エルカシュ／

山本 薫／岡崎弘樹／柳谷あゆみ／森 晋太郎／岡 真理 103

〔付録〕二〇一一年以降に刊行されたシリア人作家による作品リスト ..... 156

〔あとがき〕 ..... 岡 真理 158

# 第一部 基調講演



## 牢獄の壁に描く太陽

——ムスタファー・タージュッディーン・ムーサーの短編世界

森 晋太郎

### 1 はじめに

シリアの短編小説作家、ムスタファー・タージュッディーン・ムーサーは、シリアの人々が直面する現実が凝縮されたような短編の数々を生み出し続けている新しい世代の作家の一人です。

中東現代文学研究会で刊行した『中東現代文学選2016』<sup>★</sup>には、ムーサーの短編二つの翻訳を掲載していただきました。それについても触れながら、今日は、ムーサーの作品の世界をできるだけ色々紹介してみたいと思います。

### 2 略歴

ムスタファー・タージュッディーン・ムーサーは一九八一年に、シリア北西部のイドリブという地方都市に生まれました。首都ダマスカスのダマスカス大学メディア学

★ 中東現代文学研究会編『中東現代文学選2016』、二〇一七年三月刊。

部で学んだ後、舞台俳優として活動を始め、その後、短編小説を新聞などに発表し始めます。これまでに短編集五冊と戯曲二冊が刊行されています。一九九四年以降、統一シリア共産党という政党に所属していましたが、二〇一一年には脱退しています。

二〇一一年にシリアの民衆蜂起が起きた後は、ムーサーは故郷のイドリブを拠点に民主化運動に関わって、作品をインターネット上に発表するなどの活動を続けます。しかし、治安当局から呼び出しを受けたり、家宅捜索を受けたり、兄弟が投獄されるなど、体制側からの圧迫が強まるなかで、身の危険を感じたムーサーは二〇一四年、反体制武装組織の助けを借りて、隣国のトルコに脱出します。

そして現在、トルコのシリア国境地帯の町レイハングルで、国際NGOが運営する医療機関の事務局の仕事に携わっているとのこと。

### 3 二〇一一年以前の短編から

短編作家としてのムーサーは、何気ない日常の一コマをユーモアとペースを込めて描いた作品から、幻想的でシュールな世界まで、その多彩な作風ゆえに、チェーホフやカフカになぞらえられたり、またある時は「短編の魔術師」と評されることもあります。<sup>★</sup>



ムスタファー・タージュディーン・ムーサー

★ Yumnā al-Dinshiqrī "Musajātā Tūj al-Dīn al-Mūsā li-Qiryāt... farartu min Siryā bi-Musā' adat Shahīd", 2015/10/21, [http://orient-news.net/ar/news\_show/92157/0]

## 『三人の画家の湿った地下室』

『三人の画家の湿った地下室』という最初の短編集は、二〇一二年に刊行されました。表題作の『三人の画家の湿った地下室』<sup>\*</sup>には、二〇〇八年の日付が付いていますが、ムーサーの短編世界の暗い部分を代表していると言えるかも知れません。

真つ暗なかび臭い地下室に、一匹のネズミが迷い込みます。ネズミはそこで、おぞましい絵を描く、醜悪な三人の画家たちの姿を目の当たりにします。画家がそれぞれ描いているのは、冷蔵庫の中に閉じ込められた少女の絵と、蠟燭の芯の先つぼから耳が生えている絵と、腕を切断された男の絵です。

絵の中の人や物が助けを求める悲痛な声に、ネズミは耐え切れなくなり、三人の画家が紅茶を飲もうと思つて沸かしていたやかんのお湯の中に身を投げてしまいます。画家たちはそのやかんのお湯で入れた紅茶を飲んで、三人とも死んでしまいます。そうしてようやく、絵の中の人や物たちは解放されて、地下室から出ていく……という成り行きが、不気味な雰囲気の中で展開します。

この作品に出てくる「地下室」や「絵の中に閉じ込められた人物」といったモチーフは、ムーサーの作品の世界にしばしば登場するものです。

それらのモチーフを通して表現されているのはおそらく、シリアの社会を包み込んでいる息苦しさということかと思えます。独裁体制下のシリアにおいて直接的な体制批判を行うことはきわめて困難でした。したがって多くの作家たちは国外に出て行って表現活動を行うか、或いは、国内にとどまった作家たちは、間接的な、寓意に満ち



『3人の画家の湿った地下室』

★ *Muṣṭafā Tājī al-Dīn al-Mūsā, "Qabw Karab li-Thalāthat al-Risāmīn", Qabw Karab li-Thalāthat al-Risāmīn, Aleppo: Nūn & al-Nashr wa-l-Tibā'a wa-l-Tawzī', 2012, pp.159-132.*

た描写などを用いて、社会の閉塞感を表現してきました。ムーサーもまた、初期の作品群においてしばしばそのような表現方法を用いています。

#### 4 二〇一一年以降の短編から

しかし、二〇一一年にシリアの民衆蜂起が始まった後は、ムーサーの作品の中にも、思い切った体制批判や痛烈な政治風刺が目立つようになります。そして、それまでの作品よりもくつきりとしたイメージを持つ魅力的な作品たちが、さらに多彩に生み出されていきます。

「なんていい人たち」

『中東現代文学選2016』に翻訳が掲載された「なんていい人たち」<sup>★</sup>という作品は、二〇一三年にネット上に発表された短編で、治安機関の刑務所を舞台にしています。

治安当局による不当な逮捕や拷問は、シリアをはじめとするアラブ諸国の独裁体制下の人々にとっては語り草になっています。それがあまりにも一般的な現象であるために、「監獄の文学」と呼ばれるジャンルに分類されるような文学作品が、数多く存在します。「監獄の文学」については、この後の岡崎さんの講演の中で詳しい言及があるかと思えます。

この「なんていい人たち」という短編では、監獄の中のおぞましい暴力の実態を、

★ムスタファー・タージュッディーン・ムーサー「なんていい人たち」、『中東現代文学選2016』(二一五―二一九頁。Musjafāḥ Tāj al-Dīn al-Mustāfā, “Kam Hum Lutāḥ”, 2013, <http://www.dahnon.org/archives/4973/>)

写実的・直接的に描写するのではなく、シュールなブラックコメディに仕立てて表現しています。

主人公は髪の毛の長い男で、くせ毛が悩みです。彼はある日、刑務所に連行されます。そこでお決まりの虐待と拷問を受けることになるのですが、主人公は、刑務官に両足を掴まれて床の上を引きずり回される場面では、「わざわざ歩かないで済むように気を遣ってくれているのに違いない。なんていい人たちなんだろう」と感心したり、刑務所の他の部屋から人間の叫び声が聞こえてくる場面では「テレビでリアル・マドリードとバルセロナの試合でもやっているのだろう」と羨ましがったりするという、呑気なとぼけた調子で話が進んでいきます。

主人公は取調室で拷問を受けます。その拷問というのは、長い髪の毛を束ねて、天井から宙吊りにされるといふもので、体全体の重みが髪の毛だけで支えられた状態になります。すると主人公は、それを新しい遊びだと思って、大喜びします。人間プランコのようにゆらゆらと揺れながら、歌を口ずさんで、子供のようにケラケラ笑っているという、なんとも倒錯的なシュールな場面が展開します。

しかも最後には、拷問で何時間も髪の毛を引っ張られていたおかげで、昔からの悩みだったくせ毛が治って、サラサラのストレートヘアになってしまい、主人公は喜びのあまり踊り始めるという、オチがついている話です。

とぼけたブラックユーモアが、逆に不条理な現実の恐ろしさを浮かび上がらせる展開もさることながら、シリアのことを知っている人だったらニヤリとするような小ネ

々があちこちにちりばめられている短編なので、翻訳の全文を読んでみていただけたらと思います。

### 「虐殺の花束」

シリアのアサド体制は、国内の反政府的な動きに対しては、アラブ諸国の中でも際立って徹底的な弾圧を行ってきたことで知られています。それでも二〇一一年、多くの人々がいわゆる「恐怖の壁」を打ち破って、デモに参加しました。

それに対して、さらに苛烈な暴力が、自国民に対して、ためらうことなく行使されました。それが武力衝突の拡大と、平和的な市民運動の周縁化と、過激派勢力の台頭、外国の介入といった事態と絡み合いながら、現在のような未曾有みぞうの人道上の危機をもたらしています。

シリアの人々は今や、戦争状態の中で、むき出しの暴力に晒されています。その凄惨なありさまは、ムーサーの作品の世界にも、深く影響を与えています。

シヨートシヨートとか掌編とか呼ばれるような、とても短い短編の形式は、ムーサーが好んで用いてきた形式のひとつです。一〜二頁程度とか、短いものになるとたった二〜三行のものもあります。二冊目の作品集『虐殺の花束』（二〇一四年）は薄い本で、六四頁の中に八〇編の作品が収録されています。この短い短編という形式は、シリアの人々が置かれている苛酷な状況の中の一コマを、鋭く切り出してみせる道具として活かされています。



「虐殺の花束」

色々な具体的な例をできれば紹介したいのですが、時間の制限もありますので、ここでは取って一編だけ、この作品集の表題作である「虐殺の花束<sup>★</sup>」を紹介しておきます。とても短い作品なので、翻訳した全文を読み上げたいと思います。

砲弾が激しい雨のように、村の広場に降り注いだ。そこではささやかな婚礼の宴が開かれているところだった。

子供の父親は不安に襲われ、母親を探すため、広場へと慌てて駆けつけた。幼い子供は父親の後について行った。

父親は、顔つきさえよく判らないものも混じった遺体の中に、母親を見つけて出すことができなかった。

けが人の一人が父親に、彼女は砲弾が降ってくる何分か前に宴の会場から出て行った、自分はずぐ近くで見かけた、と言って彼を安心させた。

子供は、嬉しげに、そこらじゅうに散らばった人間の体の間から、切断された腕を拾って遊んでいた。人形だと思つて、何本かの腕を拾い集めていた。

父親は子供を大声で呼び、すぐに家に帰るよう言いつけた。そして、暫くしたら母親と一緒に戻るから、と約束した。

子供は、切断された腕の束を胸に抱えて、走って帰った。

家に帰ると、子供は居間のテーブルに置いてあった花瓶を取り、入っていた花を捨てて、腕の束を花瓶の中に入れた。そしてソファの脇に置いて、ぼんやりと

★ Musqāṭa Ṭaj al-Dīn al-Muṣāf.

"Wazharīyya.. min Majzara," *Makarriyya min Majzara*, Dammus/Beirut: Bayr al-Muwāḥin, 2014, pp.21-22.

笑みを浮かべてそれを眺めた。

父親と母親はなかなか帰って来なかった。……子供は眠くなって、あくびをした。そして、花瓶の脇で居眠りを始めた。

子供が眠った後……、花瓶に活けられた腕の中の 하나가、そっと傾いて、子供のをさらさらした髪の毛を優しく撫でた。

いかがでしょうか。人によつては引いてしまいそうな、残酷でシュールな描写ですが、同時に、母親の愛情というもののイメージがとても強い印象を残す作品です。

トルコとシリアの国境地帯の町で医療関係の仕事に携わっているというムーサー自身の経験も、こうした作品の中に投影されているのかも知れません。彼は日頃どんなことを目しているのだろう、と思つてしまいます。

### 「遺跡の三匹の怪物」

さて、ムーサーの作品では、シリアの今を生きる人々が色々登場しますが、その多くは普通の人々であつて、英雄や、無謬むびりゅうの聖人君子などではありません。それどころか時には愚かしく、過ちを犯す弱い人間たちです。

ある短編の主人公は、自分の妻に「反体制派の重要な会合があるから決して邪魔をしないように」と言いつけておいて、自宅の一室に愛人を連れ込んで密会を重ねます<sup>★</sup>。主人公が臓器売買に手を染めるといふ話もあります<sup>★2</sup>。色々な人間が登場しますが、そ

★1 Musqātā Tuj al-Dīn al-Mūsā, "Ūmān ū Hizbiyya Khaṭra", *Māf Sā ar Iḥdāth*, Sharja: Riwāyāt, 2016, pp.5-8.

★2 Musqātā Tuj al-Dīn al-Mūsā, "Jalālīn Bakīna wa Jūfahīn Karīna", *al-Rāfīd*, 2016/6/12, [http://www.alfatafed.com/2016/06/12/]

んな中から、最近読んで印象に残った作品をひとつ紹介したいと思います。

それは「遺跡の三匹の怪物<sup>★</sup>」という短編で、フェイスブック上で発表されたものです。作品の冒頭の部分は、「親愛なる読者さま。私たちのこの物語を、読まないことをお勧めします」という不思議な一文で始まりませう。

シリアとの国境地帯にあるトルコの町に暮らす難民の話です。主人公は難民たちが集まるカフェで、一人の難民の男に出会います。意気投合して、自宅のアパートメントに連れて行って安酒を酌み交わすうちに、実はその男が、遺跡から発掘された三匹の怪物をかたどった小さな石像を、ヨーロッパで売り飛ばそうとしているということを知ります。

主人公はさすがに強く反発しますが、男は、そもそも博物館の周辺で衝突し合っているどの勢力も、遺跡の発掘品を分捕っている、あちら側のニュースもこちら側のニュースも信用しちやいけな。遺跡だけが無事で、人間はひどい目に遭うなんて聞いている。俺は娘におもちゃを買ってやりたいんだ、と酒をあおりながら言い訳をします。

翌日、密売の手配を済ませて大金を手に入れたその男は、上機嫌で主人公を酒場に連れて行って、高い酒をおごった後、車に乗って去って行きます。一人残された主人公は、国のことや人々のこと、戦争のことについて考え込んでしましますが、疲れ果てて自分のアパートメントに帰ります。ドアの前まで来たとき、携帯電話が鳴ります。それは例の男からの電話です。

★ Musīfāt 'Ijī al-Dīn al-Mūsā, "Thalāthat Wafīsh Ahārīyyā", 2016/10/19, [https://geroun.net/archives/67056]

男は何やら恐怖におびえた様子で、主人公にささやきます。「遺跡の三匹の怪物のことを、覚えているか？あのうちの二匹の、ずつとでつかくなつたやつが、今の隣の座席に座っているんだ……」

主人公は笑って、「あいつ酔っ払っているな」と思いながら、電話を切って、部屋に入って、電気をつけます。するとそこには、三匹の怪物のうちの二匹目がいて、恐ろしい形相で主人公を睨みつけていたのでした。そのあと、結末はこんな感じで続きます。

これが、二か月前の出来事でした。そのあと、私と友人は謎の失踪を遂げました。しかし、ほんの数人を除いては誰も、私たちの失踪に気づきませんでした。戦争から逃げてきた避難民が二人、謎の失踪を遂げたからといって、誰がそんなことに気づくほど、暇なものでしょうか。

親愛なる読者さま。私ははじめに、私たちのこの物語を読まないよう忠告しました。もう読んでしまった以上、あなたも、私たちと共犯なのです。

あなたはきつと、何の気なしに、皮肉っぽく、こう尋ねることでしょう。「三匹目の怪物は何処にいるんだろうね」……

私たちのこの物語を読み終わったら、あなたの右側を見てごらん下さい。

そいつはあなたの横にいて、恐ろしい形相であなたのことを睨みつけています。親愛なる読者さま。心から、謎の失踪をお祈りしています。

という、ちよつと怖い話です。怪談じたての短編ですが、いかに不条理な状況の中にあるからと言って、自らの尊厳を売りわたしてもよいのか、という良心への問いかけが、直接の当事者だけでなく、傍観者にも向けられていて、私自身にも突き刺さってくるものを感じます。

### 「シリア人を集団抹殺から救うための偉大なる計画」

『中東現代文学選2016』に翻訳を掲載していただいたムーサーの作品の二つ目は「シリア人を集団抹殺から救うための偉大なる計画」<sup>★</sup>という題名の短編です。この短編は、政府軍の砲爆撃を受けて破壊された街で、包囲された住民たちの話です。体制派の民兵に虐殺されて、シリア人が絶滅してしまうのではないかという絶望的な状況の中で、主人公はすごい計画を思いつきます。

その計画というのは、ドラム缶を一つそのへんから拾ってきて、それにロケット装置を装着して、その中に男の子と女の子を一人ずつ乗り込ませて、宇宙に打ち上げるという計画です。ドラム缶がどこかの惑星に落下すれば、地球上でシリア人が絶滅しても、そっちの星では男の子と女の子が子孫を増やして、新しいシリアが誕生するだろう、というのです。

ドラム缶を拾ってくるという設定ですが、これはシリアの政府軍が反体制派の支配地域を爆撃する時に使用している「たる爆弾」という、ドラム缶の中に金属片と火薬

★ムスタファー・タージュッディーン・ムーサー「シリア人を集団抹殺から救うための偉大なる計画」、『中東現代文学選2016』、110-113頁。  
Musṭafā' Tāj al-Dīn al-Mūsā, "al-Kuufat al-'Azīma li-ḥiqāq al-Sūrīyīn min al-ḥādā al-Jamā'īyya", 2013. [http://www.dahnnon.org/archives/6412]

を詰め込んだ、命中精度が低くて無差別的な殺傷を目的とする悪名高い兵器がありま  
すが、これを連想させます。たる爆弾の不発弾がそこいらに転がっているから、それ  
をひとつ拾ってきて「ノアの箱舟」よろしく、宇宙に打ち上げてシリア人を滅亡から  
救おうという、痛烈な皮肉の込められた設定です。

そんな計画の成り行きを描いた顛末記なのですが、このつづきは、『中東現代文学  
選2016』に掲載されている全訳を読んでみていただけたらと思います。今日はそ  
れよりも、残りの時間で最後にもう一つ、ムーサーの持ち味が活かされた印象的な短  
編を紹介して、おしまいにしたいと思います。

### 「ほつきに乗った魔女との七カ月」

それは二〇一七年に刊行された最新の短編集『美女の最後の友だち』に掲載され  
た「ほつきに乗った魔女との七カ月」<sup>★</sup>という作品で、主人公が自宅の前で煙草を吸いな  
がらため息をついている場面から始まります。

町の市場に行きたいのだけれども、一年前に街区の入り口に軍の検問所が設置され  
たので、行けなくなりました。そのことを嘆いていると、そこへ突然、魔女が舞  
い下りてきます。

魔女は「私が市場に連れて行ってあげよう。後ろに乗りな」と言います。主人公は  
後ろに乗って、と言っても、それは昔話に出てくるようなホウキではなくて、電気掃  
除機なのですが、とにかく乗ります。



『美女の最後の友だち』

★ Mughala Taji al-Din al-Musa, "Sab' al-Akhir al-Awduqat li-Lamra'atun Jumila", *Akhir al-Awduqat li-Lamra'atun Jumila*, Amman: Dar Fada' al-Fan, 2017, pp.87-91.

魔女と主人公は、電気掃除機に乗って、検問所の上を飛び越えて、市場に着きます。主人公は嬉しくなって走り回り、野菜を運ぶ荷車に抱きつき、菓子パン屋のカースイムじいさんにキスをします。楽しいひとときを過ごしたあと、魔女はもう一度、電気掃除機のスイッチを入れて、主人公を家に連れて帰ります。

そのようにして七カ月の間、毎日、魔女は主人公を市場まで乗せていってくれます。主人公は検問所の上を通り過ぎるたびに、唾を吐きかけてあざ笑ったり、魔女の目を盗んで検問所の兵士に上から小便をひっかけたり（兵士はそれを恵みの雨だと思つて喜んだりするのですが）、そういう悪戯をします。

あるとき、主人公は魔女にこう持ちかけます。「町の北の方に女性専用のスイミングプールがあつて、男は入れないのだけど、そのプールの上をちよつとだけ飛んでみないか？」魔女は「この礼儀知らずめ！」と言います。主人公は「ただ見るだけだよなにも、たる爆弾を落とそうと言っているわけではないんだ」と反論します。そうやって言い合っているうちに、思わず雲にぶつかりそうになつたりしますが、魔女は巧みに掃除機をあやつつて、雲を回避します。

そうこうするうちに、ある日、空を飛んでいる最中に掃除機が止まつてしまいました。魔女は叫びます。「バッテリーが切れてしまった。昨日の夜、充電するのを忘れていたんだよ！」

主人公は墜落して激しく体を打ち、意識を失つてしまいました。

一日か、一週間か、一カ月か、どのくらい経つたのか分かりませんが、主人公はそ

の間、恐ろしい悪夢を見ます。……痩せこけた体。とてつもない恐怖、様々なうめき声。狂気に満ちた拷問と、ばらばらの遺体。苦痛の叫び声と、こびりついた血痕。体に流れる電流。悪魔のような笑い声。砕かれた頭蓋骨、折れた骨。人の姿をしたけどものが、真つ暗な地下室の中で人間をもてあそぶ。人間の舌のような形の肉のかけらがひとつ、床の上に落っこちている。腐乱した死体。闇と、ひしめき合う人間と、悪臭……。

目を覚ますと、主人公はソファの上に横たわっています。激しい痛みを感じていません。知らない人々に取り囲まれていて、その人々は、自分の友だちだとか親戚だとか言っています。青ざめた顔の女性がいて、その女性は自分の母親だと名乗っているのですが、周りの人に事情を説明しています。

それによると、主人公は七カ月前、反政府デモに参加した容疑で、自宅の前で拘束され、激しい拷問を受けたせいで、記憶をなくしたのだということです。

母親を名乗る女性の隣には一人の少年がいて、その少年は自分の弟だということです。周りの人に向かって「兄貴のシュプレヒコールは、今までに聞いたシュプレヒコールのなかで、いちばん素晴らしかったんだ」と自慢しています。

主人公は、訳が分からず、何か言おうとしますが、言葉が出ません。どうやら、自分は舌を盗まれてしまったらしい、と主人公は思います。

人々が出ていったあと、主人公は、暗い部屋の中にひとり取り残されますが、しばらくすると、また突然、魔女がソファに近寄ってきます。魔女は主人公の髪をなでながら、ささやきます。「さあ、新しい旅に出ようじゃないか。素敵な、最後の旅に」

魔女に抱きかかえられると、主人公の痛みは消え去ります。バルコニーに出て、主人公を電気掃除機の後ろに乗せて、魔女は掃除機のスイッチを入れます。そして最後の場面になります。

私たちは飛んだ。静かに飛んだ。高く飛んだ。今までよりもっと高く、空の果てまで。

私は、魔女の後ろからこう言った。「電気掃除機の操縦の仕方を教えてくれよ」  
魔女は振り返って、やさしく微笑み、ささやいた。「任せておくれ……、向こうの世界に着いたら、操縦の仕方を教えてあげよう」

「向こうの世界には、女性専用のスイミングプールはあるだろうか。その上を飛べるかな」

「ああ、あるともさ。それに、何だったら……」

私たちはまた、思わず雲にぶつかりそうになった。

## 5 おわりに

と言うわけで、ムスタファー・タージュッディーン・ムーサーの短編の世界を紹介してきましたが、いかがだったでしょうか。

シリアの今の状況について、ムーサーはインタビューの中で、きわめて深刻な状況

だと語っています。民衆の運動としての革命は、アサド体制と過激派勢力につぶされて、一部の地域で細々と頑張っている人たちが残ってはいるけれども、体制と過激派勢力と諸外国のゲームが支配する現状の中で、シリアの人々は片隅に追いやられてるのが現実だ、と言っています<sup>★1</sup>。

そんななかで短編小説を書くことというのはどういふことかと言うと、いわば「牢獄の中で太陽の絵を描くようなものだ」と、ムーサーは言います。でも「太陽」というのはあくまでも空想であって、「牢獄」こそが今の真実なのだという、たいへん苦い捉え方で現在のことを語っています<sup>★2</sup>。

希望などという言葉を、そうやすやすと口にできるような状況じゃない。それほど凄惨な暴力の中にシリアの人々は生きています。そして、声を上げて、世界の人々はあまり聞く耳を持たないという、そのことも、牢獄のような状況を作り出している一因だと思えます。そんな絶望的な状況の中でも、牢獄の壁に太陽の絵を描かずにはいられない、ということなのだ、私は理解しています。

以上で、今日の私の発表は終わりです。ありがとうございました。

★1 'Subhiyya al-A'aa'a Musajala Taj al-Din al-Misat yunasiq Kazhariyya min Majzara', 2014/9/1, [http://soundcloud.com/alanfm/1-9-2014a-1]

★2 'Abdullah Mak-sat, "Musajala Taj al-Din al-Misat: al-Riwaya Raqiba Bid'iyya", al-Narab, 2015/6/29, No.9963, p.15, [http://www.alnarab.co.uk]



## やられてもやりかえさず

——シリア文学における監獄経験の表象

岡崎弘樹

### 1 シリア監獄文学をめぐる背景

私はシリアの監獄文学につき、少し歴史性に入って考察を深めたいと思います。その前に確認しておきたいことが二つあります。一つは、アラブ諸国の最大の問題は、民意が政治に反映されない、あるいは反映されにくい歴史的、社会的構造にあるという私の問題意識です。こうした構造は特に今始まったわけではなく、家父長制に始まる権威主義的な伝統が国家と社会の双方で引き継がれてきたことに加え、近代に入って欧米からイスラエルに至るまでの植民地主義権力による介入、それにもなう国家の恒常的不安定化といった歴史的文脈の中で強化されてきました。本日お話しする一九七〇年代後半以降のシリアの抑圧社会もその典型です。

とはいえ、もう一つ確認しておきたいのは、シリアの近代をみると、多様な言論が生まれた「民主主義の萌芽」と言うべき時期が短いながらも存在したということです。

この点は一昨年出版された英語の研究書『シリアの民主主義的な時代——一九五〇年代の市民、専門家、メディア』<sup>★1</sup>に譲りますが、少なくとも一九六〇年代後半に至るまで、市街に多数の新聞・雑誌が溢れた時代がありました。知的好奇心に満ちた青年らはカフェに集い、政党幹部らの白熱した議論に耳をそばだて、また街区の博識の先輩から、フランツ・ファノン、ドストエフスキー、ユースフ・イドリースなどをテキストに「政治とは何か」を教えられるといった雰囲気がありました。実は本日紹介する二人のシリア人作家イブラヒム・サミュエルとムスタファー・ハリーフア、またその同世代の方々は、「自由の残り香」がわずかながらも依然として漂っていた時代を青春時代に過ごしており、七〇年代後半以降の息苦しさとのギャップもよく分かっているのです。

一九七〇年代後半には、アサド政権はムスリム同胞団への弾圧を強めると同時に、世俗主義者も含めた多数の若者を逮捕しました。アレppo占領（八〇年）で二千人から二千人、ハマ事件（八一〜八二年）で五千から一万人が殺され、政治犯数は計一万余人に上った、と各種人権報告は述べています。五十万人以上が犠牲となっている現在の戦争も、そもそも体制による弾圧がより大規模な形で繰り返された結果であることは疑いありません。現在の戦争下では何万人という人が収監だけでなく、処刑されたと日本の新聞紙上でも騒がれるようになっております。しかし、そもそも最近に至るまでシリアの監獄という課題自体、国外的にもほとんど注目されていなかったことも重要です。たとえば米政府は、一九七〇年代後半以来、対レバノン政策をめ

★1 Kevin W. Martin, *Syria's Democratic Years: Citizens, Experts, and Media in the 1950s*, Indiana University Press, 2015.

▼Yusuf Idrees, 1927-1991.

▼エンブトの劇作家、小説家。日本語訳に『ハラーム（禁忌）』（奴田原睦明訳、第三書館、一九八四年）等がある。

▼Ibrahim Samu'ir, 1951.

▼シリアの短編小説家。一九七七年〜八〇年に収監生活。八八年に最初の短編小説集『重い足取りの香り』を出版後、二〇〇二年までに四つの作品集を発表。

▼Mugatah Khalifa, 1948.

▼シリアの小説家。仏留学後、一九八二〜一九四年に収監。代表作は後に紹介する『巻き貝——のぞき見の日々』。

★2 アサド政権が抗議者やイスラーム主義者を弾圧する中、十ヶ月間アレppo市を軍事占領した事件。

★3 アサド政権がハマ市でムスリム同胞団を中心とした反政府勢力を市民の犠牲もいとわず弾圧した事件。

ぐる有用な梃子としてアサド政権を擁護し、ハマの大虐殺事件についてはノーコメント、九〇年代以降は対イラク戦略の同盟国として位置づけ、二〇〇三年以降においても政治犯問題を基本的に外交圧力の道具として用いるのみでした。<sup>★</sup>

イスラエルやイラクとの関係をめぐる恒常的な緊張や、それに絡み合う大国の利益関係の介入、宗教・宗派によつて複雑な分断線を抱える社会といった域内外のあらゆる要素が独裁政権を延命させる土壌を作り出しました。とはいえ、それに對抗する主要なイスラーム勢力もまた、武力をもつて「やられたらやり返せ」という状況を生み出していきます。他方、国際世論は、混乱を収め得る「強権」の必要悪を擁護してきた一方、その強権による異なる意見を持つ者への徹底した暴力を長らく黙殺してきました。こうした状況において、数多くのシリア作家は、自らの体制にも、勢いを強める主要な対抗勢力にも、そして国際社会にもほとんど何も期待できないという圧倒的な疎外感の中で、何か新たな政治文化を創造する必要性に迫られていたのです。

## 2 一九八〇年代～一九九〇年代における監獄の人間描写

シリアの監獄経験については、共産主義者フアラジュッラー・ヘルウの手記など政治指導者の経験談などは多々出版されています。<sup>★2</sup> また弾圧が激化する前にもマムドーフ・アドワーンやムハンマド・マーグートなどの劇作家や、ナビール・スライマーンといった小説家の作品が知られています。短編小説においても、たとえばザカ

★1 Middle East Watch, *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Assad Regime*, Yale University Press, 1991, pp. 141-145を参照。

★2 ヘルウの暗殺の悲劇については、長沢栄治「アラブ共産主義者の受難」『イスラーム地域の民衆運動と民主化』私市正年・栗田禎子編、東京大学出版会、二一七―二五〇頁）を参照。

▼Mamdūf, *Adwān*, 1941-2004. シリアの劇作家、詩人、批評家。代表作として批評『人間の動物化』(二〇〇三年)等。

リーヤー・ターミルの「十日目の虎たち」（一九七八年）という物語などは英訳され、国際的にも広く知られています。この作品は、檻に入れられた虎が最初は飼育係に牙をむいていたにもかかわらず、十日間の内に徐々に飼いに慣らされ、九日目は肉ではなく草を食べるようになり、十日目には完全に服従した「市民」となるという寓話です。こうした物語から分かるように、一九七〇年代を通してシリア人作家は、自らの国家が強いている抑圧のあり方、あるいは抑圧を内面化し、慣習化してしまう社会のあり方にいつそう注目していきました。本日紹介するイブラヒーム・サミュエルはこうした作家の中でも秀逸な作品を残しています。

『中東現代文学選2016』で訳出させていただいた「面会」<sup>★</sup>という作品は、サミュエルが一九八八年に出版した最初の短編小説集『重い足取りの香り』の最初の作品として収められています。この作品はサミュエル自身が、独裁政権を批判する青年政治組織に加わって一九七七年から八〇年に収監された経験をもとに想像を交えて描かれたものです。彼が収監された際に、妻のおなかに息子が宿っていたことから、ほぼ実体験を題材としながらも、一般性を高めた作品と言えるでしょう。

政治活動ゆえに虜囚の身となった父親が、まだ見ぬ息子との顔合わせに恐る恐る出向く様子をサミュエルは次のように綴ります。

私は、ゆつくりと中庭に向かった。動揺して胸が張り裂けそうだ。「ハルドゥーン」に会うのは初めてなのだ。逮捕された日、妻のお腹は目に見えて丸くなり、

▼Muhammad al-Maghit, 1938-2006.  
シリアの詩人、劇作家。代表作に『私は祖国を裏切るだろう』（一九八七年）等。↓一二二頁

▼Nabih Sulayman, 1945-.

シリアの小説家、研究者。代表作に小説『監獄』（一九七二年）等。

▼Zakariya Tānir, 1931-.

シリアの短編小説家。↓五〇頁

★イブラヒーム・サミュエル「面会」

『中東現代文学選2016』、二〇七—二〇九頁。Ibrahim Samā'ī, "al-Ziyāra", *Rā'iyat al-Khatīr al-Thaqīl*, Damascus: Dār al-Jundī, 1988, pp. 19-25.



イブラヒーム・サミュエル

少し下がり気味だった。それから息子は生まれ、大きくなったが、私はみたことがない。妻は面会の度に連れてくると言い張ったが、頑なに断った。そして最後の面会で折れ、了解した★

このように高鳴る鼓動を抑えつつ、いざ自分の息子と出会うシーンは、次のように展開します。

手前の鉄格子に一步近づくと、奥の鉄格子の向こう側にある部屋から妻が現れた。小さな子供の手をつかんでいる。かわいい。つばの伸びた赤い帽子に頭が隠れている。白い半ズボンからきしゃしゃな二つの足が飛び出している。ベルトから小さなおもちゃのピストルがぶら下がっている。母親から少し離れ、囚人と家族の間で交わされる騒々しい会話にぎよっとしている。少し怯えて、視線をただよわせている。

こちらに近づいてきたので、私はしゃがんで、呼びかけた。

「父ちゃんだよ、ハルドゥーン、父ちゃんだ」

呼びかけた声に驚き、怪訝そうに振り向いた。私の方を、だ！小さな二つの黒い目玉は戸惑いながら、私も応えようがないような問いを投げかけている。鉄格子の隙間から手を伸ばし、用意したビスケットのかけらを渡そうとした。

「ハルドゥーン、ほら。父ちゃんだよ」



『重い足取りの香り』

★イブラヒム・サミュエル「面会」、『中東現代文学選2016』、二〇七—二〇八頁。

一瞬怯えて、後ずさりした。母親の後ろで意固地になっている。母の服をつかみ、顔をのぞかせた。私はみつめ、ほえんだ。だが息子は不満げだ。母はかがみ、促すが、息子はただ足踏みをして離れる様子はない。

母は言った。

「サアド、ちょっといいかしら。聞いて欲しいことがあるの」

私は無視して、再び息子の気を引こうとする。母も優しくせかすように声を上げた。

「ハルドウーン、お父ちゃんに挨拶して」

母の服に顔を埋めて言い返した。

「やだ」

「ハルドウーン、どうしたの、お父ちゃんよ」

「やだ、やだ、違うのがいい<sup>★</sup>」

シリア人評論家マムドーフ・アドワーンは『重い足取りの香り』に巻頭の辞を寄せ、次のように評しています。「政治活動によつて血肉化したにもかかわらず、政治的な言葉が何一つみられない。尋問や拷問、衰弱、英雄などもみられない……サミュエルが短編小説で取り組んだのは、極めて個人的な、生のディテールを描くことだ。そこにこそ、政治的なスローガン以上のヒューマニズムがある<sup>★</sup>」。監獄経験の表象といえは、一方では逮捕や拷問といった恐怖の経験が綴られますが、他方では政治的大義のため

★1 イブラヒム・サミュエル「面会」  
『中東現代文学選2016』二〇八頁

★2 Ibrahim Sami Ti, *Al-Yaz al-Khawa al-Thaqil*, p.11.

にそれに耐え忍ぶ一人の英雄といった筋立てもしばしばみられます。ところが、サミュエルにとって収監という政治的経験の意味を深く教えたのは、こうした過酷な経験やその裏返しとしての英雄主義ではなく、同部屋の仲間との生活ややりとり、また面会といった特別なイベントにまつわる現実の人間模様でありました。

「面会」に現れる息子は監獄とは無関係な外部の世界、あるいは子供の世界に生きており、父親は単なる話に聞くだけの存在でしかありません。「違うのがいい」という幼子の台詞は、刑務所という冷たく重い空間に、ふつと笑いを誘うような、ほのぼのとした空気をもたらすかもしれません。とはいえ、と同時に、親子を引き離す二つの世界の断絶、日常の隅々にまで抑圧社会の矛盾が浸透している状況を映し出しています。さらに妻は妻で何か夫に伝えたいことがあるようですがそれが家庭のこと、あるいは夫婦二人に関すること、もしくは党関係者に託された何らかのメッセージなのかは明示されません。このように登場人物の「すれ違い」を描きつつ、また読者の想像力をかき立てるような展開は、サミュエルの得意とするところです。

監獄の人間模様を扱った作品については、「面会」の他にも、「トイレ」（一九八八年）、「咳払い」（一九九〇年）といったものがあります。これらの作品では、囚人達の日々の生活、そこで生まれる確執や駆け引き、助け合いなどが描かれます。とはいえ、サミュエルは特に監獄の物語ばかりを書いているわけではありません。監獄以外にも大きく二つの舞台設定があります。その一つは、監獄ではないけれども、そのアナロジーとして監視され、抑圧された社会を舞台としたものです。「闇」（一九九〇年）、市バス

に乗り合う乗客が騒ぎ出した一コマを題材にした「人々、そして人々」(一九九〇年)、「低い入口の家」(二〇〇二年)といった作品がその例です。もっと一般的な主題を扱ったものもあります。浮気があったのかなかったのか夫婦の間で緊張した微妙な空気が流れる瞬間を扱った「沈黙」や、泳ぎを知らない山の青年が海におぼれていく「碧き荒野」、父親の死に直面した青年の思いを描いた「親父、なんて言ったんだ?」といった作品等です。

今挙げました監獄ではないが、まるで監獄を連想させるような社会を描いた作品としては、『中東現代文学選2016』でも「闇<sup>★</sup>」という作品を紹介させていただきました。映画上演中に突然停電が起けると、人々が普段口にしなかった言葉や政府への罵詈雑言を並び立てるといった現象を描いたものです。シリアの政治思想家サーディク・ジャール・アズム<sup>▼</sup>は、アラブ社会一般をさして「蒸気のない圧力鍋」に例えましたが、映画館自体が抑圧を内面化し過度に負荷がかかったシリア社会の縮図として描かれたと言えるでしょう。また「人々、そして人々」という作品では、乱暴な運転を続ける市バスの運転手に対して乗客の誰一人も文句を言わず、縦横に揺れ、運命を委ねている状況が描かれます。さすがにおかしいと一人運転手に苦情を言う人物が出てきますが、突如として治安機関員と思わしき人物が割って入り、苦情を言った人物を外に追い出します。それでも乗客は誰も文句を言うことができず、再びバスは大きく揺れながら暴走していくのです。こうした日常の「細部」に現れる社会の「全体性」あるいは「本音」を描くことは、サミュエルの作品に特徴的と言えるでしょう。

★イブラヒム・サミュエル「闇」、『中東現代文学選2016』、二一〇—二二二頁。Dahim Saad Ti, "al-Ansa", *al-Fit' al-Jadida* (Jeddah), 1994.

▼Sadiq Jalal al-Azmi, 1934-2016. シリアの哲学者、思想家。タマスカス大学教授やプリンストン大学客員教授等を務めた。代表作に『宗教思想批判』(一九六九年)等。

なお「闇」は、二〇〇六年にシリア国营テレビの『スポット・ライト』というドラマシリーズで「映画館の出来事」という題名でショート・ドラマ化されました。ドラマでは治安機関の末端と思わしき男が舞台上に現れ、客の一人一人を出入り口に並ばせて政府批判を行った声の主を探るべく、自分に「馬鹿」と言ってみると詰問するといったコミカルなシーンも付け加えられています。その意味で、サミュエルの作品は若手の映像作家にも影響を与える中、二〇〇〇年代以降シリアの教養層に留まらず、お茶の間の空間でも一部楽しまれるものとなりました。

### 3 二〇〇〇年代以降における虚構と記録文学の間

今私は、「お茶の間で楽しまれる」と言いました。このことは決して全面的に評価すべきこととは言えないことも確かです。実際二〇〇〇年代までに一九八〇年代の収監者の多くが釈放され、過去のような露骨な弾圧は目に見えて少なくなりました。その中で、シリアの国营テレビや、体制とある程度折り合いを付けている映像作家らなども、監獄をフィクションの中で取り扱うようになりました。例えばテレビドラマ『愛と戦争のメッセージ』<sup>★1</sup>（二〇〇七年）や、アブドウルラティーフ・アブドウルハミード監督の『サービス圏外』<sup>★2</sup>（二〇〇八年）といった作品が挙げられます。いわば監獄文学が公式言説の中に部分的にであれ、取り込まれたと言えるでしょう。

実際、監獄問題は公に語られ、国民世論の中に組み込まれつつありました。アルジャ



テレビ・ドラマ「映画館の出来事」で描かれる滑稽な治安機関員

★1 *Rating at Hand wa T-Harb*

一九七〇年代後半に冤罪により政治犯として収監された男の脱獄と逃亡の物語。二〇〇七年に放送。

★2 *Khatu al-Taghya*

十年収監された男とその友人、それぞれ妻の間の複雑な関係を描いた物語。

ジーラ等の衛星放送も家庭で視聴でき、汎アラブ紙も市場に入るようになり、インターネットを通じて多様な情報が国内に入り始めたことで、当局側は情報を閉め出すより、ハンドリングし、すり替えるような対処法をとるようになりました。しかし、その一方で、過去の虐殺や拷問の経験、死の恐怖、強制失踪、長期にわたる家族との別離の苦しみ、残された家族の崩壊等々、監獄をめぐる深く重いさまざまな問題が、お手軽に取り扱われるようになりました。日本でも近年見られる現象ですが、監獄言説自体が消費の対象となったのです。このような状況下で、シリアの監獄文学と言える新たな作品が二〇〇八年に出版されました。それはムスタファー・ハリーフアの『巻き貝——のぞき見の日々』<sup>★</sup>です。

ハリーフアは二〇〇三年にこの小説を書き終えたのですが、最終的にダール・アーダーブ社に受け入れられるまで四年以上出版社に出版を断られ続けた経緯があります。ですが、出版後その反響は大きく、その後フランス語版が二〇一二年に、英語版が二〇一六年一月に出版されました。

当作品の紹介に入る前に、ここで扱われる監獄について述べなければなりません。その監獄とは、パルミラ刑務所です。パルミラは世界各国から観光客が訪れる古代遺跡として有名ですが、シリアの政治犯にとっては、長きにわたって「この世の地獄」でしかありませんでした。シリア砂漠の真ん中にあり、夏は灼熱の太陽、冬は凍てつく寒さに襲われます。一九八〇年六月二七日にアサド政権が、ムスリム同胞団員約千人を虐殺した場としても知られています。各種人権報告によれば、部屋の数は

★1 Mustafa Khalifa, *Al-Qanaya*: *Yawmyati Muta'assisa*, Beirut: Dar al-Adab, 2008.

★2 Moustafa Khalifa, *La Coquille: Prisonnier Politique en Syrie*, Actes Sud, 2012.

★3 *co Mustafa Khalifa, The Shell: Memoirs of a Hidden Observer*, Interlink, 2016.

四一、大部屋といわれる五メートル×二〇メートルの区間に、通常で六〇〜七〇人、一九八二年には二百人が押し込まれていたとされます。あまりに非人道的な空間として知られ、二〇〇一年に閉鎖されたのですが、二〇一一年六月に再開され、政府への抗議デモ参加者が収容されました。その後二〇一五年五月、イスラーム国により占領され、爆破されたと各種メディアは報じています。

作者のハリーファ自身、一九七〇年代にフランスで映画を学んだ後に帰国し、空港で拘束され、その後十二年間にわたって収監生活を強いられ、パルミラ刑務所にも送られた経験があります。その意味で自伝的小説とも言えるでしょう。

語り手でもある主人公はキリスト教徒のコミュニティー出身者とされ、世俗的な人間（ムルヒド）と設定されています。この世俗的な人間が、パルミラ刑務所で、ほぼ自分以外全員ムスリム同胞団員の収監者と同居生活を続けます。声を張り上げて話してはならず、人と目を合わせてもいけない。主人公は精神的にも、物理的にもますます引きこもっていきます。物理的というのは、主人公はたいいの場合、毛布をかぶり、僅かに空いた穴から周りの様子をのぞき見る、観察するようになるのです。題名の通り、アラビア語で「自分にカウカアする」、すなわち「殻に閉じこもる」、引きこもりの日々が綴られています。

サミュエルの作品と同じく、ハリーファの作品でも収監生活の様相が多々描かれています。作者自身がフランスで教育を受けた時期もあったので、たとえば、ある日収監者らと西洋とアラブ・イスラーム世界の文明比較論についてこのような議論を行っ



ムスタファー・ハリーファ

たと描写されませぬ。

九月一〇日。

クルアーンや預言者のスンナ以外について、大部屋で初めて議論になった。障害を負った二人を含め十人以上が長い議論に参加した。へあらゆる議論、対話、口論に至るまで、看守に聞かれるのを恐れて、小声で話したものだ。議題は、イスラーム文明と西洋の文明だった。欧州で学んだ医師が口火を切り、欧米における自由や民主主義の例について簡潔にコメントした。議論が長引く中、障害を負った男の一人はこう述べた。

「西洋の文明だつて！ いやー兄貴、周りを見てごらんよ。俺はドイツ製の拷問椅子のせいで体が麻痺してる。こちらのムハンマド・アリーはロシア製の弾丸が脊髄に食い込んで動けない。この刑務所を建てたのはフランスだ。両手を縛る手かせはスペイン製さ。俺を捕まえた将校はベルギー製の銃を握つてた。尋問や拷問を監督する将校はアメリカやイギリス、ロシアで訓練した……これが、西洋文明が生み出したものさ。これに墮落や猥褻、背徳を加えれば、西洋文明が目の前に具体的に現れるつてわけさ」

疲れた声で、無駄な議論を終わらせたいような口ぶりだったのに、彼は相手を言い負かしたいがために、折れるつもりはなかった。だが、医師はこう反論した。「その結論はかなり乱暴だし、説得力に欠けるな。欧米の悪いところまでまねし



『巻き貝——のぞき見の日々』

ようと言つてゐるわけじゃない。欧米には化学や医学、農業や産業の発展があるじゃないか。それに加えてもつと重要なものがある。彼らには人間の自由と尊重があるんだ。僕らが進歩したければ、学ぶべきことも多い。特に人間や自由の尊重。これを学ぶことは、恥ずかしいことじゃないよ」\*

こうした描写は特にハリーフアに限つたものではないですが、欧米VSアラブ世界という紋切り型の世界観、あるいは帝国主義VS民族主義の枠組みで中東をとらえようとすると広く共有された古い見方に対し、一石を投じています。すなわち、独裁権力が植民地権力を取り込み、その視線や「文明」を自らの民衆に対する恐怖支配の道具と変え、かつての植民地主義者と同じく抑圧者・占領者と化しているという問題を、小説の中で表現したのです。

もちろん、サミュエルの作品とは大きく異なるところも多々あります。たとえばサミュエルは拷問を描くことはありませんでしたが、ハリーフアははつきりと拷問の様、その際の心理状況にまで踏み込んでいます。処刑を巡つては、こんなシーンがあります。

ある「処刑式」のことだ。最初に下ろして、首に縄をかけて、引っ張り上げる。八人の内、七人の死刑囚の体が弛緩する。残りの一人は抵抗している。死ぬのを拒否しているのだ。体は垂れ下がって、じたばたしている。皆はしばらく待つが、

★ *Musatah Khalifa, Al-Qawqa'a*, pp. 83-84.

彼の精神は頑強だ。屈する気はない。両足を動かし、体を上上げようとする。待ちに待たされる。息苦しさや重苦しさが皆を襲う。曹長が男の首を右手でさす。吊された体は空中でもがいている。私は毛布の下でぜいぜいと喘ぐ。曹長は叫んだ。

「おい怪物、早く始末しようや。楽にしてやってくれ」

怪物（恵まれた体格を持つボディガード——岡崎注）は歩み出て、下にまわり、下側に力強く引つ張った。吊された受刑者は、たいていそうなのだが、みずばらしい、ぼろぼろの服を着ていた。下側に引つ張られると、服がきゅつと詰まって、受刑者の下半身だけがはだける。怪物はさらに引つ張る。引つ張り続ける。ついに受刑者は死ぬことに成功した。だが、死ぬと同時に肛門が弛緩し、内蔵が、引つ張り続けていた怪物の上に飛び散った。大量の大便と小便だ。汚物が怪物の頭、顔、胸を覆った。怪物は引き下がり、皆を見た。曹長はけらけらと笑った。彼はいち早く状況を理解したのだ。笑いながら言った。

「お前の名前は『怪物』やったが、これからは『うんこまみれの怪物』やな」

みんな大笑いした。私も外に聞こえるような声で笑った。この日から怪物は二つの名前と呼ばれた。彼を恐れ、その残忍さにおののく者は「怪物」と呼び、そうでない者や兵士、看守らは「うんこまみれ」と呼ぶようになった。

兵士や看守の大半は、二年半の軍役についている徴集兵だ。圧倒的多数の者は、地中海沿岸とその山岳部出身者だ。彼らの方言はきつく、行動は荒々しく、がさ

つだ。彼らの中に大都市や主要都市の出身者が紛れることはあり得ない。徴集兵ゆえに、定期的に交代する。軍事警察学校では一年間で二回の研修生が卒業する。すなわち半年毎に新しい研修生が来て、前の研修生は去るというわけだ。<sup>★</sup>

こうした人を殺す瞬間をめぐる露骨でグロテスクな描写は、サミュエルの作品にはみられないものです。さらに言えば、抑圧の末端を担う徴集兵を名指しで、大統領一族と同じ地中海沿岸部の出身であるとして宗教・宗派アイデンティティに言及することもあからさまです。二つのシーンを紹介したので明らかだとは思いますが、そもそも、『巻き貝』は「小説」というよりはむしろ「記録文学」（ルポタージュ）に近いのではないかと指摘もあります。小説ならば主線と伏線が複雑にからまりあい、個々のキャラクターは多面的に肉付けされ、場面や状況も独自の感性を持つて直接的、間接的に綴られます。サミュエルの作品を読んでも、突然カメラがとらえた映像のように視点が転換するような描写が多々見られ、また言わなくてもいいことまで言及されることはありません。ところが、ハリーフアの作品では囚人同士の対話であれ、処刑式の状況であれ、まるで政治評論の一端ととらえられてもおかしくはないほど淡泊な描写です。もしかしたら、手練れの文学者であれば、飛び出した内蔵のディテールに至るまで読者が気味悪がり、恐れおののくような描写をするかもしれません。

実はここには深い問題性が隠されていると考えます。要するに、あまりに厳しい現実にも否応もなく巻き込まれた作家が、自らの経験を文学という形式に昇華させること

★ Mustafa Karim, *Al-Qanqa*, pp. 203-204.

のできる社会的条件は、シリアの場合非常に乏しいのではないかと問題です。たとえば監獄文学の金字塔として十九世紀ロシア文学の巨匠ドストエフスキーの『死の家の記録』があります。サミュエルハリーフア世代のアラブ作家でこの作品を読んだことがないという方は多分いないと思われれます。ドストエフスキーは社会主義サークルに加わっていたことで死刑判決を受けた後に恩赦を受け、四年間の服役経験をもとに当作品を仕上げました。ただここで重要なのは、ドストエフスキーは、すでに『白痴』をはじめとして「職業文学者」として十分な筆力を身につけた後に収監され、出獄後にその経験を描きつつも、その経験からある程度距離をとり、後世に残る文学作品に仕立て上げることができたのです。ところが、ハリーフアの場合、そのような鍛錬を経る前に、過酷な状況に否応なく巻き込まれ、しかも十二年という長い年月の中で、再起の意欲も起らないほど心身共に疲弊してしまいます。それでもなお、なんとか自らの経験を「記録」することから始めるしかない。ハリーフアの「小説」が今のところこの『巻き貝』のみしかない理由もうなずけるでしょう。

こうした課題は、いつそう過酷な現状に置かれた現在のシリア人作家たちの課題でもあります。実際のところハリーフア自身、自らの作品の「文学性」以上に「記録性」を認めつつも、「本当にあったことをすべては書けない」とも述べています。このように実際の経験と文学への昇華との狭間で作家としても、人間としても引き裂かれていくのはシリア人作家に共通してみられる状況だと思えます。

#### 4 監獄文学に一貫するもの——シリアの悔恨共同体

現実と文学の間でシリア人作家は引き裂かれてきましたが、監獄経験の表象が依然として彼らの中心課題であることは疑いありません。もし、一九八〇年代から現在に至るまでのシリアの監獄文学が一貫して目指していた課題があるとすれば、いったい何でしょうか。文学ではなく、政治評論としてパルミラ刑務所の経験を語った取監歴十六年のシリア人作家ヤーシーン・ハーツジュ・サーレハは、二〇〇三年に次のように述べていました。

最後に自分がこの恐ろしい場で過ごした時に強く感じたことを思い起こしたい。それは、この刑務所は取り壊したり、荒れ果てるまで放置してはならないということだ。我々はそれを拷問の道具を備えた博物館、すなわち犠牲者の苦悩を悼む記念碑としなければならない。我々は絶対に忘れない、と宣言するのだ。その記念碑を後悔の記念碑、我々みんなの悔恨の記念碑と呼ぼう。これはまた我々シリア人が起こりうる復讐、心を克服し、殺す者と殺される者が入れ替わるような地獄の悪循環を断ち切るための政治的、文化的、法的、人間的な最初の取り組みだ。この悪循環の犠牲者はみんなだ。国全体なのだ。

パルミラの刑務所は、シリアの恥だ。犠牲者を悼み、この恥を我々皆、平等に分かち合おう。それは過去の責任について平等というのではない。そうではなく、



ヤーシーン・ハーツジュ・サーレハ

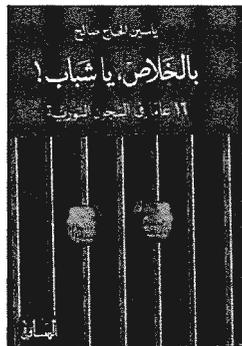
▼ Yassin al-Hajj Saïd, 1961.  
シリアの政治評論家、ジャーナリスト

将来に向かって共に責任を分かち合う用意を確認するためのものだ。<sup>★</sup>

かつて日本の政治学者、丸山眞男は「日本人が、ファシズム化と軍事拡張主義に歯止めをかけることができず自国のみならず、近隣諸国にも取り返しのできない悲劇をもたらしたことを国民全員の『後悔』として胸に刻むことから始めるしかない」と説きました。かかる「悔恨共同体」の思想は、監獄経験を語るシリアの作家にもまた一貫して共有されていたのは確かです。サミュエルが過酷な経験を経ながらも、拷問以上人間を描こうとしたのも、ハリーファが苦渋の選択の中で記録しようとしたのも、つまるところ、「殺す者と殺される者」が入れ替わるような復讐の連鎖ではなく、同じシリア人として悲劇的な経験を共有し、同じ国民としての精神的な共通基盤を見いだそうとする苦渋の知的努力であったことは確かです。暴力に対して暴力で応じず、世論を喚起し続けるための文化的、教育的な方途を模索してきたのです。そしてその努力は間違いない、新世代の作家にも引き継がれています。サーレハは釈放後十五年してまとめた監獄経験の政治評論集の序文で次のようにも述べています。

旧世代の若者とは異なり、新たに反抗した若者は自らの経験を広く伝えるのに十五年以上も待つことはないだろう。彼らは事件の当日からブログに経験を書き込み、広めているのだから。<sup>★2</sup>

★1 Yasin al-Hajj Salih, *Br-I-Khaldas: Ya Shabab* (『みんな、終わりにしようーシリアの監獄16年』, Beirut: al-Saif, 2012, p.28).



『みんな、終わりにしようーシリアの監獄16年』

★2 Yasin al-Hajj Salih, *Br-I-Khaldas: Ya Shabab*, p.10.

新世代の作家たちが、同じシリア人として共に生きたいという思いを胸に、現実と文学の間で引き裂かれてきた旧世代から学びつつも、新たな形式を勝ち取り、新たな文化的抵抗の可能性を見いだそうとしていることは疑いありません。



森 晋太郎



岡崎弘樹

## どこかの誰かの奇妙な話／自分たちの国の話

—シリア人が書くシリア

柳谷あゆみ

本報告では、二〇〇〇年代のシリアの文芸・放送・戯曲などの表現活動について、私が接した限りで、見て取れる特色や傾向を扱いたいと思います。「私が接した限り」ではありますし、特に二〇一一年以降、人々の考えが非常に多様になっている現状を思いますと、これがすべてではないと断っておかないといけません。特殊な一部ともいえないのではないかと思います。

### 1 現代シリアにおける表現活動の特徴

現代シリアにおける表現活動を考える際に、まず念頭に置く必要があるのは検閲の存在でしょう。シリアでは半世紀以上にわたって言論・思想の自由に厳しい制限がかけてきました。これは法的にはイスラエルとの戦争状態にある対外的な状況と、国内における政情不安が背景にあり、挙国一致で危機に当たる必要があるとされたためです。一九六三年に制定され政権への反対行為・思想を禁じた非常事態法は、

二〇 一年に廃止されましたが、すぐに代替法が制定され、現在も検閲による表現・思想への統制は続いています。そのため作家や詩人など、表現者たちが国外脱出を余儀なくされるということも内戦前から続いています。

方、そのようななかで、文学をはじめとする表現活動全般が（現政権の方針・政策の肯定を前提とした）全体主義的な体制への抵抗と捉えられてきたことも長く指摘されてきたことです。現状の負の側面を明らかにし、それを記録していくことで、自立した思考を促し維持していこうとする啓蒙的な役割は、表現活動全般において強く意識されてきたと言えます。

そして厳しい検閲を潜り抜け、問題点を明示していくために、現代シリアの表現活動においては曖昧化の手法が多用される傾向にありました。具体的には①時代・場所・個人を特定しない、②メタファーを多用する、といった抽象化・象徴化の手法がそれにあたります。私がシリアの文学を読解した際にまず戸惑ったのはこの点で、この前提を知らないと、またよく使われる「**い換え**」の構■に気づかないと、ただ抽象的な**■品**を読んだというだけになってしまいます。語弊を恐れずに言えば、いくら読んでも判らない記述があったら、そこにシリアが潜んでいると考えて読み直した方がいいということなのです。

そこでこの報告■では、これらの曖昧化の手法の例と近年の傾向について、いくつかの事例を示したいと思います。手法の話なので、大雑把で表層的な内容ではありませんが、提示と考えていただければ幸いです。

## 2 ターミルとシャーミー

曖昧化の手法の事例として、最初にシリアを描く対照的な二人のシリア人作家を探り上げたいと思います。ザカリーヤ・ターミルとラフィーク・シャーミー（ラフィーク・シャミ）です。シャーミーは、訳書が何冊も出ているので、ご存知の方も多いだろうと思います。二人とも内戦前から拠点を国外に移している在外作家です。そして二人ともシリアを題材とした作品を多く書いていますが、相違点を挙げますと、ターミルはアラビア語でシリア国内にも流通する作品を書いており、本人もたびたび帰国しています。対して、シャーミーはドイツ語で執筆し、作品はシリアで流通しておらず、本人は一九七一年の出国以降、長期にわたり帰国が許可されてきませんでした。この二人が同じ問題を描いた作品がありますので比較してみたいと思います。

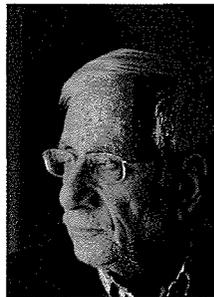
ターミルの「黙る人々」は、姿なき人に殴られ続ける男の話です。一部のみ読み上げたいと思います。

ズヘイル・サブリーは毎日何度も殴られたが、その正体不明の殴る人の姿を見ることはなかった。彼はその密かな平手打ちについて誰にも話さなかった。

だが彼は確信していた。誰もが皆、自分のように殴られていて、沈黙に逃げているのだ、と。

▼ Zakariya Tamiir, 1931.

ダマスカス生まれ。ほぼ独学で学び、一三歳から製鉄工として働き始める。一九五〇年代後半より執筆活動を開始した。一九八一年から拠点を英■に移したが、アラビア語での執筆を継続。二〇一二年にフェイスブックに「拍車(巴士)を設け、新作や所感を発信している。『黙る人々』は『酸っぱいブドウ』(二〇〇〇年) 所収。邦訳『酸っぱいブドウ』は「ねずみ」(柳▲あゆみ訳、白水社)が二〇一八年一月に刊行された。



ザカリーヤ・ターミル  
© Adham Tamiir

▼ Raifa Shamir, 1946.

本名ズヘイル・ファードイル。ダマスカス生まれ。ダマスカスに育ち、一九六六―一九九一年までダマスカス旧市街の壁新聞発行人兼執筆者として活躍した。一九七一年、留学の形で出国し、西ドイツに移住。一九八〇年代からドイツ語で執筆活動を始めた。『蠅の乳しぼり』『マルラ村の物語』(西村書店)など邦訳作品も多数。

本作は、全編にわたって曖昧化の手法がふんだんに使われているので、一読しただけでは何の話なのかよくわからない方もいるかと思いますが。

そこでシャーミーの「怖がらせ屋が怖がる時」という作品を読んでみると、この話のヒントが与えられたような気になると思います。これもごく一部だけ読み上げます。

三年前は政府の密偵が僕らの界隈に引越してきた時だ。(中略)

石工のユセフが一度、大声で政府の悪口を言ったことがある。ユセフはそのあと、三日間行方不明になった。おかみさんは泣いて騒ごうとはしなかった。怖かったんだ。四日■、ユセフは家に帰ってきたけど、両足を腫らして、ろくに歩けず、顔中、アザだらけだった。石切り場で足をすべらせたっていつていたけど、嘘だって、みんな知っていた★。

この二つの話は同じく、治安維持機関による暴力を受けた人間を描いています。書き方が異なる訳です。ターミルの「黙る人々」の奇妙さは、後難を恐れ、暴力を受けた本人まで関与を査定して口をつぐんだという事実によります。彼が殴られた原因についても「独裁体制にある社会主義国家」という背景を考えないとわからないように書かれています。しかし時代や場所についての説明は一切ありません。主人公の名前も仮名で、どこかの誰かの奇妙な話としてこの話は語られているのです。

★ラフィク・シャミ「怖がらせ屋が怖がる時」、『蠅の乳しほり』酒寄進一訳、西村書店、一九九三年、五一頁。

実は、この「被害者が口をつぐむ」という設定には、同じ題材の作品があることからもわかるように、現代シリアで、治安維持機関の暴力を示す定型としての共通認識がほぼ成立しています。それをキーコードとして共有することで、「ああ、あのことか」とこの「黙る人々」という作品は容易に読み解けるわけです。具体性を排しメタファーを多用しても、前提となる認識を共有できていれば作者の意図は伝わります。

また、具体性を排したこの手法には特定の状況を普遍化して示す効果があることも指摘できます。大学の授業でこの話を予備知識ゼロで学生さんに読んでもらったことがあったのですが、なかに面白い指摘をした学生さんがいました。この話はインターネット上での叩きや炎上の構図と似ているというのですね。姿のない攻撃者、コードから外れた発言に対する制裁、確かに共通するところはあります。

具体性を排し、枠組みを取り払ったところに立ち現れる普遍性や広がりといったものがあると思います。ターミルの文学の特徴には、ほとんど奇想ともいえる展開の自由さがありますが、現実の枠から解放されるこの手法が、作家に表現だけではなく、発想においても広がりを生み出す一助となったとも言えるでしょう。

他方でシャーミーは物語の舞台がダマスカスのバープ・トゥーマ地区であることも含め、具体的に誰にでもわかるように書いています。これは彼が非アラビア語圏の人々を讀者に想定し、ドイツ語で書いているという点と無関係ではありません。そして彼の文学のこの「明快さ」が、本作のシリアへの流通や作者の帰国を長く妨げたともいえます。言いにくいことをどのように表現するかは、それぞれ作者の意志と個性が現

れるところです。

「国民の権利と義務」

場所や時代の特定を避けながら、不満を表現している例としてもう一つシリア国营  
TVで放映されたドラマを挙げたいと思います。二〇〇四年から二〇〇五年にかけて  
放送された『1+1=0』<sup>★</sup>というシリーズで、全編が、主役のバツサム・クーサー  
とファーズ・カザクの二人劇という面白い作品です。

第六九話「国民の権利と義務」は、ファーズがバツサムに「国民の権利とは何  
か」と問うところから始まります。

ファーズ ちよつと訊きたいんだけど。

バツサム 訊け。

ファーズ 教えてくれないかな。国民の権利、それから義務って何だろう。

バツサム つまり俺にその意味を説明してほしいと？

ファーズ まあ、もしよかったら。

バツサム ああ、友よ、第一に国民の義務とは法律の遵守だ。

ファーズ ああ、当然だな。国民は法律を遵守すべし。でも、それだけ？

バツサム まあ、ちよつと待て。国民の義務には政府の決定を遵守し、実行す

るということもある。



『1+1=0』ファーズ・カザク（左）とバツサム・クーサー（右）。

★ Wāḥid Zayd Wāḥid, Ma'n Amal

通常は略称の『希望なご (Ma'n Amal)』と呼ばれている。バツサム・クーサー (Bassam Khasanah) とファーズ・カザク (Faysal Kazak) 出演の短編ドラマ。全七三話。シリア国营放送で二〇〇四―二〇〇五年の間に放映された。

ファーイズ 当然、当然だな。だって政府はこれから何が起きるのか何が起きないのかも知っている訳だから。

バツサーム さらに、国民の義務には街の清潔を保つことがある。

ファーイズ ふむ、当然だな。清潔さは文明度だ。忘れちゃいけない、観光のためにも。

バツサーム また、義務の中には、悪いことをする奴や問題を起こす奴、アナキストやテロリスト、文句言う奴なんかを全部しかるべき機関に知らせるってこともある。

ファーイズ もちろんだよ。その手の奴らを見つけないからな。というか、全国民、通報の義務がある。

バツサーム そして、国民の義務には子ども大国になるべくたくさん子どもを産むこともある。

ファーイズ もちろん、そうでなくちゃ。敵に勝利するためには人口数量的にも圧倒しないとね。

バツサーム また、国民の義務には国家とあらゆる喜び悲しみを分かち合うことがある。

ファーイズ もちろん。もし俺たちが進んで政府の味方につかなかったら、喜びにつけ悲しみにつけ、だよ、誰が政府に味方するものかね。

バツサーム 加えて、大変重要なことがある。

ファイイズ それは何だ。

バツサーム 不満をこぼさず誰よりも一所懸命働くこと。

ファイイズ おい、兄弟。不満なんてとんだ罰当たりだよ。それで他には？

バツサーム 国民の最も重要な義務はな、ほれ、デモとか騒ぎとか起こさないこと、いつなんどきも政府に反抗したりしない。治安を乱さないことだよ。

ファイイズ わかっているさ！ 政府は頭を痛めず働けるよう静寂を求めている。バツサーム ま、とにかくそんなところだ。国民の義務の一部をごくかいつまんで言えばな。義務のリストはなんととっても長いから。わかったかな？

ファイイズ ああ、わかった！ お骨折りがとう……さ、残りを教えてくれ。バツサーム 残りって何だ？

ファイイズ 今、国民の義務について説明してくれただろう。で、国民の権利については教えてくれないの？

バツサーム 何？ ……国民の権利？

ファイイズ ああ。国民の権利。……どうした？

バツサーム 今、考えている……俺は……聞いたことが……なに、けんり？

ファイイズ 権利。

バツサーム 権利？

フアーイズ 国民の。

バッサム それは訊いてみないと。詳しい筋に……役人とか学者先生とか賢い人にな。

義務ばかりで権利が蔑ろにされている現状をあからさまに示した作です。セリフの中の「敵」はイスラエルを指すと思われるし、そもそも二人ともシリア方言で喋っているのですが、具体的にはどこの国の何とは言われておらず、一応は「どこの誰かの話」として進行しています。この作品にも現状の問題点や疑問を表明するという批評・批判精神を見て取ることができます。

今から振り返れば文学やテレビ番組は、それを通して「あるあるネタ」のように社会の不満を表明・共有することで、わずかであれガス抜き役を果たしていたともいえるのではないか、と思うのです。

### 3 〈彼〉の死去

先ほどターミルの「黙る人々」を例に、曖昧化された表現を読み解くカギにもなる、定型の構図・設定の存在を挙げました。ここで二〇〇〇年以降に新たに登場した構図の例を挙げたいと思います。

二〇〇〇年六月、現在のバッシャル・アサド大統領の父親であるハーフェズ・ア

サド大統領が亡くなりました。そしてこの二〇〇〇年以降、ハーフェズ大統領の事績を批評的に問いただすことが作家たちの一大テーマとなったことがわかります。

ハーフェズ時代の再評価は後継者のバツシャル政権への批評へと結びつき、さらに自分たちがどのような社会に生きてきて、またこれから生きていくべきなのかという問いをもたらすものになりました。

この「ハーフェズ大統領死後」というテーマを示す構図を、仮に「彼」の死去と呼びたいと思います。

強大な存在であったAが亡くなった後、残されたBはAの美しい記憶を保ちながら、死後に噴出した混乱状況を収めようとするがうまくいかず、身近な他者であるCがBに反発するという構図です。Aはハーフェズ大統領、Bはバツシャル大統領、Cは（特に新しい世代、若年層の）国民を示しています。

この構図とテーマを含む作品として私が最初に認識したのは二〇〇五年の映画『同じ屋根の下で』<sup>★</sup>です。この作品は、マルワーンというカメラマンの主人公と、彼を取り巻く人々を描いています。冒頭でマルワーンの親友アフマドが急死するのですが、アフマドの死後、生前は表面化しなかった故人のさまざまな問題が一気に噴出します。残されたマルワーンはこれらの問題に対処しようとはしますが、問題は一向に解決されず、マルワーンの身の処し方は徐々にアフマドのそれに似かよってきます。そういった話です。

これを「彼」の死去の構図に当てはめて考えると、死んだアフマドがハーフェ

★ *Taha al-Saif*

ニダール・ディアス (Nidal Dib) 監督  
出演はラーミー・ハナーン (Rami Hanan)、アマル・イムラーン (Amal 'Imran) 他。

ズ大統領、マルワーンがバツシャル大統領ということになります。二〇〇五年にダマスカスでこの映画のごく内輪の上映会が開催されたとき（国内では公開許可が下りなかったと聞いています）、監督自身が「まさにシリア的な映画です」と本作を紹介しましたが、この一言も上記のダブルミーニングの存在を裏付けるといえるでしょう。

本作は「〈彼〉の死去」の構図を用いたはしりだったのではないかと思います。というの、先ほど触れた上映会には私も出席していたのですが、構図とダブルミーニングを理解しなかったシリア人の観客がいたのを覚えているからです。当時はまだ見慣れない構図だったのだと思います。

この構図は現在も用いられており、二〇一五年末に日本語訳のリーディングが行われた戯曲『夕食の前に』<sup>★</sup>にも見られます。これは母親と息子、DJの三人劇です。母親と息子が亡くなった父親について盛んにやり取りします。一部を引用します。

母 そうね……話しましょう、でもこんな風じゃなくて。

息子 じゃあどんな風に？ 僕は忘れちゃったんだ。どうやってまた話せばいいのかまた思い出させておくれよ。僕がまだ小さい時に死にしまった父さんが、この両手のまめ以外に何を残してくれた？（中略）それでも、あなたによれば、僕らがこのクソを食わなきゃならない理由になった死んだ父親のために、僕は自分の誇りを大事にしなきゃならないんだろ。

母 （息子を抱く） ごめんなさい。



『同じ屋根の下で』（2005年）

★ *Qadri al-Ashri*,  
ヤーセル・アブー・シャクラ (*Yasser Abu Shakra*) 脚本。本作は、二〇一五年十二月に東京で日本語訳のリーディング劇が上演された（シライケイタ演出、鶴戸聡訳）。

息子（母の抱擁から逃れる）　なんてパフォーマンスだ！　ブラボー！　最初に叩いて次は抱きしめる★。

この戯曲は、こうしたやり取りが何度も繰り返り広げられ、夕食が始まらないという一種の不条理劇なのですが、会話の背景として「彼」の死去」の構図を読み取ると（亡くなった父親ハーフエズ大統領、母親ハッシュヤール大統領、息子シリアの若き民）、彼らのやり取りが二〇〇〇年代のシリア社会を示していることに気がきます。

また今年（二〇一七年）五月に静岡で公演が行われた『ダマスカス While I was waiting』のシーンにも同じ構図が用いられています。主人公の一人、意識不明の状態にあるタイムのそばで、彼の母親と姉が亡くなった父親について話し合います。

タイムの母　残りの人生を穏やかに生きたいの、あの醜聞にかき回されることな  
くね。お前たちを守るために私は皆と戦ったのよ。

タイムの姉　本当にあたしたちが忘れたと思ってるの？　皆が、世界中が忘れて  
いるとでも？　あたしが何も感じず普通の人生を送ったと思う？  
大学にいてどんな思いをしたかわかる？　父さんが突然死んだとき、  
若い妻と一緒だったこと。盗んだお金を隠し持っていたこと。ダマ  
スカス中に話が広まって皆がうちの噂をしていたのを忘れたの？  
何年も恐怖とともに生きてきたわ。

★「ヤーセル・アブーシヤクラ」夕食の前に「鶴戸聡訳、『紛争地から生まれた演劇？』国際演劇協会日本センター、二〇一六年、四七―一九五頁。

★2 Baynana kunu antazi  
オマル・アブーサアダ（Umar Abu Sa'ad）演出、ムハンマド・アッタール（Muhammad al-Matar）脚本。字幕翻訳は柳谷あゆみ。二〇一七年五月に静岡芸術劇場にて上演。

## (中略)

タイムの姉 あたしたちでさえ分かって黙っているのよ。父親が死んだ後もでっ  
ち上げの話に加担して見て見ぬふりをしてきた。あなたが全部やつ  
たのよ、特に娘のあたしを抑圧した。

父親の不行跡が死後に明らかになり、残された母親は「家族を守るために戦った」と主張し、娘は反発しながら「自分たちは父親の罪悪を直視できなかった。自分たちは抑圧され、多くを失った」と訴えるわけです。

この演劇は、暴行を受け、意識を失ったまま瀕死の状態にある二人の青年（タイム、オマル）に現在のシリアを重ね合わせた作品ですが、それでも「〈彼〉の死去」を組み入れることで、ハーフェズ大統領以後を再認識していることが見て取れます。この構図が定型として定着していく過程には、ハーフェズ大統領死去以降の変動を批評的に見直そうとする気運が生まれ、シリアという一つの国の中に生きる人々が、戸惑いながらも現政権と自らの距離や関係を模索している状況が表れているといえるでしょう。そして同じ構図が現在の作品にも継続して使われているところに、この間いが今なお続いていることもわかります。

さらに、これら三作が現在もシリア国内での一般公開が難しく、もっぱら国外で公開されているという事実からは、言論・思想に関する制限が依然として存在する現状が見出せます。



外のどこから始めるんだよ

『ダマスカス While I was waiting』

Photo: RYUO KASAHARA

© 平尾正志

## 4 「■分たちの■の話」

二〇一一年以降、反体制運動に端を発したシリアの混乱が内戦へと悪化していく過程で、多くの人々が出国したことは、表現活動のありかたにも大きな影響を与えています。

二〇一三年からベイルウトで刊行されている文化人・知識人らの著作シリーズ『シリアの証言』には、先ほど森さんのご報告で取り上げられたムスタファー・タージュツディーン・ムーサーの短編集も収められています。シリーズ第一冊の『アブドウルワツハーブ・アッザーウィー』『包囲のモザイク』\*には、冒頭にそれが二〇一二年六月下旬の第二回デリゾール包囲のときの記録であることが明記されています。「いつ」「どこで」「何が」を■体的に明示しながら、シリアについて証言することは、バツシャール政権における思想統制のレベルが変化していない以上、作者や出版者が現体制への妥協がある程度断念したこと、その覚悟を示すものと言えるでしょう。長期的な出国を余儀なくされた人々がかつてなく増加したことで、「自分の国の出来事」を明確に記そうとする表現者もまた多くなっていると言えます。ドキュメンタリーの手法が目立つのも近年の特色です。

自分の国で起きた出来事を、直視して認識し、■体的に記述するという動きは、先述の戯曲『ダマスカス While I was waiting』にも見られます。この戯曲は実際の事件を下敷きにした物語ですが、いっどこで誰が何をしたという情報が、ダマスカス市



『包囲のモザイク』

★ 'Abd al-Wahhab 'Awwād, *Mosaic of the Siege*, Damascus/Berlin: Izzat al-Munajjim, 2013.



『ダマスカス While I was waiting』 関連地図（柳▲あゆみ作成）

内の通りの名前に至るまで克明に表現されています。脚本を読むだけで、あたかも実在の人々のように登場人物の行動範囲が地図として描けるほどです。

このような具体的な記述が多くなったことは、現代シリアの表現活動において長く希求されてきた「シリア国民による自立的な思考」の表れと見ることも出来ますが、事態はそれほど楽観的なものではありません。

今、何が起きているのかを、自らの体験をもとに明確に記録し表現することは、混沌状態のなか、自らの理性と客観性を必死に保とうとする

ぎりぎりの行為といえるからです。

当事者意識を前面に出した「自分たちの国」についての具体的かつ詳細な記述は、混乱と不和が広がる現状に対する抵抗といえます。これは執筆者が自らの状況を把握する冷静さを獲得することで■惑を脱し、立場や考えの違いがむき出しになつてしまった現状を、そしてそれぞれの当事者である隣人や同じ国に住むべき人々を理解しようとする動きです。これらを文学や戯曲の形で発表していくことで、理解や反発を含めた新たなリアクションを得ようとする試みは、長くシリアの表現活動の根にあつたその啓蒙的役割を信じる気持ちに発しており、現在、その成員が分散しつつあるシリアという共同体の未来を形成するための知的な努力であるといえるでしょう。この知的な努力がどのような形で成果を生み出すことができるのか、我々はまだ明確な画を描きだせずにいます。しかし、どのような形であれシリアという国が存続し、その国の人間としてシリアの人々が生きていくために必要となる精神的な支柱は、このような努力によつてこそ生まれ、維持されていくものと私は信じます。

## 瓦礫のなかの希望

—映画『シリア・モナムール』と二つのテキスト

岡 真理

かつて一度だけ、シリアを旅したことがあります。もう三〇年以上も昔になります  
が、エジプトに留学していた学生時代、一カ月かけてギリシアから東地中海の国々を  
回りました。アテネからイスタンブールへ、そしてトルコからアンタキヤ経由でシリ  
アに入り、アレップからパルミラを経てダマスカスを訪れ、ヨルダンへ抜けました。  
アレップの中世から続く旧市街や、街の中心にそびえ立つ要塞、六月初旬の真つ青な  
空に吹き渡る涼やかな風、どこまでも穏やかな空気を覚えています。そして、砂漠に  
立ち並ぶローマ時代の白亜の列柱が夕陽に蔷薇色に染め上げられたパルミラの遺跡、  
ダマスカス郊外のグータの森に湧き上がる清冽な泉……。シリアはほんとうに美し  
かった。そのシリアの街々が、この間の「内戦」で、瓦礫と化してしまいました。千  
年以上も続く美しく歴史的な街道や建物が、シリア人自身の手によって跡片なく破壊  
されてしまうなんて、誰が想像しえたでしょう。

## 1 二つのシリア

シリアには二つのシリアがあります。私の思い出に残る、あの美しいシリアは、二つあるというシリアの片方に過ぎません。柳谷さんが触れられたドイツ在住のシリア人作家ラフィーク・シャミーは、長編小説『ソフィア、すべての出来事のはじまり』（二〇一五年、原著ドイツ語）で、次のように記しています。

あの瞬間に俺は気づいた。シリアには二つのレベルが存在するんだ。上のレベルは平和で、この国は楽■だと思うのは旅行者だけではなく、第二のレベルを知らない限り、シリアの国民もそう思っている。しかしダマスカスの下には地下七階のみごとな地獄の都市があり、広がっている……数■キロにもその都市は広がりを持ち、キノコのようにアドラやサイド・ナウアやタルミアで大地から地上に出る。そこには数十万もの無辜のものの牢獄や収容所がある。この地獄は厳しく運営されていて、この都市の上に住むものはこれについて聞いたり、感じたりすることはない。<sup>★</sup>

（鈴木克己訳）

この地獄の地下都市があるのはシリアだけではありません。それは、地下深く走る活断層のように二つの大陸を貫いて、北はトルコ、東はイラン、西はアフリカのモロッコまで、中東世界の全土に広がっています。二〇一〇年二月、チュニジアで始まっ



『ソフィア、すべての出来事のはじまり』

★ Rafik Schami, *Sophia oder: Der Anfang aller Geschichten*, München: Carl Hanser Verlag, 2015.

た政権打倒の運動がチュニジア一国の革命にとどまらず、一連の「アラブ革命」へと瞬く間に発展していったのはそのためです。

シリアに限らず、王制、共和制の如何を問わず、なべて中東諸国は独裁国家です。ジャスミン革命で大統領の座を追われたチュニジアのベンアリ元大統領は在位二三年、エジプトのムバラク元大統領は三〇年、イラクのフセイン大統領同様、次期大統領には息子を据える腹積もりでした。シリアもまた三〇年近くに及ぶハーフェズ・アサド大統領の独裁ののち、息子のバシシャルが大統領の座に就きました。父子二代にわたるアサド体制が半世紀近く続いています。三人の基調講演者のみなさんのお話にありましたように、民主主義も政治的自由もありません。政治犯の逮捕・拷問は日常茶飯事です。中東現代文学において、岡崎さんがお話された「監獄文学」というジャンルが成立する所以です。今、シリアで生起している破壊と殺戮は、地下の地獄で何十年ものあいだ連綿と続いていた暴力が、火山の噴火によって溢れ出る溶岩流のように、「内戦」によって地上世界に噴出したものと言えましょう。

すべてのことの発端は、シリア南部の街ダラアで中学生の少年が学校の壁に書いた落書きでした——「アジャーク・ツドル・ヤー・ドクトール（次はお前の番だ、ドクター）。「ドクター」とはもともと医師であったバシシャル・アサド大統領を指します。落書きを書いた少年たちは逮捕され、二〇一一年三月、首都ダマスカスで、少年の拘留に抗議して市民が釈放と体制改革を求めてデモを行いました。それは決して、カイロのタハリール広場に集結したエジプト市民が大統領退陣を掲げたような体

制打倒を求めるデモではありませんでした。しかし、市民の平和デモに「革命」の萌芽を看取した若き独裁者は父親に倣います。ハマの虐殺については岡崎さんも触れられました。ハーフェズ・アサド大統領は一九八〇年、ハマの街でムスリム同胞■が「反体制蜂起を行うと、一月弱にわたるハマ包囲作戦で数万もの市民を殺害したのでした。中東現代史に刻まれた、国軍による記録的な■国民大量殺戮です。アサド体制に歯向かおうとする者たちに対する見せしめでした。

ハマの虐殺を骨身に記憶している親世代は、民主化デモの先に起こる悲劇を予感していました。青年たちは、アラブの春風を追い風に、勇気をふるって民主化を求めました。しかし、穏健な抗議運動は、アサド体制による強権的な弾圧にさらされて、独裁体制そのものの打倒を要求するようになります。カイロのタハリール広場を満たした「アッシャアブ・ユリード・イスカート・シニザーム（国民は体制打倒を欲す）」というアラビア語のシユプレヒコールが同じリズム、同じ強度で、シリアの諸都市の街頭を満たし、こうしてシリアは一気に、今■まで続く果てしない内戦に突入していくことになりました。

## 2 エグザイルであること

私が勤める同じ京都の大学の理学研究科で微生物学を専攻し、数年前に博士号を取ったシリア人の留学生がいます。戦闘によって破壊し尽されたアレppoの出身です。

学位はとったものの、内戦下の祖国に戻ることはできず（学業の継続を理由に兵役を猶予されていた彼は、もし帰国すれば即、空港からそのまま軍に連行され、政府軍兵士として戦わなければならないからです）、幸い大学で職を得て、現在も京都で暮らしています。彼の場合、学位をとるのが数年早ければ、そのまま帰国して、猶予されていた兵役に就き、政府軍兵士として戦うことを余儀なくされていたでしょう。そして殺されていたかもしれない、彼の従兄のように。兵役に就いていた彼の従兄は、任期満了になったにもかかわらず、内戦の勃発で除隊が許されず、戦闘に従事し、数年前に命を落としたのでした。政府軍側の兵士として戦う者が、必ずしもアサド体制を支持してそうしているわけではないのです。彼の親族には政府軍兵士もいれば、反政府軍勢力で闘っている者もいるそうです。同胞同士、肉親同士が殺し合う、まさに内戦であるがゆえの悲劇です。日々、瓦礫と化す故郷の街、殺されてゆく友人たち。祖国にいたら、それが彼の運命でした。ほんの数年の時差で彼はその運命を免れませんでした。私たちはそれを「幸運なこと」と言うかも知れません。しかし、祖国で戦禍の中に囚われているのと、大切なものが無惨に破壊されていくのを、ただ遠くから眺めることしかできないのと、人間にとっていったいどちらが耐えがたい苦しみでしょうか。

映画『シリア・モナムール』の監督であるシリア人映像作家、ウサーマ・ムハンマドもまた、亡命先のパリで同様の苦悩の中にいたのだと思います。二〇一一年五月、カンヌ映画祭で政権批判をした彼は、シリアへの帰国が危険なものとなり、そのまま

亡命を余儀なくされました。自国で同胞が傷つき、血を流し、辱められ、命を奪われているとき、エグザイルのもとに置かれたシネアストに何ができるでしょうか。エドワード・サイードは、「エグザイルをめぐる省察」という短いエッセイのなかで、エグザイルとは「人を致命的に蝕む悲しみ」であると書きました<sup>★1</sup>。しかし、ウサーマ監督の場合、単に祖国を去り、文化や言語や宗教が違う異邦の地で生活を余儀なくされているというだけではありません。地中海の対岸にある祖国では、流血と殺戮と破壊があたかも巨大化した化け物のように都市を蹂躪し、人間を日々喰らっているというのに、地中海のこちら側では、そんな現実とは別の惑星の出来事であるかのように、人々はごくふつうに日常を営んでいる。自らが抱える痛みを共有する者もなく、監督は孤独感、疎外感、無力感に苛まれていたでしょう。映画『シリア・モナムール』の前半では、内戦下のシリアの凄惨な状況を伝える動画の数々のあとで、雨に濡れる灰色の街の光景や宙吊りのまま揺れる人間の姿といったイメージショットを通して、エグザイルにあるウサーマ監督の孤独や無力感が描き出されています。

### 3 『シリア・モナムール』と三つのテキスト

そのウサーマ監督が祖国の内戦をテーマに、シリアのクルド人女性、ウイアム・シマヴ・ベデルカーンとともに作ったドキュメンタリー映画が、『シリア・モナムール』<sup>★2</sup>です。

★1 Edward Said, 'Reflections on Exile',

*Reflections on Exile and Other Essays*,

Harvard University Press, 2002. (エド

ワード・サイード『故国喪失について

の省察』へい／みすず書房、二〇〇六年)

★2 Ma'at-Frida

ウサーマ・ムハンマド (Usama

Muhammad) 監督。原題は『シマヴ(銀

の水)——シリアのセルフポートレ

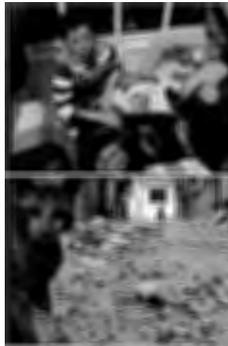
ト』、二〇一四年。二〇一五年の山形

国際ドキュメンタリー映画祭で優秀賞

受賞。二〇一六年、日本で公開された。

作品は冒頭、次のような字幕で始まります——「この映画は、一〇〇〇と一つの映像から構成されている。撮影したのは一〇〇〇と一人のシリア人の男性と女性、そして一人のシリア人女性、それから私である」。続いてウサーマ監督のナレーション、「シャイドワットゥハイ」「私は見た」。そのあとに、シリアの市民たちが携帯などで撮影し、ユーチューブにアップした、内戦下のシリアのさまざまな映像の断片が綴られていきます。政府軍の銃撃のなか通りを逃げ惑う人々、みるみる赤く染まっていく地面、裸にした拘留者をひざまずかせて大統領の写真に接吻させる政府軍兵士、銃撃、流血、殴打、辱め、人間に振るわれる暴力、人間が人間に対して振るう暴力の数々……。

「一〇〇〇と一つ」とはアラビア語で「無数」を意味します。一〇〇〇と一人のシリア人の男と女が撮った一〇〇〇と一つの映像とは、数知れぬシリアの市民が撮った数知れぬ映像、数知れぬ物語ということです。そのあとに続く「そして一人のシリア人の女」とは、シマヴのことです。政府軍に包囲されたホムスの街に、家族を殺されたのちも独りどどまったこの勇敢なクルド人女性は、パリにいるウサーマ監督の「目」となって、包囲下のホムスの街を撮り、インターネットでウサーマに送り続けます。シリアの人々が撮った無数の映像のクライジュとウサーマ監督のモノログで構成される前半に対し、シマヴが登場したあとの作品の後半部分は、彼女が撮影したホムスの映像と、ウサーマとシマヴの対話によって構成されます。数々の記録映像といくつかのイメージショットで編みあげられた『シリア・モナムール』ですが、実は三つの文学的テクスト（二つの文学作品と一つの映像作品）を下敷きにして作られた、きわ



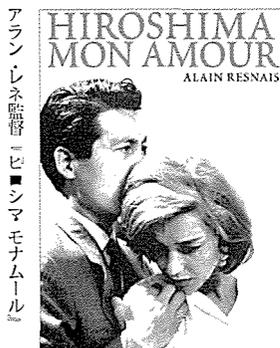
映画『シリア・モナムール』の一場面。

めて文学的な（それゆえ難解な）作品です。作中、明示的、暗示的に言及されているこれらのテキストは、この映画のテーマとも深くかかわっており、以下では、この三つのテキストを通して『シリア・モナムール』という映画を読み解いてみたいと思います。

### 『ヒロシマ・モナムール』——私は見た

映画『シリア・モナムール』は、「私は見た」というモノローグで始まり、後半、男と女の対話によって進行することから明らかのように、この映画はマルグリット・デュラス脚本、アラン・レネ監督の『ヒロシマ・モナムール』（日本公開タイトル『二十四時間の情事』、一九五九年）を意識した作りになっています。作中、シネクラブで映画を観た青年がその直後に殺されるというエピソードがありますが、彼が死の直前に観ていたのが『ヒロシマ・モナムール』だったと語ることで、監督は本作がレネの映画に強く関連づけられていることを私たちに示しています。

レネの作品では、「私はすべてを見た」という女（エマニュエル・リヴァ扮するフランス人の女優、外からやって来た者）のことはばに對し、「きみは何も見っていない」と男（岡田英次扮する日本人の男性、中にいる者）が応答し、そのやりとりが幾度か反復されます。『シリア・モナムール』では冒頭、シリアの外にいる男（ウサーマ監督）が「私は（それを）見た」と語ります。レネ作品のフランス人の女がヒロシマのあちこちに足を運んでさまざまなものを見たように、パリにいるウサーマ監督もまた、



ネットに日々、投稿される動画や写真を通じて故国で起きている凄惨な出来事のあれこれを目撃していました。『ヒロシマ・モナムール』で女のことばに続く男の「きみは何も見えていない」ということばは、直接的な形では登場しません。しかし、本作が『ヒロシマ・モナムール』をなぞっているのであれば、この映画を編る者は「私は見た」というウサーマ監督のモノローグのあとに、シマヴの「あなたは何も見えていない」という声なき声を聞きとるでしょう。では、彼は何を見えていないのか。彼には見えなかった何がシリアにあるというのでしょうか。シマヴが登場する作品の後半部分でそれが遂行的に描かれることとなります。

#### 千夜一夜物語——物語があるの

レネの『ヒロシマ・モナムール』が戦争で傷ついた女の精神的な救済の物語であるように、『シリア・モナムール』もまた、絶望の淵にいた男の救済の物語となつていきます。その救済の物語を語るにあたってこの作品では、『ヒロシマ・モナムール』と並んでもう一つのテクストが踏まえられています。『千夜一夜物語』です。「アラジンと魔法のランプ」や「アリババと四〇人の盗賊」などの話で有名な『千夜一夜物語』は、千と一夜にわたってシェヘラザードが王に語る数々の物語から成り立っています。映画は、冒頭の「この映画は、一〇〇〇と一つの映像から構成されている……」ということばによつて、『千夜一夜』もまた、この作品の重要な参照テクストであることを告げています。しかし、シェヘラザードの紡ぐ物語が冒険譚ありファンタジーありの、



デンマーク出身のイラストレーター、カイ・ニールセン画による『千夜一夜物語』。英独仏語版がある。1001 Nights, Taschen, 2018

好奇心で人を虜にしてやまないエンターテイメントであるのに対し、この映画で語られる一〇〇〇と一つの物語は、断片的で、なおかつ痛ましく、心決るものです。

『千夜一夜』において一〇〇〇と一夜にわたる長大な物語が語られる背景には、妻に裏切られ女性不信に陥り、二度と女に裏切られないために、処女と一夜をともしては翌朝、女の首を刎ねて殺していた残忍な王を改心させるために、宰相の娘シエヘラザードが自ら王の相手をするのを買って出て、王が眠りにつく前に物語を語り聞かせるという<sup>フレイムストーリー</sup>枠物語があります。シエヘラザードは自らの命を繋ぐために、王が次の晩もまた彼女の話を聞きたいと思うような、面白い話を次から次へと語ってゆきます。シエヘラザードが物語を語ることに、そこには、彼女自身の生き延びが賭けられていたと同時に、女性不信の王に愛を教えることで王をも絶望の淵から救い改心させ、そうすることで王の暴虐にさらされている女たちをも救い、血と恐怖にまみれていた世界に愛と平和をもたらしたのです。

シマヅは包<sup>■</sup>されたホムスにとどまった唯一の独身女性でした。『千夜一夜』で市の中の乙女たちがみな、王に殺されるか逃げ出すかしていきなくなり、唯一生き残っていたシエヘラザードが決意を秘めて自ら王のもとに赴いたように、ホムスの街に一人とどまるシマヅが、パリで絶望の底にいたウサーマ監督にメールを送ります——「物語があるの。眠る前に聞いてくれる?」「物語は好き? お話は好き?」。このように二人の出会いを『千夜一夜』の枠物語の結構をなぞったものとして構成することで、本作が現代の『千夜一夜』であることが示唆されています。

瓦礫と化した街で砲撃にさらされながら、命の危険を冒して映像という物語を撮り続け、それを日々、ウサーマ監督に送り、祖国の街で起きているもろもろを彼に語り続けること、そこには、王に毎夜、物語を語り続けるシエヘラザード同様、シマヴ自身の、カメラを通して語り続けることによる生き延びが賭けられていました。そして、シエヘラザードの物語が千と一夜の物語の果てに、心の暗黒のなかに囚われていた王の心を開いて彼を救済するように、シマヴがカメラで紡ぎ出すシリアの物語もまた、亡命の地で同胞の苦しみから隔てられ、エグザイルの孤独を生きながら暗いトンネルの中にいた監督を救い出すことになります。

さらに『千夜一夜』がシエヘラザードと王の愛の物語であるように、本作もシマヴとウサーマ監督の愛の物語となっています。ウサーマ監督はシマヴに言います、「きみは奇跡だ」。『千夜一夜』のシエヘラザードは奇跡をなします。物語ることで彼女は、暴虐非道の王を改心させただけではなく、王の専横により血にまみれていた世界を希望に満ちた平和なものに変えたのです。「千夜一夜」に重ねて描くことで、本作には、残虐な王（シャハリヤールではなくバツシャル「国王」）の専制によって殺戮の続く祖国シリアが、そうではないまったく別の世界になること、そのような奇跡への祈りが込められています。では『シリア・モナムール』における奇跡とはどのようなものでしょうか。



映画『シリア・モナムール』の一場面。被弾し、診察台に横たわりながらも、自分の姿をカメラに記録するシマヴ。

肉体の記憶——すべての夢が裏切られたのちでさえ

この映画ではさらにもう一つ、別のアラビア語の文学テクストが参照されています。アルジェリアの女性作家、アフラム・モスタガーネミーのアラビア語小説『肉体の記憶』<sup>★</sup>（一九九三年）です。映画では、包囲下のホムスの街の、住人に打ち棄てられた家でシマヴがその本を見つけた、という形で、この小説の<sup>名</sup>が作品に明示的に織り込まれています。

砲撃の下、蓄音機でエディット・ピアフの「愛の讃歌」を聞きながら、シマヴはこの小説を読みます。ピアフは最愛の恋人を飛行機事故で亡くしました。「愛の讃歌」におけるピアフの絶唱は、亡き恋人、叶わなかった二人の愛の未来に捧げられたものでした。同じく『肉体の記憶』も叶わなかった愛の物語です。アルジェリアの一党独裁の専制を逃れて、亡命先のパリに暮らす隻腕の画家ハーレドと、祖国アルジェリアに囚われた女性アフラムの愛の物語。主人公二人の関係性に、シリアの専制を逃れて亡命先のパリにいる監督と、祖国に囚われの身となっているシマヴのそれが重ねられていくことは容易に見て取れます。

アルジェリアは一九六二年、八年間にわたる激烈な戦いを通して、一三〇年に及ぶフランスの植民地支配から独立を勝ち取りました。『肉体の記憶』は、その独立革命の夢の化身であるアフラム（アラビア語で「複数の夢」の意）に対するハーレドの報われない愛を通して、無数の命を犠牲にして成就したはずの革命から三〇年、それらの命たちが革命に夢見たものを無惨にも裏切ることになったポストコロニアルのア



エディット・ピアフ「愛の讃歌」  
C ■ ジャケット



『肉体の記憶』

★ Ahlam Mustaphani, *Dhikraat al-Jasad*, Beirut, Dar al-Adab, 1993.

ルジェリア社会の悲愴な現実を描きながら、同時に、革命の先にあるはずだった、今とは別の祖国の未来を夢見て闘い、斃れていった命たちの、痛みに満ちた記憶へと捧げられた作品です。小説は次のようなことばで結ばれています——「僕たち二人のあいだで起きたことはなんと美しかったことか……。起きはしなかったこともまた美しい……。そして、未来永劫、決して起きることはないと分かっていることごとく、なんと美しいのだろうか……」

この主人公のことばに仮託されて描かれているのは、たとえ革命後の現実に裏切られようと、祖国の独立のために闘った者たちが、そのとき、革命の先に夢見ていた自由な新生アルジェリアとは何と美しかったことか、ということなのです。私たちは、すべてが無惨な形で終わってしまったあとでさえ、そうならなかった別の世界を想像することができません。砲撃の続く街で、ピアフの愛の讃歌の熱唱を背景にこの小説が読まれるとき、そこにシリアが重ねられているのは明らかです。この凄惨な内戦の先にあるものが何かは分からない。それは、独裁のない社会、自由な社会、人間が尊厳をもつて生きられる社会を夢見て、命を賭して闘い、斃れていった者たちの夢を裏切るものであるかもしれない（アサド大統領の専制と闘う反体制派がシマヴを拘束するエピソードは、たとえ現体制が打倒されたとしても、その先にある社会もまた抑圧と無縁ではない可能性を示唆しています）。しかし、たとえそうであったとしても、人々がそのために闘い、命を捧げた夢、独裁なき自由なシリアとはなんと美しいのだろうか。冒頭、「私は見た」と語った男に見えていなかったものとは、たとえばこのこと

です。それは、インターネットに氾濫する凄惨な映像をどれだけ集めても見えてこない、もうひとつの真実です。同時にそれは、体制側の、「こんな殺戮に見舞われるくらいなら、大統領を神と仰いで、自由な社会など求めない方が賢明だっただろう」という、大統領に對するまつたき「否」でもありません。

『肉体の記憶』においてアフラームが夢見られたアルジェリアの化身であったように、ウサーマ監督にとつてはシマヴが夢見られるシリアの化身となります。破壊された街にとどまり、被弾しながらも撮影を続け、子どもたちに明日のシリアー―専制や抑圧と無縁な自由なシリアー―を夢見することを教えるシマヴ。そして、彼女のカメラが追う、瓦礫の街のなかでさえ小鳥のようにさえずり、仔犬のように走るあどけない少年オマル。シリアの明日を生きる命の象徴です（本作がこの少年、オマルに捧げられているのはそのためです）。アルジェリアの独立革命のさなかに生を受けたアフラームが、「アフラーム（さまさまな夢）」と名付けられたのは、その小さな命が生きる未来に、革命に自らの命を賭した者たちが抱いたさまさまな夢が仮託されていたからでした。このアフラームと同じようにオマル少年とは、昨日とは別の明日を夢見て殺されていった者たちの、その夢が託された存在です。

森さんがおつしやったように、私たちは軽々に「希望」を口にすべきではありません。しかし、暴力に覆い尽くされたこの世界に、それでもなお人間は明日を夢見て生きることができる、シマヴのように。それこそが希望なのだということ（いや、むしろ、事実はその逆であつて、そのような未来を夢みることを決して手放そうとしない



映画『シリア・モナムール』の一場面。オマル少年。

者たちがいるからこそ、これだけの暴力があるのかもしれない。そして、このこと——未来を生きる子どもたちのために、未来永劫、決して起こりえないと分かっている、しかし、私たちはそれを夢みて、そのために命を懸けているのだということ、そしてシリアで、起きていることは、未だ到来せぬ、未来のシリアへの愛の讃歌だということ。そのことこそ、この内戦が生み出した瓦礫の山と流血の海のなかに、人間が見出さなくてはならないものではないかと作品は静かに語りかけます。韓国の詩人、朴芳解の詩「ふたたび」を思い出します。

希望に満ちた人は

その人自身が希望だ

道を探す人は

その人自身が新しい道だ

素晴らしい人は

すでに彼自身が素晴らしい世界だ

人間の中にある

人間から始まる

ふたたび

人間だけが希望だ

## 『ヒロシマ・モナムール』——比喩としての物語

『シリア・モナムール』はシリア内戦の悲惨だけを描いた作品ではありません。もちろん、観る者に内戦下の悲惨を伝える酸鼻極まる映像の数々には事欠きません。この作品が、シリアで今、何が起きているのか、そこで人間たちがいかなる目に遭っているのか、その痛ましい現実を、シリアの外の世界に、私たちに伝えるために作られていることはたしかです。けれども、それだけではないのです。むしろ、シリア内戦の凄惨な映像がこれだけネットに氾濫し、情報としていくらかでもそれに接することができるとき、今シリアで、人間がこのような死を死に、このような生を生きているとはいったい何を意味するのか、シリア内戦とは人間にとつていったいどのような出来事なのか、それをいかにして遠くの——別の惑星に生きる——他者のもとに伝えることができるのか、そこで起きていることを私たちが人間としていかに想像しうるのか、といった問いの上に作られた作品のように私には思えます。この作品が『ヒロシマ・モナムール』をモチーフの一つとしているのはそのためです。

「わたしはすべてを見た」「いや、きみは何も見っていない」という、外から来た女と内にある男の対話の繰り返しで始まる『ヒロシマ・モナムール』は、その終盤にいたって、なぜ、資料館で観た記録写真や動画でしか原爆の悲惨を知らない女が、そんなにも確信をもつて「私は見た」と語りうるのか、それが単なる女の無知ゆえではないことが明らかになります。女は自らの痛みを通して想像しえたのです、顧みられることのなかった広島島の痛みを、自分の痛みとして。

『ヒロシマ・モナムール』では奇妙なことに、詳らかに語られるのは、広島とも原爆とも直接関係ない、フランス人の女の心の傷です。それはこの作品が、原爆が広島にもたらした直接的な悲惨ではなく、原爆による「痛み」をテーマとしているためです。記録写真に写された無惨な傷跡を見たからと言って私たちは、その者が生きる痛みをそれとして分かるわけではありません。だからこそ物語が必要とされるのです、比喻としての痛みの物語が。ドイツによる占領からの解放を言祝いで、ラ・マルセイエールズが高らかに歌われる傍らで、敵であるドイツ兵を愛したことで祖国を裏切った女として、地下室で独り孤独に、恋人を喪った痛みを耐えていた一五年前の彼女。そのような「罰」を受けることを当然と見なされ、世界から忘却された彼女の痛み。それは、世界が勝利に歓喜していたとき、孤独のうちに、はかり知れない痛みを耐え忍んでいた広島の人間たちの、その痛みへと観る者を媒介し、想像を馳せさせるための比喩としての物語です。「ヒロシマ」という言葉が、「アウシュヴィッツ」と同じように、人間の尊厳を否定する度し難い暴力と、その痛みと苦しみ、そして世界の、あらゆる人間の平和への希求を意味する言葉となった現在においてはなかなか想像しがたいことですが、原爆が投下された当時、アメリカだけでなくヨーロッパにおいても、アジアにおいても、それは歓喜の声で迎えられていたのです。峠三吉が「八月六日」で、

兵器廠の床の糞尿のうえに

のがれ横たわった女学生らの

太鼓腹の、片眼つぶれの、半身あかむけの、丸坊主の

誰がたれとも分らぬ一群の上に朝■がさせば

すでに動くものもなく

……

と描いた、かつては女学生であったそれが、そのとき、そこで体験していた痛み、それは、この女学生らが兵器廠の床の糞尿の上に横たわっていた時も、それから一五年が過ぎ去った時代にも、ヨーロッパにおいては、歓喜の中で、世界から一顧だにされることはなかった忘却された痛みでした。そこに、歓喜に沸き立つ世界のなかで忘却された痛みがあつたことを、ドイツ人兵士を愛し、祖国を裏切った女として孤独のうち痛みの中に遺棄されていたこのフランス人の女だけが知っていた、だから彼女は「私は見た」と語ることができたのでした。だとすれば、『シリア・モナムール』冒頭における、外にいる男（ウサーマ監督）の「私は見た」ということばも、『ヒロシマ・モナムール』の女のことばと同じ位相で解釈することができます。出来事の悲惨が生起しているその只中で出来事をその身で体験していなかったとしても、彼はその痛みを、魂の次元で受け止めたのだということ。とりわけ、祖国が血にまみれ破壊されていく痛みを内に抱えて暮らしながら、彼の周りの者たちは、その痛みにすら気づかない。パリに暮らすウサーマ監督が耐え忍ぶ、その存在すら一顧だにされない痛みと、シリアで起きている出来事を情報としてのみ消費して、世界に顧みられることのない

シリアの人々の痛み。世界から忘れられた痛みの記憶です。

『シリア・モナムール』において、シリア内戦という出来事がウサーマ監督の痛みとそこからの救済という物語に重ねられて描かれるとき、その物語を通して私たちはウサーマ監督の痛みを知り、彼の救済の物語を介して、ウサーマ監督と同じように出口の見えない暗いトンネルの中に閉じ込められているシリアの痛みに触れます。そして、私たちはウサーマ監督とともに見出すでしょう、絶望の中にあつてなお、未来を生きる者たちのために、別の世界を夢見ることを手放そうとしない者たちがいることを。そのようなこそが「希望」だということを。



柳谷あゆみ



岡 真理



第二部 シリアの作家から日本の市民への  
ビデオ・メッセージ

ムハンマド・アッターール



イブラヒム・サミュエル



オマル・アブーサーダ



ウサーマ・ムハンマド





岡崎 ここでは、シリアの作家から日本の市民へのビデオ・メッセージを紹介したいと思います。現在のシリア危機は二〇一一年に始まりましたが、当時私はフランスに滞在しておりました。フランスでも本日のようなシンポジウムは多々開かれていますが、オーディエンスの中に多数のシリア人の方がいらっしやることは通常でした。その中には、作家や研究者の方も数多く含まれていました。日本だとなかなかこうしたシンポジウムで、日本語で説明して下さるシリアの作家や芸術家の方が出席している機会が少ないのが実情です。こうした問題を仲間内で議論していた際に、インタビュー映像を収録したら良いのではという話になりました。ちょうど今年、二〇一七年五月に、劇作家のムハンマド・アッタールさんと演出家のオマル・アブーサアダさんが、静岡芸術劇場にて『*While I was waiting*』の上演のために来日されていました。これに加え、短編小説家のイブラヒム・サミュエルさんは、私が先ほど基調講演で紹介しましたが、個人的にもよく知っている方です。また映画監督のウサーマ・ムハンマドさんは、先ほど岡さんが取り上げました『シリア・モナムール』といった作品で知られている方です。前の二人が三〇代で、直接お話を聞きました。後の二人は六〇代で、スカイプでのインタビューになります。それぞれの専門分野だけでなく、世代的な差異も興味深いと思われれます。収録後に編集し、日本語訳をつけておきます。それではご覧下さい。

## 1 脚本家ムハンマド・アッタール (聞き手 柳谷あゆみ)

Q. あなたの仕事について、つまり現在のシリアを戯曲で書くことについてお話していただけますか。

A. 僕はキュレーターから軽くプレッシャーをかけられて戯曲を書くようになったのですが、今はそれに感謝しています。特にこの過酷でどんどん変化していく困難な時期に、自分のツールを活用することの大切さを知りました。

演劇を通して僕は小さな空間を創り出せる、そこにいろんな観客を呼びこもう、と思ったのです。シリアのことを考えるために、シリアについてさまざまに問いかけるために。

最初はそんな感じで始まったのです。たった一つの公演から。そしてベイルート公演から、アテネ、ロンドン、ブリュッセル……それで僕も自信を持つようになりました。いや、自信じゃなくて、そうじゃなくてこう信じられるようになったのです。「僕は演劇をやりたい。自分のツールを活用したい。自分のツールで真剣に取り組みたいんだ」と。

演劇を通して僕はまず個人的なプロセスとして自分を取り巻く複雑な現状



ムハンマド・アッタール  
Muhammad al-Attar, 1986.

シリア出身の脚本家・ドラマトウルク。ダマスカス大学で英文学を学んだ後、ダマスカスの演劇学校で演劇を学ぶ。二〇一〇年にはロンドン大学ゴールドスミス・カレッジで応用演劇の修士号を取得。『撤退』『オンライン』『親密さ』『シャティラのアンティゴネ』など多くの作品が、ダマスカス、ヨーロッパ主要都市、ニューヨーク、ソウルなどで上演されている。劇作のほかには、雑誌や新聞でシリア蜂起についての記事も数多く執筆しており、アラブ世界で疎外されている人々との演劇を利用したプロジェクトも継続して取り組んでいる。脚本を担当した『ダマスカス While I was waiting』(二〇一六年)が二〇一七年五月に静岡県芸術劇場にて上演された。現在ベルリン在住。

(静岡県舞台芸術センター・サイト記事より引用・加筆)

を解きほぐしていきます。それからその個人的なプロセスを拡大して他の皆を巻き込んでいく。シリアの複雑な現状を解きほぐし、理解していくプロセスを共有する訳です。

あの瞬間から今までずっと僕は思っています。戯曲の執筆こそ、問いかけ、問いを共有していくために僕ができることなのだ。正直、僕自身は答えを出せないでいるのです。本当に。シリアのことを問うときたいい答えが出せない。でも、こうも思うのです、演劇は完全な解答を与えるものではない。演劇は議論するための、問いを引き出すための場だ。関心を引き出し、もっと知りたいと思わせる場なのだ、と。答えを与えてしまったらプロパガンダや声明みたいになってしまうでしょう。演劇は声明じゃない、対話なのです。もう一つ言うべきことがあります。僕自身にとって戯曲の執筆は抵抗の手段だということです。この現状に対処するのはとにかく大変なことです。僕自身、絶望や落胆には抗えません。今、ほとんどのシリア人はただ落胆しています。絶望や落胆と戦っている強いシリア人は少ししかいないでしょう。身近にひどいことがあります、前に進めなくなっています。僕も含めて。

演劇は僕にとって、醜悪で痛ましい複雑な現状に抗い身を守る術であり、僕自身に、そして僕のシリアに次に何が起きるのかを予見するためのものなのです。

Q. 二〇一一年以降、シリアの人々の考えや信条はめまぐるしく変化しています。さまざまな立場や信条の人と一緒に仕事をする際に何を心がけていますか？

A. 反体制運動は、抑圧的な政権に對抗しようと、さまざまな社会層の人々によって始められました。アサド政権側はそれに対して入念に暴力的に対応していききました。それで皆の格差や差異や不和が拡大してしまったのです。不幸なことでした。

これにどう対抗するか、すごくいい答えはないのですが、僕はこう思います。皆が自ら肝に銘じなくてはいいけない。共に存在し続けること、それが運命だと。多分、愛しあったり調和しあったりするのは無理です。だけど共存しなくてはいいけない。あなたもそう感じているでしょうけれど、こんな悲劇が起こった後に、お互いそう簡単に愛することはできません。このダメージから回復して忘れていくためには一〇年、一〇〇年単位の時間がかかるでしょう。だから僕は、シリアの皆が明日、いや近い将来、また愛しあえるとは思っていない。でも少なくとも知っていてほしいと思うのです。僕たちの運命は、共に生きていくことなのです。

正直なところ、『*Damas Kas While I was waiting*』があらゆるシリア人を代弁したものだとは言えません。僕自身、政権側の弾圧に深くかかわった人や過激なイスラーム主義者とは一緒にやっていると思っています。無理

ですよ、向こうも僕を受け入れないでしょう。だから誰とでも一緒に仕事できるとは言えません。

でも、やってみるんです。いろいろな人と一緒に。主義や主張もさまざまでしょうが、それでも少なくとも暴力や人権侵害を良しとしない人であれば、そう、僕たちは争っているけれど、この争いをやめるために解決策を探すことはできるのです。慣れの問題だと思います。日常的に意識しなくてはいいけないのです。

二〇一七年四月三〇日、早稲田大学

## 2 短編小説家イブラヒム・サミュエル（聞き手 岡崎弘樹）

Q. 収監経験は文学活動にどのように影響を与えたのでしょうか。

A. 実際のところ、収監経験が自分の素質を磨き上げる機会となりました。もともと小さい頃からその用意があつたのかもしれませんが、しかし、よく言われるように「マツチ一本が森全体を燃やし尽くす」ことだつてあるのです。監獄は、自分の創作欲に火を付けた最初の灯火だつたと言えるでしょう。そして短編小説という形となつて具現化したのです。

監獄経験が人生に特別の影響をあたえたことは疑いありません。とりわけ、アラブ世界をはじめとする第三世界の政治犯の刑務所は、先進国のそれとあらゆる点において異なるからです。

Q. 何故、「短編」小説なのですか？

A. 確かに、自分は、長編小説や詩、戯曲など様々な文学ジャンルの中でも短編小説を好みます。というのも、短編小説は、非常に僅かな紙幅に短く凝縮されながらも、壮大な考えについて語ることができるからです。あるいは、長引く痛みや夢、大きな希望を、小さな空間で表現できるからです。

時には凝縮された一言、視線、挨拶、合図に多くの意味が込められている



イブラヒム・サミュエル

Ibrahim Samu'el, 1951.

シリアの短編小説家。ダマスカス生まれ。一九六八年以降、国内外のアラビア語紙に次々と作品を発表。大学入学後、ハーフェズ・アサド政権を批判する青年運動組織に加わつたために逮捕され、一九七七年に収監生活を余儀なくされる。一九八八年に最初の短編小説集『重い足取りの香り』を出版後、二〇〇二年までに■つの作品集を発表。湾岸系メディアでもコラムの執筆を続けてきた。一部の作品は、既に英仏伊蘭語などに訳されている。なお、ダマスカス在住の外国人のためのアラビア語教師としても活躍し、日本人も含め多数の学生に慕われてきた。現在ヨルダンのアンマンに在住。

ことがあります。それは、長い説明以上に何かを物語っていることがあります。何かを知るために、多くの言葉を常に必要としているわけではありません。

Q. 文学が社会を変えることは可能でしょうか？

A. 社会は、文学によってだけでなく、芸術も、さらに言えば思想によっても変えることはできないでしょう。独裁政治に支配された社会を真に変えるためには、もつと実践的な行動が必要です。独裁政権に真つ正面から対峙し、犠牲を払い、血を流すことによってしかなしえませんが。

その証拠にシリア革命を引き起こしたのは民衆です。知識人でも、作家でもありません。たとえ、革命に参加したとしてもです。芸術家も革命に参加しましたが、それを引き起こしたのは一般の人々です。立ち向かい、大きな犠牲を払い、依然として払い続けています。自由と公正、尊厳のためです。

ですから、独裁政治が根付いたアラブ世界を根本から変えるのは、残念ながら文学でも芸術でも思想でもありません。これら全てはシリアの現状の中で吹き飛ばされてしまいました。書かれたもの、出版されたものの前に、シリアの歴史や遺跡、国の結びつきなど何ら関心のない独裁政治が立ちふさがったのです。

Q. 何故、小説を書くのを止めたのでしょうか。

A. 重要な質問ですね。喜んでそれに答えたいと思います。真の理由はこういうことです。革命が起こったのは、四〇年間に及ぶ独裁政治を経た後でし

た。シリア人が四〇年にわたって民主主義や公正、尊厳への夢を抱き続けた後に起こりました。ですから、シリア革命が始まった時、国民はあのとおり全てを捧げたのです。

世界の似たような例を挙げてみましょう。たとえば第二次世界大戦は、六年間続きました。正確には六年間と一日続きました。その一方で、シリアの戦争は、七年目に突入しています。すなわち、シリアの戦争は第二次世界大戦よりも長く続いているのです。この例を挙げるだけでも、どれだけの悲劇が起こっているかお分かりでしょう。

その意味で、このあまりに巨大な悲劇の前に、短編小説を書くことは極めて困難です。深く、無数の痛みをとめない、死をとめない、破壊をとめない、破滅をとめない悲劇。独裁、さらに国際的に擁護された独裁による悲劇なのです。このような悲劇の中で、どのように、そして何を書くことができるのでしょうか。

二〇一七年六月九日、アンマンの自宅とスカイプにて

### 3 舞台演出家オマル・アブーサアダ (聞き手 岡崎弘樹)

Q. 二〇世紀後半の旧世代のシリア人劇作家から影響を受けていますか？

A. 当然、大きな影響を受けています。学校や高等演劇学校でも学びました。特にサアダッラー・ワンヌースについては多々学びました。マムドーフ・アドワーンからも直接教わる機会がありました。彼の戯曲からも大きな影響を受けています。

自分と旧世代とは、引き継ぎ、補完するような関係にあると思います。旧世代は、言葉の形式や観客との関係などシリア演劇における重要な課題を常に示してきました。同時に思想的な課題、権力との関係、演劇の役割、社会における知識人の使命、これら全ての課題は、今でも共通し、現在改めて提起されています。現在、我々は独裁や宗教権力など、旧世代が取り組んだ同じ課題に直面しています。

Q. とはいえ、新世代には新たな取り組みがあるのでは？

A. 旧世代との最も大きな違いは、演劇上の言葉です。概して旧世代の大家からは、正則アラビア語(フスハー)を用いてきました。一方、我々は日常的に使われているアラビア語口語(アーンミーヤ)を用います。これは大き



オマル・アブーサアダ

‘Imat Abu Sa’da, 1971.

シリア出身の演出家。二〇〇一年にダマスカスの演劇学校を卒業後、ドラマトウルク、演出家として活動を開始。二〇〇二年に劇団スタジオ・シアター (Studio Theatre) を共同で設立し、二〇〇四年に初演出作『不眠症』を上演。その後『許し』(二〇〇九年)、『シャティールのアンティゴネ』(二〇一四年)などを演出。近年はシリアの伝統と新しい手法を組み合わせた同時代的な脚本や、中東の様々な村の人々との出会いを基にしたドキュメンタリー演劇に取り組んでおり、政治・社会的問題意識に基づいた作品は、数々の国際演劇祭でも紹介されている。現代演劇の劇作・演出ワークショップも開発を行っている。

(静岡県舞台芸術センター・サイト記事より引用・加筆)

な違いです。思考のあり方やその形式、主題の扱い方、物語の取り上げ方、主題や現実、日常生活への目の向け方、それらはすべて新しいと言えるでしょう。旧世代の劇作家は、伝統的な文学や歴史、よく知られた物語に依拠しました。新世代の劇作家は、より日常の現実 に即した物語に依拠しますが、旧世代にはあまりお馴染みのものではありません。

二〇一一年以降については、特に自分の取り組みに見られることですが、ディテールに特化するという傾向があります。記録文学的な形で演劇を作ったり、証言をそのまま用いたり、実際に、シリアの戦争の中で生きている証言者に登場してもらったりします。これらは全て新世代の新たな取り組みの特徴と言えるでしょう。

Q. ダマスカスで生活されていますが、活動は大変ですか？ また、ダマスカスに残っている理由は？

A. はい、ダマスカスで暮らしています。ですが、ダマスカスで演劇活動を行っているわけではありません。ダマスカスで活動しないと、自分で決めました。大変なのは、自分の仕事在国外にあることです。毎回のように移動しなければなりません。実際、いろいろ大変です。劇団員が集うとしても、皆が世界に散らばっていますし。査証の取得や治安機関の許可など、非常に難しいことが多々あります。

ダマスカスに残っているのは、個人的な理由です。シリアは自分の一部で、

▼ Sa'adallah Wannas, 1941-1997.

シリアの代表的な劇作家。『歴史のミニチュア』(一九九四年)等が有名作品。

▼ Manduh 'Adwan, 1941-2004. ▶三〇頁

ここで活動し、国を愛しています。精神的にも落ち着きます。慣習にも親しんでいますので、国を去ることはできません。と同時に、自分個人は他の人々に比べて恵まれており、その機会を活用したいのです。シリア国内で過去と同じように活動できることを望んでいます。

Q. 会場の皆さんに一言メッセージをお願いします。

A. シリアで起こっていることは、世界で生じていることの反映だと思っています。シリアの現状は、世界の縮図です。知識人であれ、関心を持つ人であれ、このことを理解しておかなければならないと思います。またこれに抵抗するため行動することが求められていると思います。これが私のメッセージです。

二〇一七年五月四日、静岡芸術劇場

#### 4 映画監督ウサーマ・ムハンマド (聞き手 岡崎弘樹)

Q 『一步、一步』といった若い頃の作品のモチーフについて教えてください。

A 『一步、一步』ですね。一九七六年から作り始めた作品です。私が二二歳の頃です。『一步、一步』とは、私にとって映画作りに向かう最初の一步でした。真実を撮りたかったのです。私の幼なじみが(レバノンの)テッル・ザアタル・キャンプを包囲しパレスチナ人を虐殺する(シリア軍の)作戦に参加しました。彼からは殺人者の臭いがしました。ですから、彼をカメラで追うことにしたのです。

パレスチナ人は、(犠牲の歴史を背負ってきた)シリア人たる自分にとって、悲劇や抑圧の犠牲となった象徴です。幼なじみは、犠牲者に向かつて銃を撃ちました。まさに犠牲者が犠牲者を殺している、という状況でした。私は『一步、一步』という映画を通して、彼の軍服を脱がそうとしました。それは、在りし日の幼なじみを取り戻す試みでした。

彼は貧しい家に生まれ、性格も良く、しっかりした男でした。ところが、人殺しとなったのです。もともと人殺しの気があったのでしょうか。彼の細胞に、「人殺し」が眠っていたのでしょうか。無邪気な時代の後、出世欲に



ウサーマ・ムハンマド  
Ussama Muhammad, 1954-

シリアのラタキア生まれ。一九七九年に全ロシア映画大学を卒業。シリア国内で数々の映画の監督、副監督、シナリオ担当を務めた後、二〇〇一年にフランスに亡命。パリ在住。短編記録映画『一步、一步』(一九七九年)を製作後、長編劇映画『真昼の星』(一九八八年)で政権支配層と同じ自身の故郷に根付いていた悪しき家長主義、権威主義を批判的に描いた。同作品は、国内公開後即座に上映禁止。長編第二作目の『世界の箱』(二〇〇二年)は、同年、カンヌ国際映画祭「ある視点部門」に公式出品。第三作目『銀の水』(二〇一四年、邦題『シリア・モナムール』)は、同年のカヌヌ映画祭「特別招待作品」に選ばれ、二〇一五年山形国際ドキュメンタリー映画祭で「優秀賞」受賞。後進の育成に熱心なことも知られる。

駆られ、人殺しとなっていった友人の知られていない成長過程を探ったのです。

Q. シリア映画界で孤立していませんか？

A. 権力者らは皆、「自分たちが怖がられている」と思い込んでいました。皆「自分らに反抗する勇気はないだろう」と思い込んでいました。当局は、「俺らこそが圧倒的な力、破壊する力を持っている」と毎日のようにさまざまな形で脅すのです。

私は個人的に冒険好きで、危険を顧みないところがありました。私はいつも自分の中の人間性以上にプレッシャーを感じるものはありません。何よりも自分を尊重しなければなりません。私はいつもワクワクしていました。自分で何かを決める喜びを感じていました。自分を裏切ったり、モラルに反していないという喜びです。

戦いは毎日、一瞬一瞬起こります。意見を言う権利、表現の権利のためです。シリアの映画関係者が示す連帯こそが、力の源でした。一人一人が立場を表明することで、我々は皆それぞれが強くなり、より大きな力を持つのです。

Q. 「政権支配層と同郷で、同じアラウィー派出身なのに反抗的」と指摘する人もいます。

A. (政権を担う) 一部の集団、あるいはその集団の中の一部の集団が抱えている心理的な病気があります。彼らは自分の殻に閉じこもり、狂信的になっ

ているのです。支配層と同じコミュニティ出身とされる私が作る映像作品が、多かれ少なかれ当局を驚かせたかもしれません。

しかし、私の精神は人間主義という立場以外に何にも属していません。(開けた) 知性以外に何も信奉していません。いかなる集団、宗派・宗教、民族、地域にも全く属していません。映画とは、「自由の王国」、そして「解放の王国」なのです。

Q. 二〇一一年春、シリアの映画人はどのように反応したのでしょうか。

A. 二〇一一年春、私の人生の中でも最も素晴らしい瞬間を味わいました。その日、シリア人は、「我々はバアス党文化の奴隷ではない」と表明したのです。シリアは多様な精神文化を有していると表明したのです。しかし、自由と公正の夢は、瞬く間に犯罪者による銃撃と殺戮に晒されたのです。

腐敗は犯罪であり、独裁者は犯罪者です。人間を尊重することは全くありません。政府は二〇一一年、平和的なデモに対してメディアを通じて包囲網を敷きました。そして「テロリスト」というレッテルを貼ったのです。平和的な形で街区に繰り出し、公正を訴えるデモ参加者を殺し、「テロリスト」というレッテルを貼ったのです。

映画人の中には、人間的な立場に背を向ける者もいました。映画人は二〇一一年、完全に二つに分かれたのです。彼らは我々と手を切りました。人間的な立場にも背を向けました。彼らの精神は、自己中心主義と恐怖で蝕

まれていました。公正という価値を省みないほど腐っていたのです。本来ならば、二〇一一年に表明された自由と公正は、全てのシリア人を救い得る未来を可能にする思想であつたにもかかわらず、です。

Q. 新世代の映画監督をどう思いますか？

A. 現在、ワクワクするようなシリア人の多様な取り組みが存在します。毎日のように、世界の誰も知らないような、新しい映画や、新しい映画監督が生まれています。映画は、芸術の世界で自らの足場を確保しています。またシリア映画は、さまざまな映画祭で受賞しています。

私は心から喜び、楽観視しています。若者の映画は、シリアの文化的功績に加わることになるでしょう。もはや、彼らの才能や表現の権利は、腐敗した役人達に制限されることはありません。政府の高級役人など、権力の座に居座り続けながら若手の映画人をなめてかかり、侮辱し、その才能を馬鹿にしている輩がいます。若者だから、社会的地位を築いていないから、あるいは保身ゆえに、馬鹿にしているのです。新しい潮流が成熟するのには、時間が必要でしょう。ですが、私は若者の活躍を喜び、彼らを信じているのです。

二〇一七年六月十二日、パリの自宅とスカイプにて



第三部 パネル・ディスカッション

司会：福田義昭（アラブ文学）

パネリスト（発言順）：前田君江（ペルシア文学・絵本翻訳者）

鵜飼 哲（フランス文学・思想）

ナジーブ・エルカシュ（映像ジャーナリスト）

山本 薫（アラブ文学）

岡崎弘樹（アラブ近代政治・文学思想）

柳谷あゆみ（中世アラブ史・現代アラブ文学翻訳）

森 晋太郎（アラビア語通訳・翻訳者）

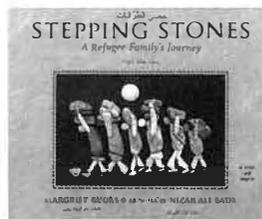
岡 真理（現代アラブ文学）

福田 第三部のパネル・ディスカッションに入ります。司会を務めます福田と申します。よろしくお願いたします。トップバッターは前田君江さんです。前田さんはペルシア文学がご専門ですが、最近では中東内外のさまざまな地域の絵本に強い関心をお持ちで、絵本の翻訳もしておられます。前田さんは、現在シリア国内で石を使った造形芸術を実践しているアーティストについて紹介してくださいませ。その話をうかがってから、パネル・ディスカッションを始めたいと思います。

### シリア難民を描いた石のアート絵本

前田 前田と申します。よろしくお願いたします。今ご紹介いただいたように中東、それから欧米、インドのマイノリティ・ムスリムの絵本などを最近リサーチしています。今、見ていただいているものが、今日、ご紹介したいと思つてゐる絵本です。私ほもととペルシア文学を研究しておりますので、シリアには行ったことがなく、アラビア語もできず、シリアのことも何も知らないのですけれども、いろいろな経緯がありこの絵本に出会いまして、これは日本の出版社から翻訳・出版がすでに決まつてゐるのですが、今日はみなさんに見ていただきたいと思ひます。

ここに「ニザール・アリー・バドル」と書いてありますが、この方が今もシリアのラタキアに住んでおられて、この表紙にあるような石のアート活動を続けています。マーグリット・ルアーズという方はオランダ生まれのカナダの児童書作家です。この



★1 Margriet Ruurs & Nizar Ali Badr (Art Work), *Stepping Stones, A Refugee Family's Journey*, USA & Canada: Orca Book Publisher 2016.

★2 マーグリット・ルアーズ、ニザール・アリー・バドル『石たちのこえがきえる』（仮題）前田君江訳、新日本出版社、二〇一八年刊行予定。

▼ Nizar, 'Ali Badr, 1964-

シリアの西端<sup>1</sup>、地中海に面したラタキアに生まれ育ち、現在も暮らしている。ここで紹介した石を並べて制作するアートのほか、彼が制作する石の彫像も注目を浴びている。なお、ラタキアは、アサド大統領の出身地・支配地域として知られ、彼のフェイスペインタージュからもアサド支持の強い姿勢を読み取ることができるため、本パネル・ディスカッションでも、この点が議論された。

お二方のコラボということで、カナダで出版された絵本です。この絵本が誕生するきっかけとなったのが、バドルさんが毎日自分のフェイスブックにあげている石のアートでして、まずそれをご覧いただきたいと思います。

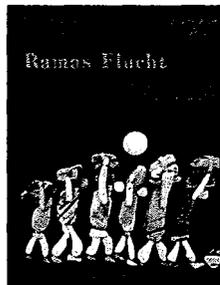
こちらはドイツ語に訳されたときのものです。ラーマーという女の子がこの物語の主人公で、ドイツ語では直訳すると『ラーマーの逃避行』というタイトルがつけられています。このように戦火に追われて国を逃げ出す人たちのイメーজ、表現が、これでもかというように毎日、フェイスブックにアップされています。今見ていただいている作品は、全てこの二カ月の間にアップされたものです。「ここはシリアなのか、それとも牢獄なのか」という、タイトルとか、メモ書きのようなものがアラビア語でついているものもあります。

この作品には「神がシリアとその民を守って下さいますように。湾岸の支配者たちから救って下さいますように」と書かれています。時々、シリアの国の形が出てきて「私はシリアの軍隊を信じている」とか、彼のいろいろな政治的メッセージがついていることがあります。

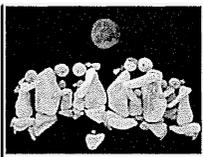
こちらは「シリアの貧しい人々」と書いてあって、とくに最近の彼のフェイスブックには、「貧しい人々」という言葉がよく出てきます。ある日のフェイスブックには、「なかなか昼間に食事をとることができない」、だから昼間にご飯を食べてしまうわけにはいかない、夜に取っておかなければいけないという意味だと思えますけれども、彼のフェイスブックには今、世界中の人たちからのアクセスがありますが、先日、で

▼Margaret Kauris

オランダで生まれ育つ。のち、カナダに移住。児童書作家で、作品・受賞、ともに多数。日本語訳作品に、写真絵本『図書館ラクダがやってくる』子どもたちに本をとどける世界の活動『（さえら書房、二〇一〇年）がある。フリテッシュニコロンピア州のソルトレイク島に在住。



★1 Ramon Fitcher, Ulli und Herbert Günther, Fatih Raficem (trs.), Fritschheim: Gertschenberg Verlag, 2017.

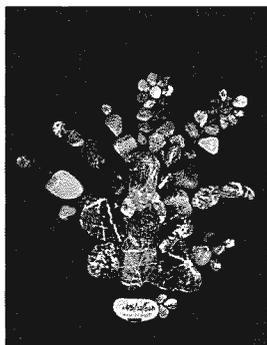


きるだけ食べ物や果物の写真はアップしなくてくれと書いていたことがありまして、非常にリアルな生活の状態が分かると思いました。もう一つ、彼の大きなテーマとしては家族の温かき、もつと広い意味での「愛」があります。これがニザール・アリ・バドルさん本人です。

このような形で、ウガリットの海岸へ毎日出かけて石を集めて、それをアートにしています。こちらは、非常に適力のある花です。作ったアートを膠にかわが何かでくっつけて保存しておくこともできるらしいのですが、それはやはりお金もかかるので彼は基本的に作品を並べて写真を撮ったら、石はバラしてしまうそうです。この二、三年の間は、それをひたすらフェイスブックにあげていくという方法を取っています。

彼が毎日フェイスブックにアップする写真を、この本の原作者であるカナダの児童書作家が目にとめて、どうしても彼とコラボして本を作りたいと、できあがったのがこの絵本『ステッピング・ストーンズ』です。「ある難民の家族の旅」という副題がついています。とても幸せに暮らしていて、自由に市場にも買い物に行っていて、釣りをするなど楽しく過ごしている。けれどもこの国では自由に話すことができない、自由な歌を歌うことができない。「これが幸せと言えるのか、本当の自由と言えるのかな」とおじいちゃんが言う。

そして戦争がやってくる。国から逃げていく人たちがいる。ついに家の近くにも爆弾が落ちてきて、お父さんとお母さんは国をあとにすることを決めて、ずっと砂漠を歩いていく。海も渡ってそこでは死んでしまう人たちもいた。ようやく平和な地に着

★  
1★  
2

いたのですが、そこでその国の人たちの言葉を理解できない。ずっとここに留まるのか、いつか帰れるのかまったく分からない。

今日の四つの基調講演に出てきたようなシリアの現状、シリアの固有性のようなものは一切そぎ落とされて、単純化されすぎてしまったようなストーリーですけれども、そうであるからこそ彼の石のアート、石が放つ深遠な表現力のようなものを味わうことができるのではないかと思います。ずっと見ても飽きなくて、石の何とも言えない表現力が非常に興味深いのです。

それからこの絵本はカナダの出版ですけれども、このストーリーと原作者の序文、セールの仕方と併せてみると、現実には直面している課題に何とか対処しようとしていることが分かります。シリアの今の人道危機に人々の関心を集める。カナダに続々とやってくるシリア難民に対しての資金的な支援を行う。そういったところにフォーカスした絵本の出版の仕方になっていて、実際に難民支援団体を通じてかなりの部数売れており、現時点で三万ドルが難民支援のために寄付されたと、この出版社のホームページには書かれていました。

この一カ月ほどの間にあちこちで、まず北欧のほうで彼のアート、絵本に関する展覧会やイベントが行われて、今パリでも開かれていますし、フランスの別の都市でもやはり展覧会が行われています。彼のアートに詩を寄せた詩集もフランスでは出ています。ドイツでは、難民のムハンマド君という男の子がこの絵本の関連イベントで登壇しました。同絵本は、ドイツ語訳とともにアラビア語訳がついていたのですが、そ



★ 現代アートを学ぶ学生らとシリア芸術協会によって、パリで共同開催された、ニザール・アリー・バドル、および難民となったアーティストらの作品展「故郷——ここ、あそこ、どこかに？」(2017年6月14～20日)のポスター

のアラビア語の部分をもハンマド君が読むといった一幕があったようです。

こちらは、この『ステップング・ストーンズ』が、カナダ全体ではなく、ブリティッシュ・コロンビア州のブックプライズを受賞したときのものです。絵本部門での文学賞（クリスティ・ハリス絵本文学賞）です。このように、マーグリット・ルアーズとニザール・アリー・バドルによる絵本としても高く評価されています。同時に彼のフェイスブックが拡散する力といえますか、石のアートに惹きつけられた人たちが今あちこちで、触発されて新たな表現を試みたり、展覧会を開いたりしています。

先ほど日本でも翻訳出版が決まっていると申しましたが、どうやって翻訳したらいいかをいろいろ考えました。今日、みなさんが登壇者の講演のなかで聞かれたような話を、この絵本に盛り込むことはできないわけです。戦火を逃れて国を出た人たちがいる。その人たちが自分の国から離れたところで苦しんでいる。そういった非常に単純化されたストーリーをどうやって訳すか。このまま翻訳してしまうと、どこか遠い中東の危険な国からヨーロッパのどこかの国に逃げて行った話で終わってしまうので、何か日本と結びつける方法はないかと考えてみました。

日本に来るシリアの方は難民申請という形を取ることも少なく、日本でコミュニティを作ることも非常に少ないらしいのですが、関西のある都市で四〇人程度のコミュニティのような形で住んでいるところがあります。そこに住むある女性とコラボで翻訳しようという話を進めています。あとは日本語教師という形でシリアの日本語教育に携わって、日本にも勉強のために来ていたのですが帰らざるを得ず、日本語教



★クリスティ・ハリス絵本文学賞、2017年最優秀賞を受賞。

育の道も戦争によって閉ざされて今もダマスカスに住んでいる女性と、やはりコラボでやってみようという話を進めています。

このストーリーは非常に単純化されたストーリーなのですが、そういう方々に関わっていただくことで、彼らがつライフヒストリーの固有性のようなものを、ほんの少しでも、たとえ一ミリでもこの本に載せることができればいいのではないかと思っています。ありがとうございました。

福田 前田さん、ありがとうございます。では前半の基調講演をされた森さん、岡崎さん、柳谷さん、それから岡さんに加えて、今、石のアートをご紹介くださった前田さん、それからシリア人ジャーナリストとして活躍されているナジブ・エルカシュさん、そしていろいろなお顔をおもちだと思えますが、きょうはフランス文学研究者として来ていただいている鶴飼哲さん、それからアラブ文学が専門の山本薫さん、これらの方々にいろいろお聞きしたいと思います。

今まで前田さんを含めて五名の方のお話を聞き、中盤にはシリア人アーティストのヴィデオ・メッセージを見ましたけれども、これらに対するコメントを、まず鶴飼さんからお願いします。

### 同時代の状況としてのシリア

鶴飼 ご紹介いただきましたました鶴飼です。いろいろな顔と言われて、ほかの私の顔はど

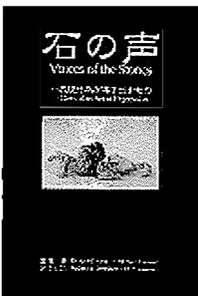
んな顔かと想像していました。

今日のご発表、そして今見せていただいた前田さんの『ステッピング・ストーンズ』の映像まで含めて、本当にたくさんの方があって、いろいろなことを私も思い出しています。後半のほうで見せていただいたもので二つ、まず石のアートを見せていただきます。後半のほうで中東に関心をもってきた人間にとつて、石というインティファダ<sup>★</sup>なのです。八七年の一二月から第一次インティファダが始まりました。パレスチナのインティファダは石の革命と言われて、圧倒的に優位なイスラエル軍に対してとくに若者、少年たちが投石で占領に抵抗する。ヤセル・アラファトが「石の革命」と呼んだこの戦い、最初のインティファダというのは基本的に石が武器だったわけです。

それで石というと、最後に前田さんがいくら見ても飽きないとおっしゃっていますけれども、同時に一個、一個の石というのはおそらく世界のいろいろなところで、どこか死者の魂のようなものにも繋がるといふこともあるのではないかと思います。沖繩の佐喜眞美術館<sup>さきま</sup>の前で、沖繩戦の死者と同じだけの石を集めるというプロジェクト<sup>★</sup>が何年か前に行われたこともあり、今回の石のアートにはインティファダのときの石とかなり違った、すでに七年目に入ったシリア内戦のなかで亡くなった人たち一人ひとりの存在のようなものが投影されていて、そのことがやはりいくら見ても惹きつけられたままになってしまふ。そういうことになっているのかもしれないと思っていました。

★1 イスラエルの占領に抗する占領下のパレスチナ民衆による一斉蜂起。

★2 「石の声」アートプロジェクト。  
一九九六年六月、のべ四日間にわたり、米軍普天間基地に隣接した佐喜眞美術館前広場で、沖繩戦戦没者の数と同じ二二六〇九五個の石一個一個に連番を書き入れ、積み上げた。



同プロジェクトの記録。  
佐喜眞美術館。

それから私は、実はシリアには一回しか、しかも一日しかいなかったのです。ダマスカスです。インティファダは八七年の二月から始まるのですがそれから数カ月後、八八年の三月に初めて中東に行ったときに、最初はヨルダン、シリア、そしてレバノンに行く予定で出かけました。ところがヨルダンに着いてみるとアレンビー橋を渡ってパレスチナに、西岸に入れることが分かって、急遽、予定を変えて、シリア滞在を短くして、レバノンには行かないことにして、パレスチナに初めて行ったわけです。そういうなかでアンマンから乗り合いタクシーでダマスカスに行きました。シリアとヨルダンの国境の町が先ほど岡さんの話のなかにも出てきたダラアですので、ここを通って行きました。

なぜそのときに中東の旅をしたかという点、私はジャン・ジュネという作家を研究して、ジュネの晩年の作品は、『シャティエラの四時間』や『恋する虜』など、基本的にパレスチナに関わるものが多かったわけです。とくに『恋する虜』はシリア、ヨルダン、レバノンが主要な舞台です。彼が活動したのはそういった地域で、パレスチナ占領地には一度も行ったことがありませんでした。こうした地域を訪ねてみないと翻訳ができないと考えて、いわばジャン・ジュネの足跡を訪ねる旅をしたわけです。ところがジュネは、実は晩年のパレスチナとの関わりだけではなく、一八歳のときにすでにダマスカスにいたのです。彼は少年院に一八歳までいて、二年、収容期間を短縮するために軍隊に入ります。そして最初に派遣されたのが、当時フランスの委任統治領だったシリアだったわけです。グーロー将軍による爆撃によって破壊されたダ

▼ Jean Guinat 1910-1986.

フランスの小説家、詩人、劇作家、活動家。



ジャン・ジュネ『シャティエラの四時間』、鶴岡哲訳、インスクリプト、2010年。



ジャン・ジュネ『恋する虜』、鶴岡哲・海老坂武訳、人文書院、1994年。

▼ Henri Gouraud, 1867-1946.

フランスの将軍。シリア方面軍司令官として、仏土戦争（一九二〇・二二）においてダマスカスを占領。フランス委任統治下のシリア・レバノンの高等弁務官となる。

マスカスの廃墟のなかで、しかし夕方になると兵舎を抜け出して、シリア人たちと朝までトランプをやっていたというエピソードがあります。

それでは、先ほどのヴィデオ・メッセージでオマル・アブーサアダさん、今もダマスカス在住の演劇人の方ですが、彼は自分が学んだ人の一人に、サアダツラー・ワヌヌスの名前を挙げていました。このワヌヌスさんも当時、非常にジュネと親交が深かった人で、ワヌヌスの回想記をフランス語から訳したこともあって、こんなところでこの人に再会したことに驚きました。

森さんからご紹介いただいた短編の、ムスタファー・タージュディーン・ムーサー、この人は本当に若くて八一年の生まれです。それこそまったく新しい世代の作家だと思うのですが、「虐殺の花束」など本当にすごい作品だと思いますし、とりわけ「遺跡の三匹の怪物」は、読むなどいうところから始まるのですけれども、森さんは読むだけではなく訳してしまったということになると、いつ失踪しても不思議はない、大丈夫かなと思いつながら見ていました。

文学作品は、とくに虚構作品の発明は、どのように読者に呼びかけるか、フィクションの内と外をフィクションによってどのように設定するかが、まさに腕の見せ所だと思ふのです。この作品は森さんのお蔭で、日本人の読者が日本語で読むとまさに内と外の区別がなくなってしまうわけです。先ほどオマル・アブーサアダさんが言われていましたけど、今、シリアで起きていることは世界の縮図です。ということは、われわれがここで今生きている状況は、シリアとまったく無関係ではないわけです。この

▼ Sa'adallah Wannat, 1941-1997. ↓ 九五  
頁

★ サアダツラーフ・ワヌヌス「伝説と鏡のかたに」、鶴飼哲訳、『ユリイカ』321号、一九九二年六月。

ムーサーの作品は端的に、数行読むだけでわれわれをその認識に導いてしまう。そういう大変恐ろしい文学作品だと思いました。

続いて岡崎さんのご発表の感想に移りたいと思います。私はフランス文学の研究者で、残念ながらアラビア語を学ぶ機会がなかったのですが、間もなく定年ですので、残った人生でできるだけ学びたいと思っています。言葉がアラビア語なのです。まずこのタイトルに本当に惹きつけられてしまったのです。「やられてもやりかえさず」というこのタイトルを見てピンとくる人は一定の年齢の方だと思います。きょう前半の最後に岡さんが論じられた『シリア・モナムール』という作品は、要するにあの映像を撮った無数の映画監督のうちの何人かは殺されてしまっている。殺された映画監督の映像がなかに含まれている作品です。

こういう作品を私もよく知っています。八〇年代に山谷の労働運動に関わって映画を作った佐藤満夫さん、山岡強一さん、この二人は当時、山谷の手配師を支配していたヤクザに殺されてしまったのです。彼らが作った『山谷<sup>やま</sup> やられたらやりかえせ』(一九八六年)という映画があつて、この映画を留学時代にフランスで紹介したことがあります。おそらく岡崎さんもこの作品をご存じで、それをひっくり返して「やられてもやりかえさず」というタイトルをつけられたのだと思います。このことの意味を、私も先ほどからいろいろ考えているのです。

この経験の向こう側では同じシリア人、同じ国民としてある意味、ここは本当に難しい政治討論になると思うのですけれども、バツシャルでなければ何でもいいとい



「山谷」制作上映委員会編・発行  
「山谷 やられたらやりかえせ」一九八六年

うことになるのではなくて、その先をどう作っていけるのか。そういうことが重要になってきていて、それをむしろもう少し前の時代の監獄文学のなかに、そうした思想のあり方を探るといことが、一つ、この「やられてもやりかえさず」とタイトルを付けられたことの含意なのかなと思いつながら、非常に興味深いお話をうかがいました。柳谷さんにご紹介いただいた作品のなかにも、曖昧表現の駆使ということがあつて、これはもちろんシリアで初めて始まったことではないし、日本でも戦時中にトイレに、表向きはイギリスの戦闘機を落とせという意味で「英機を倒せ」とあれば、これは東條英機の意味だったのです。そういうことはいろいろあつたわけです。

一日だけシリアにいたときに、先ほど地図を見て当然ウマイヤ・モスクは行っているわけですが、そのほかに非常に記憶に残っているのはアルメニア人の居住地区にさまよい込んだことです。そこで金細工師の方が声をかけてくれて庭でお茶をご馳走になりました。当時、八八年ですからソ連はゴルバチョフの時代で、アルメニアは間もなく独立するのではないかと言われていたときです。アルメニアが独立したらシリアのアルメニア人は帰るだろうかと言われたら、そのときのホストの人はシリアのアルメニア人はシリアをとっても愛しているので、おそらく帰らないだろうと言われたことを非常によく覚えています。あのコミュニティの人たちは、今どうしているだろうと時々思います。

最後に、岡真理さんの発表については、本当に語らなくてはいけなことがたくさんあるのですが、二点だけ申します。原題『銀の水』、日本語のタイトルは『シリア』

★西暦七〇五年、ウマイヤ朝第六代カリフにより建立。ローマ時代の神殿がビザンツ時代にキリスト教会になり、アラブ・イスラームの征服後、モスクに改装された。現存する世界最古のモスクの一つ。

モノムール』となっていてるわけですが、この作品はある意味、映画についての映画でもあると思うのです。今や誰もが映像を撮ることができる時代に、こうした出来事ที่เกิดขึ้นればたくさんの映像が生まれてくる。この状況のなかでシリアの人たちはどのようにこの出来事を生きていくのか。

私もフランスに留学していたときに、先ほどもお話したようにちょうどパレスチナ占領地でインティファダが始まった時代でもあったわけですが、これも申しあげたようにアラビア語は身につかなかったのですが習っていたことはあるのです。その先生はシリア人の亡命者でアレppo出身の方でした。本当に素晴らしい方で、今も難民の支援に奔走されているのですけれども、ここで日本との同時代性ということを考えたいのです。

アラブの春は日本では、二〇一一年三月の地震、津波、原発事故の時期とまったく重なっているわけです（9・11とのつながりがありますがあまりに強すぎるので3・11という言い方はなるべくしないようにしています）。当時メールのやり取りがあつて、シリアの状況について私の友人がたくさんのメッセージや映像を送ってきてくれました。ある日、注釈なしという注釈つきで二枚の写真が送られてきました。一枚は、シリア軍の兵士がシリアの民衆を踏みにかけている写真、もう一枚は津波のあとの瓦礫に日本の自衛隊員が腹ばいになって、その上を子どもが歩いている写真です。つまり同じ軍隊といつてもシリアと日本はこれほど違うのだ。要するに、シリアの軍隊がいかにひどいかということの例証として発信していたのです。これにどう応答すればいいのか

分らないくらい、困惑してしまっただけです。

というのもあの救援活動には米軍も「トモダチ作戦」という形で入ってきていましたし、実はイスラエル国防軍の医療部も入っていたのです。一九九五年の阪神淡路大震災と違って二〇一一年の地震は、ある意味その一年前のハイチで起こった地震と同じように、世界中のさまざまな勢力がすべて救援に駆けつけてそれぞれ政治的な目的を追求する。そういう場になりました。直前には沖縄でアメリカの領事が大変な差別発言をしていたのですが、東北の被災地の人たちは米軍に救われることで沖縄の人たちと分断される。そういうことが起きている最中に、シリア人の友人には、自衛隊の姿は民衆と軍隊の関係はこうあるべきだという模範に見えていた。この状態をどうしたらいいかということはずっと考え続けているのです。

『ヒロシマ・モナムール』について一つだけ指摘すると、この映画は大変複雑な映画ですが、いずれにしてもまず思い出しておかなければいけないのは、この映画が制作された一九五八年には、フランスはまだ核保有国ではなかったことです。これはみんなこの映画を論じるときに忘れてのことです。デュラスはフランス共産党員で、当時の世界的な平和運動に参加していたのです。ところがこの平和運動のなかで明らかになったのは、第二次世界大戦の記憶というのはヨーロッパ戦線とアジア太平洋戦線ではまったく繋がっていないということでした。とりわけ冷戦という事態のなかでまったく繋がらなかった。つまり、一つの世界記憶としての第二次世界大戦はないわけです。この現状に挑戦するようなことを映画ができないかということが、デュラス

▼Marguerite Duras, 1914 - 1996.

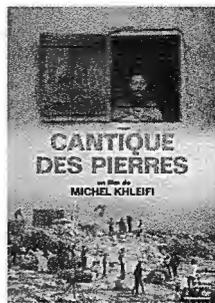
フランスの小説家、脚本家、映画監督。  
『ヒロシマ・モナムール』の脚本を担当。

とレネというコンビがチャレンジしたことだと思えます。

この問題は今どうなっているのか。アメリカにトランプという大統領が出てきて、この人はツイッターをやることと、ミサイルを撃ち込むことはまったく同じだと思っている人です。彼が習近平とのデイナーの間にシリアにミサイルを撃ち込む。そのことに北朝鮮が反応し、東京の地下鉄が止まるわけです。けれども日本で北朝鮮が問題とされるときに、シリアのことは誰も考えません。この状況を何とかしなければいけない。そのこととはある意味『ヒロシマ・モナムール』が、当時、日本人にはまったく伝わらなかったのですけれども、あの映画が取り組もうとしたことで、その作業を『シリア・モナムール』は、はるかに複雑な形で見事に深めていったのだと思います。

最後に石に戻るのですが、実は『石の讃美歌』というミシェル・クレイファイ監督の作品があつて、これは第一次インティファダを半分組みこんだドキュメンタリーとフィクションを絡み合わせた映画ですが、この作品も『ヒロシマ・モナムール』を下敷きにしています。ただし、ヨーロッパ人と日本人という組み合わせは広島ということに関して適切ではなかったという批判を、ミシェル・クレイファイは当時からしていました。むしろ広島の外からほかの日本人が来て、その断絶を問題にするような映画があつてしかるべきだと。彼のこの作品のなかでは亡命しているパレスチナ人の女性と、パレスチナに残り続けたかつての恋人が再会するという筋立てになっています。

『ヒロシマ・モナムール』と『シリア・モナムール』の間に、この映画が中東映画史的にはもう一つあつたということも、ちょっと思い出しおきたいと思えます。



ミシェル・クレイファイ監督『石の讃美歌』、1990年。

▼Majid Khalfi, 1950-

イスラエル領となったガリラヤ地方ナザレの出身。映像作家。ベルギー在住。主な作品に『豊穣な記憶』（一九八〇年）、『ガリラヤの婚礼』（一九八七年）、イスラエルのイヤル・シヴァンと共同監督した『ルート181 パレスチナ・イスラエルの旅の断章』（二〇〇三年）など。

福田 鵜飼さん、ありがとうございます。われわれが鵜飼さんに期待していたのはまさにこういうことでした。われわれはだいたい中東を研究しているのですが、そういう中東という枠組みだけでなく、もつと外の同時代的な事象と結びつけながら、あるいはフランス現代思想研究の立場から批評してくださることを望んでいました。まさにそういうことを少ない時間のなかでやっていただきました。ありがとうございます。

では次に、メインゲストのもうお一方、ナジブ・エルカシュさんにコメントをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

### シリアにおけるアートと権力批判

ナジブ シリア人ジャーナリストのナジブです。私は学者ではありませんので、今日はスパイスと呼ばれたのではないかと思います。ちょっと辛口のスパイスです。

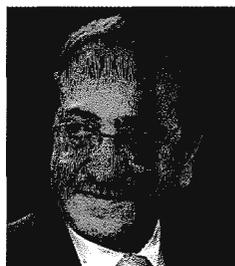
私はシリア人として、世の中が今、どうなっているのか、本当にわけが分かりません。何を信じればいいのか、シリア人は警戒心が強くなっていて、特にお互いに対して警戒心が強まっています。警戒心をもつシリア人として何かを見ると、すぐに私の探偵のアンテナが動き出します。シリアでは、ものが見えたら事実とは正反対のものだ、というのが日常だからです。岡崎さんの講演のなかで「蒸気口のない圧力鍋」

の話がありましたが、逆に「蒸気口」になっていた人たちの話をしたいと思います。

ドウライド・ラッハームという非常に有名な俳優がいます。表では政権を批判する、非常に芸歴の長い、味のある俳優です。下町の青年というキャラクターからキャリアが始まって、その後どんどん政治色を強めてゆきます。ひとり芝居が有名で、そこでも政府批判をしているように見えます。たとえば酔っ払いが想像のなかで父親と会話をします。父親が「貧しいが大丈夫か？」と訊ねる。「なんとかやってる」。「食べていけるのか?」、「なんとか食べてる」。「水はあるか?」、「大丈夫だ」。「収入はあるのか?」、「なんとか大丈夫だ」。でも、一つだけ欠けている。それは何だ? とお父さんに聞かれて、「尊厳だ、尊厳がまったく足りない」というものです。

私たちが非常に感動していました。けれども実はこの人は、シリア人の尊厳をずっと踏みにじっていたハーフェズ・アサド大統領と仲が良かったのです。したがって彼は歳をとつても永遠のスターで、今でも大成功を収めています。内戦が始まってから、茶番としか呼べないシリアの大統領選挙が行われた二〇一三年、彼はこんな血まみれの独裁者の選挙について堂々とテレビに出て、「みなさん、ぜひ選挙に行きましよう。これは民主主義の結婚式です。私たちの民主主義を訴える選挙です」と言いました。政権を批判しているように見えるけれど、本当は政権の仲間で、圧力鍋の蒸気口に過ぎなかったのです。

私はシリアの風刺漫画が好きなのですが、風刺漫画でうまく表現した人がいます。▼青空をブーツの底に描いた作品です。「クンナー・アーイション」と書かれています。



ドウライド・ラッハーム

▼Duraid Lahham, 1934.

シリアの俳優、映画監督。一九五八年デビュー。ユニセフの中東北アフリカ親善大使も務める。シリアおよびアラブ諸国の叙勲、受賞多数。



ドウライド・ラッハームが出演する舞台の一場面



★「尊厳が足りない」

「私たちは普通に生活をしていた」という意味です。これが政権側の言い分です。私たちはこれまで普通に平和に生きていたではないか、民主主義とか余計なことを言うな、というメッセージがここに表れています。

ドウライド・ラッハームと長くコラボレーションしたムハンマド・マーグートという詩人がいます。この詩人は、現政権への批判が一線を越えたために、ずっと迫害され、貧しくて、死んだときには名誉もお金もありませんでした。とても愛されてはいましたが、ラッハームのようなスターにはなりません。たとえば「アサド・フォーエバー（アサド大統領よ、永遠に）」というスローガンがありますが、この詩人は、国民のバカさよによってその永遠が長く続くのだ、という発言をしました。

また、今のシリア政権は原理主義者を批判するのですが、マーグートは、私たちの問題は神様<sup>アッラー</sup>との問題ではなく、神様の次に自分が偉いと思っている人との問題であると言ったのです。要するに自分をミニ・アッラー<sup>アッラー</sup>とと思っている人、独裁者のことです。このように直接、独裁者に対して批判的な発言をするので、偽善者ではなく本物の批判者だと思えます。マーグートの詩には、独裁者に対する誠実な抵抗の姿勢が見えます。

ここで、先ほど前田さんが紹介したアーティストについて、申し訳ないのですが、あまりよくない話をしたのです。前田さんの絵本の翻訳出版プロジェクトには本当に感謝し、評価していますので、どうか個人的な批判とは受けとらないでください。私は精神的に病気のシリア人としてこのアーティストを見て、名探偵のアンテナが動き出して、彼のフェイスブックを見ってみました。そして、いろいろ自問しました。た



ムハンマド・マーグート

▼ Muhammad al-Murghit, 1934-2006.  
シリアの作家、詩人。ラッハームの芝居に脚本を提供した。



★ヘイエスターニーの絵にアラビア語で「私たちは普通に生活していた」という一文が書き加えられて、シリア体制を批判する作品に交換された。

▼ Mana Heyesani, 1973.  
マナ・ヘイエスターニー。テヘラン生まれのイラン人風刺漫画家。

とえば、彼はとにかく平和が大好きの方です。ビーチで石を集めてかわいい鳥やP  
EACEを描く。<sup>★1</sup>彼はサフーンという山から石を集めて、途中から「サフーン」と名  
乗るようになりました。<sup>★2</sup>それから愛とか弱者の味方とか。申し訳ないのですが、私に  
は、表面的なイメージのように映ります。沈む人とか、かわいいそう人とか、貧しい  
人たちとか……。<sup>★3</sup>

ここで貧しい人たちについて彼が書いていることは非常に重要だと思います。「私  
はあなたたちをとても大切に思っています。あなたたちは、いちばん大切なものを尽  
くして、シリアの土地を守りました」と書いています。でも本当は、貧しい人たちは、  
いちばん大切なものを尽くしたくて尽くしたわけではなくて、ただ爆弾が落ちて死ん  
ただけだと思えます。このような文章に警戒心の強いシリア人はピンときてしまうの  
です。あなたたちは今、苦しんでいるけれども、私たちの偉大な国のために尽くして  
くれました、というような話になると、そういうことを言う人が本物かどうか……、  
おそらくシリアのことをよく知っている人でないと分かりづらいですね。偽善者かど  
うかをどうやって見分けるかというと、いろいろ問うてみていただきたいのです。

たとえば「少数派が大好き」ということについて。今の政府はマイノリティを守つ  
ていると言います。けれども少数派とは誰のことかという点、結局、キリスト教徒の  
ことになります。私の意見では、シリア政権がキリスト教徒を大事にしていると言  
うのは、キリスト教徒を本当に大事にしているわけではなく、ヨーロッパに対してア  
ピールするためです、私たちは非宗教的で、キリスト教徒が大臣になつたりします、と。



★2

★1

駐日大使もキリスト教徒でした。しかし、マイノリティのクルド人を迫害しながらキリスト教徒を大事にすると、ヨーロッパ人はバカだから（会場笑）、多様性を守っている、少数派を守っている、と言うのです。ですからこの方の作品を見ると、本人がキリスト教徒かと思うぐらい——アリーという名前なのでキリスト教徒ではないのですが——、クリスマスが大好きで、十字架が大好きで、マリアさんが大好きです。もつとと言うと、ダマスカス旧市街のモスクの隣にキリスト教会があるのですが、彼の絵ではキリスト教会だけになっています。

そして彼は国が大好きです。国とは何か、問うてください。私は日本映画の『笑の大学<sup>★2</sup>』が大好きです。戦時中に役所広司が取り調べをしていて、「国のために頑張らないといけない」、「そうですね、肉のために頑張らないといけない」、「今何と云った?」、「いや、お国のために頑張らないといけない」という。結局、人間が国のために自分を捨てなければいけない、自分を殺さなければいけないというような考えをこの方もアピールしています。

先ほど前田さんもおっしゃいましたけれども、明らかに彼には政治的なメッセージがあります。彼はシリアの軍を信じている。シリアの軍を信じている人に、今なぜ、シリア人が船に乗らなければいけないのか、という質問も同時にしなければいけないのです。軍がその人たちを殺しているからです。だから彼らはヨーロッパに逃げていくのです。

それから彼が描くシリアの地図で名前が書いてあるのは、イスカンドールン<sup>★3</sup>という

★1



★2 三谷幸喜原作・脚本。舞台、映画、ラジオドラマがある。映画版は二〇〇四年の制作。

★3 シリア北西沿岸部のアンタキヤ一帯を指す。フランス委任統治時代の一九三九年にトルコに併合されハタイ県となったが、シリア側はこれを不服としてきた。

トルコが支配している地域と、イスラエルに占領されているゴラン高原の二つだけです。今の状況をアピールしたいのだつたら、破壊されている都市やISが支配しているところなどを書けばいいのに、そうではありません。バアス党政権を団結させるために、トルコが私たちの大切なイスカンドルーン地域を支配している、だから今は余計なことを言うときではない、指導者に従え、そうすれば私たちはイスカンドルーンをトルコから取り戻す、イスラエルからゴラン高原を解放するというメッセージです。しかし実際には今、イスカンドルーンは不思議なことに、シリアの学校の地図から消えています。九〇年代にシリアの独裁者がトルコ軍に脅されて、秘密条約で、シリア政府はイスカンドルーンがシリアの土地だと言うのをやめると、正式に約束したからです。ところが二〇一七年のいまだに、この人はイスカンドルーンということでシリア政権のアピールをしています\*。

もう一つは、戦争で亡くなった人たちのことを、つねに「戦争で亡くなった人たち」とか「貧しい人」という曖昧な呼び方をしています。彼の住んでいる地域、つまりアラウイー派政権の地域で人が死ぬと、具体的にジャブラとか地名を出して、あなたの殉難者たちのためにご冥福をお祈りします、と言います。要するに軍の人たちが死ぬと、彼らは殉難者だと言って、具体的に冥福を祈ります。けれども他のところ、たとえばアレツポが滅ぼされても、具体的に誰が死んでいるのかは出てこないのです\*。

それから、民主化運動が始まったときのアサドの軍のスローガンは「アサド・アウ・ナフレク・ル・バラド」(アサドを選ぶか焼け野原になるか)でした。この二つの選

★ 1



★ 2



扱肢しかない、そういう脅しのメッセージです。実は私はシリア人に対しても、ここにいらつしやるみなさんに対しても、自分に対しても警戒心をもっています。ですから敏感過ぎて、私たちの独裁者、つまり「私を選ぶか、焼け野原になるか」と言った人物について、たとえば鶴飼さんが「アサドでなければ誰でもいいのではなく」と言われたときに、本当にビクツとしたのです。もちろん誰でもいいわけではないですが、今、人を殺し、社会を腐らせているのはアサドですし、社会のなかに埋め込まれた最も悪い要素を表に出しているのはアサド政権だと思っているシリア人としては、それはどうかと思うのです。

さらに、ISはモンスターである、ということについて。そこで聞いていただきたいのは、ほかのモンスターは何か、ということ。彼の作品を見ると、首を斬るとか、明らかに原理主義者たちが振るう暴力ということで首が強調されています。メディアでよく目にする事です。シリア政権が爆弾を落として一〇万人を殺しても、メディアでは、ISが二人の人間の首を斬ることのほうがインパクトがあります。この方の作品を見ると、ひどいのはやはり原理主義者たちです。では、監獄ですさまじい拷問をしているシリア政権はどうでしょう。彼らは、生きたまま人間の目の玉をえぐり取るというようなことをやっているのです。

次のポイントです。権力者を批判する。権力者というのは何でしょうか。今、彼が住んでいる地中海地方のコミュニティは空爆されていないので、役所などは普通にあります。彼が批判している権力者とは何かを訊ねてください。これは偉い人のお尻に

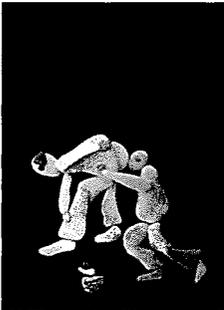
★1



★2



★3

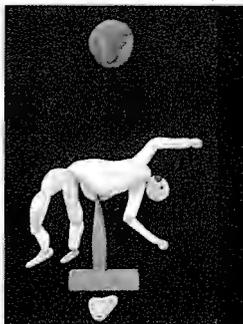


キスをしている市民の写真です。私たちも若いときに冗談で言ったものですが、政府を批判するなら大臣まで。大臣より上の者を批判すると自分が行方不明になる。ですから大統領の批判はもう無理です。彼のコメントを見ると、マスウードという名前の役人が悪い。役人が何か、市民のお尻に入れて拷問している。しかし先ほどご紹介した詩人、マーグートがしたようには政権を批判しない。政府は批判するけれども、政権や制度は批判しない。

でも、私も、彼の作品のなかでこれは気に入りました。市民はみんな食べ物がほしいのに、リーダーは戦争に行けと言う、そういう作品です。これはもしかするとシリア政権への批判かもしれません。これは<sup>★3</sup>ロバの横顔です。ロバはアラブ文化では非常にバカだと軽蔑されているのですが、シリアの民主革命のデモのなかで有名なスローガンは、「アサドの父のほうが呪われている。なぜならロバを生んでしまったから」というもので、今の大統領をロバ呼ばわりしています。もしかするとこのアーティストは、実際には今の政権を嫌いなのかもしれないですが、一方で、こういう作品を作らないといけないということもあります。

最後に私の言いたいことは、イランの専門家の方が今、シリアのことをやろうとしていて、けれどもシリアは本当に難しいのです。ですから、ここにいらつしやるシリアのことを具体的に知っている方には、ぜひぜひ頑張ってください、大衆の手に届けてほしいのです。おそらく大学のなかで翻訳した文学よりも、たとえば前田さんのこの絵本のほうがたくさんの方の手に届きます。またザカリーヤ・ターミルの翻訳が出版され

★1



★2



★3



★  
 るそうで、非常に嬉しいのです。どんどんシリアの専門家が出てきてほしいですし、研究室だけではなくて、今日のように市民に対しても、ぜひ頑張って働きかけてくださ  
 い。ありがとうございます。

福田 お話は尽きなかったと思うのですが、時間の都合もあり、切っていただきまし  
 た。岡崎さんのお話だったでしょうか、パリなどヨーロッパの大都市でこういったシ  
 ンポジウムをすると、必ずそのときテーマになっている国の方々がいらして、その人  
 たちの存在を前提として議論するので、話し方のモードなども変わってくるというこ  
 とでした。そういう意味では、きょうもここにナジーブさんがいらして、シリア人な  
 らではの視点と言いましょいか、そういったものを直接われわれに語りかけてくだ  
 さったことは、非常に貴重だったと思います。

しかし、われわれも最初からのんきに構えていたわけでは、もちろんありません。  
 前田さんから最初にこの絵本について聞いたとき、われわれも作者については全然知  
 りませんでした。そこでインターネットを使って調べてみたわけです。すると、今ナ  
 ジーブさんがおっしゃったような背景がある程度見えてきました。それで、メンバーの  
 間でしばらくメールのやり取りが続きまして、この人はどう扱ったらいいのだろうと  
 という話にもなったわけです。

ただし、最後にナジーブさんがおっしゃっていただきましたけれども、たとえそういう境  
 遇立場の方であっても、もしかすると、そういうふりをしながら活動しているのかも  
 しません。たしかに端から見て格好のいいものではないかもしれないけれど、心の



これまで  
 聞いたこともない  
 珍しい話を  
 語ってやろう——

★ザ・カーリヤー・ターミル『酸っぱいブドウ／はりねずみ』柳谷あゆみ訳、白水社、二〇一八年。

奥底では政権批判というものをやりたい、やっけていくつもりだということで活動されているかもしれません。こうした点は解釈がとても難しく、第三国でこういったアーティストをどのように紹介するかということについては、みなさんもいろいろなお意見があるかと思えます。そのあたりも含めて、シリアのことにも非常に詳しい山本さんに少しお話しいただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

### シリアの分断状況とアーティストの立場性

山本　せっかくナジブさんからニザール・アリー・バドルさんについて、たいへん率直な意見をいただいたので、この点について補足したいと思います。今、福田さんがおっしゃったように、彼の絵本を翻訳するにあたって、前田さんから「このアーティストがどういう方なのかよく分からないのですが、どう思いますか」という質問をいただきました。その際、ここにいる研究会メンバーたちの間で情報を交換し、今、ナジブさんがお話ししてくれたようなことは、私たちの間でもすでに話し合っていたのです。たとえば、最後に出たロバの話ですが、これについては私も、暗に政権を批判しているという解釈もあるのかな、と思っていました。ただ、彼がシリアのテレビに登場したインタビュー映像を見たところ、やはり海外のメディアから「あのロバは大統領のことか」と聞かれることがある、という話題が出たんです。それに対して彼は、「いや、これは国を売る裏切り者のことです」と返答していました。それを見て、心

の奥底では政権を批判しているのかも、という解釈の余地はなくなったという私の意見を前田さんには伝えました。

彼のフェイスブックは世界中の人に見られていて、このカナダの方もそこで目にした彼の作品にあわせて難民の話を書き、絵本にしたということです。そしてその絵本への共感の輪がさらに広がっています。欧米では、本当に人道的な立場から、今のシリアの人たちの苦境に共感する入口として、この作品が読まれているのだと思いますし、語らない石のアートそのものに、人の心を動かすそれだけの力があると私も感じます。

私の場合は、彼のフェイスブックの投稿などを、ナジーブさんが言うところの「探偵術」を駆使してチェックしたからこそ、こうした意見にたどり着いたのであって、ただ出版された絵本を読んだだけでは、こんなことは考えなかつたと思うのです。そこで、自分も文学を研究している人間として戸惑い、悩んだのは、作品そのものを見るということがアートを鑑賞する際の大前提だとして、それを作つた人がどういう立場の人なのかについてはいかに問うべきなのか、という点です。それを無視して作品だけを鑑賞すればいいという人もいれば、やはりそのアーティストの立場や政治性というものが作品の評価や鑑賞と切り離せないという人もいます。あるアーティストの政治性や立場には全く共感できないけれども、作品としてはやはり心を打たれてしまうということが、世界中のアーティストや文学においてありうるわけです。

今日の講演全般、とくに四人のシリア人アーティストのビデオ・メッセージから

伝わってきたと思うのですが、今のシリアの状況では、「分断」ということが一番大きな問題になっています。それぞれがどんな意見を持っているのか、疑心暗鬼になりながら、それでも一緒に生きていく。これが、革命が起こる前からのシリアにおける生活のなかの一つの文化であり、さらにいえば、中東その他、多くの抑圧的な社会を生きる市民の文化であったと思うのです。

それがシリアでは革命によってパンドラの箱が開いてしまつて、それまでは心の中ではいろいろな意見があつても、とりあえず折り合つてやってきた人たちが、「お前は何者なのだ」という問いを常にぶつつけ合うようになっていきます。そうした中では、まず、アートだからいいとか、人間的なメッセージだからいいというようなことでは済まされずに、その人の立場というものが厳しく問われるようになっていくと、ナジーブさんのお話を通じてあらためて深く考えさせられました。この点に関して、鶴飼さんにご意見をいただけると嬉しいですね。

鶴飼 はい。さきほどもお話したように、私の留学期からの友人は、もともとアレックポから亡命してきた人でした。まさに、二〇一一年以降は、これまでフランスで友人だった人たちと意見が合わなくなるわけです。これは見方を変えれば、われわれにとつてもまったく他人ごとではない時代に入っていると思います。

たとえば、私が彼らと出会つたのはパレスチナ連帯デモのなかだったのです。フランス人でパレスチナ支持派の人たちは、二〇一一年以降の中東での事態をイスラエルを利用するかどうかという判断基準で見ると、やはりシリアのことは後回しになつてし

まうわけです。それで、彼らはずいぶん友人を失ったということでした。本当に苦渋に満ちた言い方で、私にそう語ってくれました。

フランスの中東学者の間でも、シリア内戦の解決についてどう考えるのか。それこそフランスの外務省とどういう関係を持つのかということが、きわめて深刻に論じられるという状況があります。私は日本の中東研究者ではありませんが、日本ではこの問題がどのように研究者の間で反映しているのかということには関心を持つてきました。

さきほど山本さんが言われたことは本当に重要で、たとえば、ボルヘスなどはみんな読むわけです。ボルヘスはアルゼンチンの作家ですけれども、彼は隣のチリでクーデタがあったときは、ピノチエットを支持しているわけで、政治的には本当にとんでもない人物です。

そういうことがしばしばあり、難しい問題となっています。『シリア・モナムール』は監督のウサーマ・ムハンマドさんの、一九七六年から始めている本当に素晴らしい仕事の延長なのだ。テッル・ザアタル・キャンプでパレスチナ人を殺したシリア軍と、おそらくシリア系のパレスチナの部隊サイカ、そのなかに自分の友人がいた。彼から軍服を脱がせるために、自分は映画の道を進んできたのだと言われました。今日、たくさんの言葉を聞きましたが、この言葉がとりわけ強く印象に残りました。

さきほども言ったように、アサドが、世界中が認定した悪者になれば、次にトランプがそれを利用するということになって、そのことで東京の地下鉄が止まり、安倍政

▼ Jorge Luis Borges, 1899-1986.

ホルヘ・ルイス・ボルヘス。アルゼンチンの作家、詩人。

権の支持率が上がる。要するに、こういう世界にもうわれわれは住んでいるわけですから、このなかで、シリア人の友人との関係を重視して、われわれ自身の歴史を学び、まさに今、ナジーブさんをお話ししてくださったような、緻密に読み、同じ世界に生きているということをどう表現していくか。この単純な作業を、今まで以上に厳しくやっついていかないと、いたるところに落とし穴がある時代なのだと思います。

ナジーブ 違和感が続いています。先生がおっしゃった例はまさに正しいです。トランプがミサイルを撃つと、北朝鮮との緊張感が高まり、東京の地下鉄が止まる。でもこの例を選んだのには理由があつて、シリア人としてはちよつと偏つていてと感じてしまいます。私が選ぶ例はこうです。アサド政権を止められないと空爆が続きます。空爆が続くとたくさんの難民がヨーロッパに行きます。たくさんの難民がヨーロッパに行くと、イギリスはブレクジット（英国の欧州連合離脱）になります。ブレクジットになるとソニーのヨーロッパ本部がどこへ行けばいいか分からなくて、日本経済に非常に大きく影響します。ですから、枠をどこに決めればいいか、とりあげる例によつて全然違つてきます。

山本先生がおっしゃった、その作品を楽しむために、書いた人の立場を考えるべきかどうか、私も非常に悩みます。もう一つ言いたかったのは、この絵本が出たことによつて、素直にとっても嬉しい気持ちになるといつ瞬間もあるということです。ヨーロッパや世界の人が、こういうクリエイティブなシリア人を見る。それだけであと全部忘れて、刀などを持っているISなどの人ではなくて、かわいいこと、素敵なることを

やっているシリア人を見るだけでもいいのではないか、と思う瞬間もたくさんあります。だから本当にわけが分らないです。

福田 ありがとうございます。この石のアートの話ばかりになってしまっているのもなんです、これで終わりにしますけれども、最後に前田さんご自身に。少し苦しいかもしれませんが、よろしくお願いします。

前田 ありがとうございます。彼のフェイスブックを見て、繰り返される政治的メッセージをどうとらえていいのか、私もずいぶん悩みました。今いらっしゃる方々にメールをお送りして、どのようにとらえればいいのかということで、みなさんかなり詳しくお返事をいただきました。私自身は、その一連の議論を「裏シンポ」と呼んでいます(笑)。シンポを一回やり切ったくらいのごい情報量だったのです。

何人かのシリア人の方と一緒に協力しようというお話を進めているとお話したのでも、彼女たちにも、まず彼のフェイスブックを見ていただくことで、彼特有の政治的立場がよく分かるから、それを見て嫌だと思えば嫌だと言ってほしいというのをまず伝えていきます。「裏シンポ」で話したことが、ここでこれほど時間を取って議論していただけると思わなかったのが、ナジーブさんには感謝いたします。

あと一つだけ。あの絵本を訳すきっかけになったのが、私自身、国際理解教育学会の「難民問題から国際理解教育を問うプロジェクト」というのに参加していたことです。それは難民支援のプロジェクトではなく、難民問題をどういうふうに教育現場で教えるかというプロジェクトです。そのための教材ということではないのですが、

リア難民に限らない、「難民」となってしまった人たちのことを教育現場でどうやって教えるか。そういう教材作りに携わっていらっしやる方たちが中心になって進めている研究会です。そのなかの二つの手立てとして、使ってもらえる絵本にしたいと思っております。まだまだ話し足りないのですけれども、このあたりにしてマイクをお返しします。ありがとうございます。

福田 ありがとうございます。こういった問題は様々な立場があつて、最終的に結論が出るという問題でもございませんので、一人ひとりの方が持ち帰つてお考えいただければと思います。

さきほどから、ナジーブさんご自身が本当に分からないとおっしゃっていますが、レバノン内戦のような、あの複雑な時代でも、やはりさまざまな文学が紡がれることになりました。私などはあまり勉強していませんけれども、レバノン内戦に関する文学を読んでいて、やはりアラブ人自身も分からないと言っていることを知つて少し安心したことがあります。安心したというのは語弊があるかもしれませんが、内部の声を聞くといひましようか、多様な声を聞くという意味でも、今日の文学作品をもとに現代のシリアを考えるという試みは非常にいいことだと思ひます。

去年の年末に、私はBBCのアラビア語放送を聞いていたのですが、現役のアラブ人の若手・中堅作家がたくさん出てきてインタビューを受けてひまして、「あなたが今年読んだ本で一番良かったのは何ですか」「来年はどんな本を読みたいですか」という質問がありました。あるスーダン人の作家でしたけれども、去年あたりからシリ

ア内戦を扱った文学がすごい力強さで出てきた、これからすごいことになると思うので、ぜひ来年はそのシリア内戦に関する文学を読みたいと言っている人がいて、やはりそうなのだと強い印象を受けたことができました。

きょうも森さんが、まさに今シリア内戦に関して書かれている短編（長編はおそらくもう少し時間がかかるのだと思うのですけれども）、短編作家を紹介されました。そのあと、岡崎さんが、監獄文学というジャンルの歴史について説明されました。さらに、その監獄文学も書いているザカリーヤ・ターミル（非常に有名で、さきほどナジブさんもその翻訳が出ることを楽しみにしておっしゃっていました）や、すでに翻訳があるシャミーについて柳谷さんが話してくれました。

このシリアの文学作品に関して、次はみなさんにお話を伺いたいと思います。石の아트ほうに話が偏ってしまったので、前半の岡さんの基調講演で取り上げられた映画も含めてコメントをいただければと思います。

### 日本でのアラブ文学の翻訳と『中東現代文学選』

ナジブ シリアがこういう状況になる前には、そうした高級芸術ハイアートの作品に興味があったのですが、今は本当に、もうそういう優雅なことよりも、とにかく分かりやすいものを子どもなどに伝えたいということになってしまったので、非常に残念な面もあります。

私も『シリア・モナムール』という映画を、何回か呼ばれて見ましたが、難しい作品で、結局、見た人たちもあまり分らないままでした。だけど山形国際映画祭で上映された『シリア 愛の物語』<sup>★</sup>は、シリアで政治活動をする二人の家族の物語で、すごく人間性があつて味があり、シンプルで分かりやすい話でした。『シリア・モナムール』ではなく、私は今、この映画を広げたいと思つています。分かりやすさだけを優先するのはよくないと思うのですが、まずシリアの話を整理したいという気持ちから脱出できない状態です。

シリアの現状を表現するのに、たとえば『シリア・モナムール』や、『ムスタファー・タージュッディーン・ムーサー』さんのカフカ的世界のような作品、文学を楽しむのであれば、そういうハイアートのほうが楽しめますが、シリアのことを知るためなら、もっと単純な話のほうがいい、というのも、もう一つの悩みだと感じます。

アラブ文学の翻訳と出版の少なさについては、非常に残念だと思えます。たとえばガッサーン・カナファーニー<sup>▼</sup>の作品が、七〇年代に奴田原睦明さんが翻訳したままで止まっている感じがします。今日のシンボジュムが、この変化の始まりであれば非常に嬉しいです。私は出版の世界は知らないし、翻訳の世界も知らないのですが、なぜこれほどアラブの小説で日本語になつていくものが少ないのですか。

山本 私はアラビア語の小説が日本語に翻訳されてきた歴史を振り返る小論を書いたことがあるのですが、本当に七〇年代から八〇年代がピークで、そこからどんどん衰退していつているという感があります。そこには、もともとアラブや中東など、いわ

★ ショーン・マカリスト監督『シリア 愛の物語』イギリス、二〇一五年。同年の山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映。

▼ Ghassan Kanafani, 1936-1972.

パレスチナ出身の作家。一九四八年、イスラエル建国に伴う民族浄化で難民となる。PFLP（パレスチナ人民解放戦線）のスポークスパーソンを務める。ハイエルトでイスラエルの諜報機関によって暗殺される。代表作に『ハイファに戻つて』『太陽の男たち』など。

ゆる第三世界といわれた地域の文学や文化に対する日本の関心のベースにあった、国際連帯とか、左派系のいろいろな思想や文化運動が衰退していったということがあります。それと出版不況など、いろいろなことが絡み合っていて、簡単には説明ができません。

ただ一方で、柳谷さんが触れていたドイツ在住のラフィーク・シャミーのように、欧米の言語で作品を書くアラブや中東出身の作家たちがどんどん出てきています。日本はいまだに欧米礼賛などところがあるので、欧米で評価された人の作品は比較的、翻訳される機会が多いです。

最近では、アラブ人作家がいろいろな理由で海外に移民したり、あるいは難民になったりして、移住先の言語で書くということを武器として、ツールとして、プラスに捉えているという例が目立つようになっていきます。仕方なくではなくて、世界の人々に直接読んでもらうために、あえて英語やフランス語で書く。その方が日本でも受け入れてもらえるのであれば、そういう状況も利用したらいとも思います。

その一方で、やはりアラビア語のすばらしさ、アラビア語表現の美しさというのは、私はアラブ文学が専門なので非常にこだわりがあります。今日も四人のアーティストのビデオ・メッセージのなかで、非常にきれいな、正則アラビア語という文学の言葉が使われていて、「すばらしい言葉だな」と感激しました。中東現代文学研究会の仲間の中には、アラブ以外にもイランやトルコ、クルディスタンの文学など、いろいろな専門家がいるのですが、やはりそうした現地の人々が紡いでいる言葉のすばらし

さ、表現力を伝えたいという気持ちがあります。

出版社がなかなか振り向いてくれない中で、自分たちでもなんとかしようということで、『中東現代文学選』という翻訳集を、岡さんのイニシアチフでこれまでに二巻、刊行しています。ここに収められているような作品が普通に出版されて、売れるようになってくれればと思います。

福田 岡さんどうぞ。

岡 なぜカナファアーニーの翻訳が七〇年代の奴田原訳で止まっているのかということについては、私にも責任の一端以上のものがあり、たいへん心苦しく思っています。二〇〇四年から〇八年にかけて刊行された『季刊 前夜』という雑誌に毎号、カナファアーニーの短編と『ハイファに戻って』の新訳を連載しまして、出版したいという申し出を複数、頂戴しているのですが、それ以外の作品も加えた上で出版したくて待っていたらいてるあいだに一〇年たってしまいました……。

ナジブ 最近、文庫になりましたね。

岡 そうですね、この六月に河出書房から文庫版が出ました。今、山本さんが紹介してくださいましたように、私たちの中東現代文学研究会で『中東現代文学選』という中東の文学作品のアンソロジーを出しています。『中東現代文学選2012』に続いて、この三月に二冊目の『2016』を刊行しました。『2016』には福田さんが『アザゼル』という、エジプトの作家ユースフ・ゼイダーンが国際アラブ文学賞を受賞した作品を、山本さんがレバノンの女性作家ジャー・ハサンの『フロアー99』、これ



ジャー・エル＝ハサン『フロアー99』、2013年。



ユースフ・ゼイダーン『アザゼル』、2011年。



ガッサン・カナファアーニー『ハイファに戻って／太陽の男たち』、奴田原睦明・黒田寿郎訳、河出書房、二〇一七年。

も同じく国際アラブ文学賞の最終候補に残った作品ですが、どちらも長編の抄訳ですが、けれども非常に読み応えのあるものを訳してくださっています。それから、ナジブさんご推薦のザカリーヤ・ターミルも、柳さん訳の『はりねずみ』が載っています。また、森さんが今日、お話しくださいましたムーサーの『なんていい人たち』と『シリア人を集団抹殺から救うための偉大なる計画』の二作品も収録しています。このように面白いものをどんどん活字にして紹介して、出版につなげていければと思っています。

福田 ありがとうございます。なかなかアラビア語の文学が注目されずに、ヨーロッパ語で出たものは注目される面もありますね。もちろん、ヨーロッパ語は自作を広めるための武器にもなります。たとえば、今日の森さんのお話に出てきたムスタファー・タージュディーン・ムーサーのお話を聞いていて私が思い出したのは、同志社大学の藤井光さんが訳しておられるハサン・ブラーシムというイラク人作家の、本当にグロテスクで、シュールで、すごい話がつまった短編集です。これは英語のテキストがあるからこそ目にとまって日本で紹介されることになったのです。

最近は大きな文学賞がカタールなど湾岸アラブ諸国の資金で出ていて、こういったところで賞を取ると、自動的に英語に翻訳される副賞がついている感じなので、そういったこともあつて英語に訳される機会は近年多くなってきています。もしかすると、そういった方面から翻訳されることも今後増えるかもしれないと思っております。

ところで、そのハサン・ブラーシムもムーサーも男性です。柳谷さんのシャミー



▼ Hassan Basim, 1973.  
バグダード生まれ。作家、詩人、映画監督。フィンランド在住。『死体展覧会』  
藤井光訳、白水社、二〇一七年。

にせよ、ザカリーヤ・ターミルにせよ男性です。岡崎さんが紹介してくださったのも男性ばかりで、よく考えると女性の経験というのが不足しているような気がします。私は全然知らないのに、こんな無責任なことを言って申し訳ないのですけれども、そのあたりはどうなっているのでしょうか。内戦下における女性の作家、女性の声というのはどうなっているのかを少し知りたいと思います。詳しくするのは岡崎さんでしょうか。よろしくお願いします。

### 女性など様々なシリア人作家の声

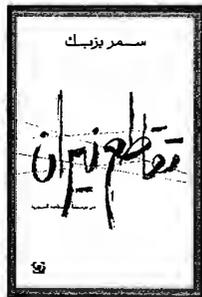
岡崎 シリア人女性で、最近で一番有名と言えば、サマル・ヤズベクさんという方がいます。彼女は二〇一一年以前にも何本か小説を出しているのですけれども、二〇一一年以降も、革命やその後の展開と同時並行で小説を書き続けています。二〇一一年には『交戦』<sup>★1</sup>という名の小説を出しています。その後、『虚無の世界への入口』<sup>★2</sup>といった作品も出しています。私は『交戦』しか読んでいないのですが、ヤズベクさんは大変才能ある作家です。

ただ先ほどの訳されない、なかなか出版に結びつかないというお話にも関わりますが、二〇一一年当時私はフランスに住んでいて、ヤズベクさんのフランス語訳は結局シリア人、あるいはアラブ人によって訳されていることを知りました。シリア人、あるいはアラブ人で一般のフランス人以上にフランス語の読み書きに秀でた方は、そ



『虚無の世界への入口』  
(2015年)

★2 Samar Yazbek, *Baywatidat al-'Adam*, Beirut, Dar al-Adab, 2015.



『交戦——シリアのインティファダの日々』(2012年)

★1 Samar Yazbek, *Taqāṭir al-N'rān*, Beirut, Dar al-Adab, 2012.



サマル・ヤズベク

▼ Samar Yazbek, 1970-

れなりにいらっしやいます。先ほど鶴飼さんが言及されたサアダッラー・ワンヌースの作品も、シリア人女性研究家の手でフランス語に訳されています。そういう意味でアラブ文学を日本で広めるためには、アラブ人で日本語能力に優れた方を招聘し、一緒に翻訳事業を進めていくのも一つの手だと思っております。

欧米の場合、アラブ世界と直接的な摩擦の歴史を背負ってきたので、必然的にそうなったという事情があるうとは思いますが。ただアラブ文学のフランス語訳事情を眺めてみると、「一度これはいける、売れる」となると出版社も食いついてきて、市場が活発化していくという印象を受けました。日本もそうなればいいと思います。

ナジーブ シリア人女性作家サルワー・アル・ネイミの小説で、フランス語経由で日本語に訳された、『蜜の証拠』という非常にいい作品があります。なぜヨーロッパ人がこの作品を好きかというと、エキゾチシズムのためだと思うのですけれども。

山本 その小説については、せっかく大手の出版社からシリア人女性の小説が翻訳されるというすばらしい機会だったのに、なんであの作品だったのかな、と疑問に思っていました。国際ペンクラブの大会が日本で開催された際に、当初はパレスチナから作家を呼びたいという話もあったのに、結局はフランス人のテイストに合う非常にエロティックな小説が、フランス語訳からの重訳で出版されることになってしまい、誤訳も多くてとても残念でした。

ナジーブ でも日本人も本当はすけべじゃないですか。(会場爆笑)

山本 これはアラビア語で書かれた、イスラームの中世の性愛文学の古典をベースに

▼ *Salwa al-Naymi*

シリア出身の作家、詩人。ダマスカス生まれ。一九七〇年よりパリ在住。

★ サルワー・アル・ネイミ『蜜の証拠』  
齋藤可津子訳、講談社、二〇一〇年。

した小説で、そうした歴史文化がアラブ・イスラームの世界にあるということを知ってもらおうという意味では、いい入り口なのですから、小説としては残念だということですね。

福田 何かほかにお気づきになった点はございますか。では最後に柳谷さん。

柳谷 さきほどからのやり取りで、少し自分で思ったことを申し上げます。理想論かもしれないけれども、好悪と批評は完全な別物にはなりません、どこかで別物であるという認識は持つておかなければいけないと思いました。

つまり、作品の良し悪しという判断は批評になるのですが、批評をする場合は、やはりその作家自身がどういう考えで行ったかという、本人の持つ歴史にまで踏み込む必要があります。その上で、その作家を支持するかしらないかが、批評には関わってくると思います。

ただ、それと、これは自分は好きだという気持ちは完全に一致はしないと思うのです。また、さきほどから繰り返しているように、完全な不一致にもならない。この人の作品が好きだと思って読んだけれども、よく見たらこの人はとんでもない人だった。急にこの人の作品が汚らわしく思った、というのはあると思います。だから、完全な不一致にはならないのですけれど、やはり好悪と批評はどこかできちんと線引きしておくべきだと、これはみなさんに強要するなどということではないのですが、そういう必要は感じました。

その上で、今日の石の作品について、多少コメントをします。話を戻すわけではあ

りませんが、シリア文学は全体主義に抵抗するという発想に根差しているものが多いので、シリア文学について語るときには、レベルの違いはあっても、反体制の立場に立つものを扱うことがどうしても多くなります。

その中で、現状として体制支持の人間も表現活動をしているということが、この場に出てきたというのは、私はいいいことではないかと思いました。

福田 ありがとうございます。森さん、よろしいですか。

森 はい。柳谷さんの仰つたとおりだと思います。体制賛美の文学はともかくとして、体制支持ではなくても、民衆蜂起に否定的な人たちもいて、その人たちが何を言っているか、それを小説などで表現している人たちがいるのかどうか、気になっています。

ハイダル・ハイダル<sup>▼</sup>という古い世代の作家がいますが、この間ベイルートかどこかへ行ったときに、本屋でその人の新作小説を見つけました。『行方不明者』<sup>\*</sup>という題名で、シリア軍の兵士がラツカあたりの戦場で過激派勢力に捕まり、脱出して宗派の違う知人の家に匿われます。その兵士の手記のかたちをとった作品なのですが、こう生々しい体験が語られるというわけでもなく、かつて宗教の違う恋人との仲を引き裂かれた話を思い起こしたりして、宗派主義に対する怒りが描かれています。

結局何かというと、僕はあまりしつくりこなかつたのです。何か自分の外にあるものに對する怒りというのは描かれているけれども、人間の内側への突き詰めがないように思われて、ハイダルというのはこんな作家だったのかなあと感じてしまいました。

ISの支配やその犠牲になった人々を描いた小説も出ているようなので、そういう

▼ Haydar Haydar, 1936.

シリアの小説家。タルトゥース県出身。アルジェリアに亡命したイラク人青年と革命の挫折を描いた長編『海濱の宴』（一九八三年）は、宗教界の反発を受けて議論を呼び、エジプトなど数ヶ国で発禁処分を受けた。

★ Haydar Haydar, *Mafqûd*, Damascus: Ward al-Nashr wa-l-Tawwî, 2016.



『行方不明者』

のも読んでみたいし、民衆蜂起に距離感を覚えている人たちの視点も気になります。そういう人々の表現を見てみたいと思っていますが、なかなかないです。

柳谷さんも仰ったように、基本的に体制に対する抵抗の道具として文学があったという事情があるから、やはり体制に批判的な視点に立ったものが多いですけれども、非常に複雑な状況の複雑さを、文学の中からも読み取っていきたいと思っています。福田 ではフロアのほうから何かご質問等あれば受け付けたいと思います。時間もないのでまとめという形にしましょうか。

### 質疑応答——メタファーと言語、文学者間の交流

質問者 A 貴重なお話をありがとうございました。日本語で詩を書いている者です。お話を伺っていて、全く知らない作家のお話ばかりで、僕はシリア文学を全然知らないもので非常に楽しく、裏シンポはすごくショッキングでした。裏シンポのことを聞きながら、七年くらい前に谷川俊太郎が秩父で「差別語などによって言葉が非常に使いにくくなっているけれども、もっと増えたときに困りますか」と言われて、「全く困らない」とあっさり断言していて、すごいと思ったことがあります。

すみません、一つだけ聞きます。あることについて口をつぐむ、ただ言わなくてもみんな分かっているという話がありました。これは金子光晴が戦争中に書いた詩がメタファーばかりでみんな官憲が分からなかったからどうにか出版できたという話と非

常に似ていると思っています。同じように、みんながどうやってそういった共通のメタファーを持っているということが分かるのか。どうやって手に入れたかということに非常に関心を持ちましたので伺いたいと思っています。

福田 沈黙のメタファーというのを、日本とシリアで共通して持っているということではなく、ということでしょうか。

質問者A シリアの文学のなかで、みんな殴っているのは反体制の人たちだということとを、沈黙しているけれどもそれは共通のものとして認識していると、そういったメタファーをどうやって手に入れているのでしょうか。

福田 ありがとうございます。もう数名、何かご質問はございますか。

質問者B 放送大学で勉強しています。きょうは発表お疲れさまでした。ビデオ・メッセージのなかで、正則アラビア語ではなく口語アラビア語で劇を行うようになっていくことを話されていたのですけれども、文学作品のなかでも会話文などでアーンミーヤを使って表現している作品もあると思うのです。シリアの文学作品のなかで、そういった文全体、もしくは会話文でアーンミーヤを使って表現するというようなことは行われているのでしょうか。

福田 ありがとうございます。これはアラビア語の一般的な文学上の言語の問題だと思っています。これを承って、まだもう少しいけると思うのですが、何でも答えられるメンバーがそろっておりますので、何でもいいと思います。

質問者C 私はシリア文学どこかアラブ文学全般についても全く無知なので、もう

少し基本的なところからお伺いしたいです。シリアにおける文学サロンというか、文学を評価し合ったり共有し合ったりする。それを出版にまで持って行くというようなことを行っている人たちというのは、過去、それから現在において、どのようになっているのかということをお伺いできますでしょうか。

福田 ありがとうございます。もうひと方くらい、いかがでしょうか。

質問者D 同じ関連で、文学サークルがもしあるとすれば、宗教や民族、地域の人間たちが多様に集まっているのか、やはり宗派や民族で固まってしまっているのか、そのあたりも伺いたいです。

福田 ありがとうございます。とりあえずこの四つです。ではまず、詩人の方からのご質問です。シリア文学のなかで、さまざまにシリア人に共有されている文学的メタファーというのがあるわけです。今日のお話では沈黙についてでしたけれども、こういうものがどのように成立してきているのかということですかね。難しいかもしれませんが。

柳谷 難しいと言いますか、私の印象で申し上げますけれども、これははつきり事例の多さだと思えます。つまり「あるある」になっている。こういうことが自分の周りでもあった、「ああ、あれか」という事例が増えていくと、もうそれが共通概念になっていくのだと思います。

さきほど自分の報告で『『彼の死去』』という構図が二〇〇五年には分からない人がいたというお話をしましたけれども、あの時点では、そういう構図を出されてもま

だピンとこない人がいた訳です。

けれど、ハーフェズ・アサド以降を考えたときに同じような問題意識を徐々にみんなが持つようになり、そのときに、その構図を見て「あ、これはあれを指しているのだ」と分かるようになる。そういう経験としての事例数の多さが構図の成立と関係があると思います。

福田 ありがとうございます。ほかにはよろしいでしょうか。では次に、文学作品における言語の問題ですが、これについては、森さん、いかがでしょうか。

森 アンミーヤで書かれた作品というのは、私が知る限りシリアではないです。アラブ全体を見れば、エジプトの場合はエジプト方言で書いたものがあるでしょうけれども、シリアの場合はないです。地の文がアンミーヤで書かれることはまずないです。でも、セリフに関しては場合に依りて、作家個々によつて違ふと思うけれども、アンミーヤで書くこともあります。もちろん劇の場合はアンミーヤで書かれる例が多くありますが。

レバノンの小説だと会話の中にアンミーヤが出てくる割合がずっと高くなります。シリアの場合はイデオロギー的など言うか、バアス党の体制下にあったということもあるけれども、やはりアラブのナショナルリズムというのが、いい意味でも息づいている部分があつて、アラビア語を大切にする意識があるので、フスハーに向かう傾向があるのでしょうか。

レバノンの場合は、フェニキア主義<sup>★</sup>といったようなかたちでアラブ性を否定するよ

★レバノンのキリスト教徒マロン派社会を中心に影響を持つレバノン民族主義思想。ナショナル・アイデンティティの拠り所をアラブ化以前の古代フェニキアに求める。

うな方向性もあるなかで、多様な選択肢があるということかと思えます。

質問者E　ちなみにムーサーはどうでしょうか。

森　ムーサーは基本的に全てフスハーです。ただしセリフの中には少しアーンミーヤ的な表現も出てきて、たとえば『シリア人を集団抹殺から救うための偉大なる計画』では「おいこら！」というような意味の「ウラーク」という表現が出てきました。

福田　ありがとうございます。きょうの話には関係ないのですが、エジプトだと、このアーンミーヤをバリバリ使うという伝統が十九世紀からありまして、全体がアーンミーヤで書かれた小説作品もあります。シリアの場合は、「アラブの鼓動する心臓」というスローガンが昔ありましたけれども、同じようにアラビズムを創造していたナセル時代のエジプトでは、おそらくアラブ世界で唯一だと思えますが、一時期アーンミーヤの国歌がありました。なぜなのか。面白いテーマです。

次のご質問ですが、シリアの文学サロンについてということ、岡崎さんお願いします。

岡崎　私は、二〇〇三年から二〇〇九年の六年間、ダマスカスに住んでおりました。その中で、サロンといいますが、文学者同士の付き合いの空間みたいなものに少し触れることができましたが、まず基本的には個人レベルでつながっていくというのが主流だと思います。

たとえば、本日私は監獄文学を二つ紹介しましたが、二番目に紹介したムスタファー・ハリーフアは、『巻き貝』を執筆した際、タイプする前の手書きの草稿を、

イブラヒム・サミュエルに手渡して、「ここはこうした方がいいのでないか」等と助言をもらったり、話し合ったりしています。もちろん、サミュエルと、森さんが紹介しましたムスタファー・タージュッディーン・ムーサーもつきあいがあります。その意味では、同様のジャンルやスタイル、目的を共有している作家らは、必然的につながっていきます。

文化人が交流するサロンのようなものは、たとえばダマスカス中心部のサーリヒィヤ通り入口に「ラウダ・カフェ」といったものがあります。そこはサロンというか、文化人の集まる空間といったものが、私が滞在した頃には機能していて、現在でもあります。逆に、そういうカフェに集まることを好まない作家もいます。そういうことは、どの国の作家同士でもあると思います。

もう一つのご質問ですが、基本的に文学者で、宗教や宗派に固執するような閉じた知性の方には会ったことがありません。たとえば、先日サミュエルさんとスカイプで話していて、面白い話を聞きました。サミュエルさんがシリアの状況について三〇年以上のつきあいがある友人と話していて、何故シリア国内でその友人が住む住宅地区が、政府軍からの攻撃を免れているのかと尋ねたところ、初めて友人がシリア派コミュニティーの出身者だったことを知ったそうです。確かに名前や出身地、身なりから自明の場合もあります。ですが、家族同士のつきあいや地域、学校といったそれぞれの場で友人関係となった後には、友人のバックグラウンドを問うことはなく、後々になってそれを知ることになるといったことはシリアでもしばしば起こり得ることのように



ラウダ・カフェ

す。国際的なメディアでは「〇〇派」とか騒がれていても、シリアではこうしたシチュエーションも現実の一面かと思えます。

とはいえ、やはり私が暮らしていた中で感じたのは、二〇〇〇年代を通して言論や文化に対する政府の締め付けや監視は強まったということです。たとえば「ダマスカスの春<sup>★1</sup>」と言われた二〇〇〇年から二〇〇一年にかけての民主化運動の時にはいろいろなフォーラムがあつて政治や文化に関する議論が活発化していました。体制批判的な文学者が集まる場も無数にあつたと思います。在ダマスカスのフランス研究所<sup>★2</sup>でも毎週木曜日に映画会や読書会などが行われていました。ただ徐々に締めつけが強まる中で、小規模ではありながらも「公共圏」というべき空間が、二〇〇〇年代の十年を通じて、ますます狭くなつたという印象を受けました。

ナジーブ 社会主義の国の施設としてシリアでは私が若い頃に、二万人以上の人口がある町に必ず文化センターを国が作るのです。結構いい感じでみんなが集まつて、文学や音楽、演劇をやつて、そこからいろいろいる人が、あとでアラブ世界全体で有名になつたり国際的になつたりしました。文化センターはもちろん国がやっているのですが関係なくて、いい施設だつたと思います。

福田 ありがとうございます。もう大丈夫でしょうか。これだけはぜひ聞いておきたかつたということはありませんでしょうか。では、最後に何かありますか。

★1 バッシヤール・アサド大統領就任後に起きた有識者中心の自由・民主化運動

★2 Institut Français du Proche-Orient  
在シリア仏大使館に付属する研究施設。

## 「悔恨の共同体」——遠い未来を見据えて

鶴飼 岡崎さんに、今までの議論と関連して、悔恨の共同体ということについて展開されたところを、つまり責任は誰がどう負うのかということと、今の状況の表象の仕方みたいなことで、私が少し触れた、タイトルに込められた意味ということも関係があるのですが、そこも少し説明していただきたいと思っています。

岡崎 先ほど、ムハンマド・アッターールさんはヴィデオの中で、「シリアの国民同士が愛し合うなんて、もはや不可能」としながらも、同時に「それでもやはり、愛し合っていていくしかない」という苦しい胸の内を吐露していました。「それが十年後になるか、百年後になるかは分からないけれど」ということです。ですが、少なくとも十年後にシリアの人々の「和解」が成立していると考ええる方は、今のところ皆無かと思えます。

日本の場合、私の専門である政治思想と関わる問題なのですが、やはり一九世紀半ばから既に独立国家として近代化に入っていて、アラブ世界と比べれば、相対的にですが、安定していたのは事実です。ですから戦後の日本で「悔恨共同体」としてやり直そうではないかと訴えた時に、「そういう方向で行こうではないか」という思想なり、認識なり、精神なりが、市民社会の中でいっそう共有できた状況にあったと思います。そういう流れの中で、安保の時代などがあつたと思うのです。

ところが、近代国家としての経験が浅いシリアの場合は、作家が「悔恨の共同体」を訴えたにせよ、何か内側と外側から予想も付かない要素がどんどん入ってきて、ま

さにナジブさんの言うとおり、「わけが分からない状況」に巻き込まれていく。蟻地獄のように、どんどん巻き込まれていく、引きずり込まれていく状況というべきでしょうか。

ですから、私はヤーシーン・ハーツジュ・サーレハさんの「悔恨の共同体」への訴えを紹介したのですけれども、非常に遠い未来を見据えた上での理念だということをも十分承知した上でのことです。監獄経験をシリア人皆の課題としよう。パルミラの刑務所を国民共有の「後悔の記念碑」としよう。バスチーユ監獄のように大きな石碑を建てて、シリア人みんなで過去を反省しつつ未来に目を向けていこう。こうした考えが、向こう十年、二十年で実際の動きとして具現化していくというのはやはり想像できません。

しかし、私は、何よりもまず、そういう理念が提示されているのだということは常に確認していくべきだと考えます。ウサーマ・ムハンマド監督がヴィデオで述べたとおり、「全てのシリア人を救い得るはず」であった自由や公正をはじめとする理念が、いかなる形で語られたのか。文学であれ、映画であれ、思想であれ、提示された理念と目の前の現実との深い溝をどのように乗り越えようとしているのか。結果の後追いや既成事実の追認に留まっている限り、シリアで生じている人間の根本的な変化は見えてきません。理念と現実のさまざまな緊張関係については、私がシリアに関わっていく上で、やはり見逃してはならない、常に見据えていくべき点だと思っています。

福田 ありがとうございます。きょうのシンポジウムのサブ・タイトルに「独裁、内

戦「そして希望」というのがありました。たしか、岡さんが提案されたもので、私もとてもいいものだと思います。もちろん、軽々に希望を持つとはもう言えないような状況ではあるのですが、文学の一つの機能でもあると思いますし、たとえかすかなものであっても、未来に向けてというところもあると思いますので、最後に岡崎さんにそういうことを一言で締めくくっていただいてよかったですと思います。

では、中東現代文学研究会の代表である岡さんの方から、本日のシンポジウムの締め挨拶をお願いします。

岡 本日は午後一時に始まって、すでに六時をまわり、五時間以上におよぶ長時間のシンポジウム、聴衆のみなさんも登壇者のみなさんも大変お疲れさまでした。

私は三〇年以上前に一度、シリアを旅したことがあるだけでしたので、たぶん会場のみなさんと同じで、今日はお腹いっぱいになるぐらい、シリアのことを伺いました。柳谷さんも岡崎さんも、森さんも、山本さんも、福田さんも、今日、登壇してくださいました。みなさんは留学などでシリアに長らくお住まいになった経験があります。シリアはアラビア語も美しく、幼い子もフスハーを話していて、アラビア語を勉強するには、とてもいいところでした。でも、今は、そのシリアでアラビア語を勉強することができないというのがとても悲しいです。

ディスカッションのなかでナジブさんもおっしゃっていたようにアラブ世界を直接知り、アラビア語で文学作品を読める私たちアラビストは、アラビア語で書かれた作品を通して、シリア、そしてアラブ世界のことを、もっともっと社会に伝えていか

なければならぬと、あらためて思いました。

今日、来てくださったすべての方にお礼申し上げます。本当にどうもありがとうございます。  
ございました。(会場拍手)

## パネリスト紹介 (五十音順)

### 鶴飼 哲 (うかい さとし)

1955年生まれ。一橋大学言語社会研究科特任教授。フランス文学・思想、ポスト植民地文化論。著書に『抵抗への招待』(1997年)、『応答する力』(2003年)、『主権のかなたで』(2008年)、訳書にジャン・ジュネ『恋する虜』(共訳1993年)、『シャティエラの四時間』(共訳2010年)など。

### 岡 真理 (おか まり)

1960年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。著書に『アラブ、祈りとしての文学』(みすず書房、2008年)、『斐椰子の木陰で—第三世界フェミニズムと文学の力』(2006年、青土社)など。訳書にターハル・ベン＝ジェルーン『火によって』(以文社、2012年)など。

### 岡崎弘樹 (おかざき ひろき)

1975年生まれ。中部大学非常勤講師。アラブ近代政治思想。最近の論文に「La remise en question des Caractéristiques du despotisme d'al-Kawākibī: Entre influence occidentale et vision arabe」『日本中東学会年報』Vol.33-2(2018年)、「アブドゥッラー・ナディームにおける<金持ちの専制>批判」『日本中東学会年報』Vol.32-1(2016年)など。

### ナジーブ・エルカシュ

1973年シリア生まれ。ジャーナリスト、リサーラ・メディア代表(www.risala.tv)。1997年に来日。東京大学、名古屋大学にて映画理論を研究。北東アジアを取材し、アラブ諸国のメディアに配信。文化交流の分野でも活動している。

### 福田義昭 (ふくだ よしあき)

1969年生まれ。大阪大学大学院講師。アラブ文学。「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(2)」『アジア文化研究所研究年報』51(東洋大学、2017年)、「アラブ世界の夢文化とナギーブ・マフフーズの夢文学」荒木浩編著『夢と表象』(勉誠出版、2017年)。

### 前田君江 (まえだ きみえ)

1972年生まれ。東京大学非常勤講師。イラン詩、ムスリム児童書と絵本。著書に『イランを知るための65章』(部分執筆、明石書店2004年)、訳書に『現代イラン詩集』(共訳、2009年)、『ラマダンのお月さま』(2016年)、『イードのおくりもの』(2017年)。

### 森 晋太郎 (もり しんたろう)

1967年生まれ。アラビア語通訳、東京外国語大学非常勤講師。アラブ現代文学。著書に『シリア・レバノンを知るための64章』(部分執筆、明石書店、2013年)、訳書にR・ダイフ『親愛なるカワバタ様』『中東現代文学選2012』(抄訳、中東現代文学研究会、2013年)など。

### 柳谷あゆみ (やなぎや あゆみ)

1972年生まれ。公益財団法人東洋文庫研究員・上智大学アジア文化研究所共同研究員。中世イスラーム政治史・現代アラブ文学。訳書にザカリーヤ・ターミル『酸っぱいブドウ／はりねずみ』(白水社、2018年)など。

### 山本 薫 (やまもと かおる)

1968年生まれ。東京外国語大学非常勤講師。アラブ文学。著書に『シリア・レバノンを知るための64章』(部分執筆、明石書店、2013年)など。訳書にエミール・ハビービー『悲楽観屋サイドの失跡にまつわる奇妙な出来事』(作品社、2006年)など。

- , *al-Rāwiyāt*, Beirut: Dār al-Tanwīr, 2014.  
 -----, *Nafaq al-Wujūd*, Beirut: Riyād al-Rayyis, 2015.  
 -----, *Mitrū Ḥalab*, Beirut: Dār al-Tanwīr, 2016.  
 -----, *'Imti Ṣabāḥan 'ayyatuḥā al-Ḥarb*, Milan: Manshūrāt al-Mutawassit, 2017.  
 Maḥmūd Ḥasan al-Jāsim, *Ghufrān-ki yā Ummī*, Beirut: al-Dār al-'Arabiyya li-l-'Ulūm Nāshirūn, 2014.  
 -----, *Nuzūḥ Maryam*, Beirut /Cairo /Tunis: Dār al-Tanwīr, 2015.  
 -----, *Lāji'a bayna Zawjayn*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2016.  
 Manāf Zaytūn, *Qalīl min al-Mawt*, Beirut: Nawfal, 2013.  
 -----, *Ṭā'ir al-Ṣadā*, Beirut: Nawfal, 2014.  
 -----, *Zilāl al-Ākharīn*, Beirut: Nawfal, 2017.  
 Muḥammad Burhān, *Aṭṭār al-Qulūb*, Amman: Dār Faḍā'āt, 2015.  
 Muṣṭafā Khalīfah, *Raqṣat al-Qubūr*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2016.  
 Nabīl al-Mulḥim, *Sarīr Baqlāwa al-Ḥazīn*, Beirut: Aṭlas li-l-Nashr wa-l-Intāj al-Thaqāfī, 2012.  
 -----, *Bānsiyūn Maryam*, Beirut: Aṭlas li-l-Nashr wa-l-Intāj al-Thaqāfī, 2012.  
 -----, *Mawt Raḥīm*, Beirut: Aṭlas li-l-Nashr wa-l-Intāj al-Thaqāfī, 2013.  
 ---, *Ḥānūt Qamar*, Beirut: Aṭlas li-l-Nashr wa-l-Intāj al-Thaqāfī, 2013.  
 -----, *Khammārat Jabrā*, Milan: Manshūrāt al-Mutawassit, 2016.  
 Nabīl Sulaymān, *Madā'in al-Urjwān*, Latakia: Dār al-Ḥiwār, 2013.  
 -----, *Jidāriyyāt al-Shām (Nammūmā)*, Dubai: Dār al-Ṣadā, 2014.  
 -----, *Layl al-'Ālam*, Dubai: Dār al-Ṣadā, 2016.  
 ★ Rūzā Yāsīn Ḥasan, *Alladhīna massa-hum al-Siḥr: min Shadhāyā al-Ḥikāyāt*, Beirut /Baghdad: Manshūrāt al-Jamal, 2016.  
 ★ Samar Yazbak, *Taqāṭu' al-Nīrān: Yawmiyyāt al-Intifāḍa al-Sūriyya*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2012.  
 -----, *Bawwābāt Arḍ al-'Adam*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2015.  
 -----, *al-Mashshā'a*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2017.  
 -----, *Tis' 'Ashrat Imra'a: Sūriyyāt yarwīna*, Milan: Manshūrāt al-Mutawassit, 2018.  
 ★ Sawsan Jamīl Ḥasan, *Qamīṣ al-Layl*, Ra's al-Khayma: Dār Nūn, 2014.  
 ★ Shahlā al-'Ujaylī, *Sajjād 'Ajamī*, Beirut /Algiers: Manshūrāt Difāf /Manshūrāt al-Ikhtilāf, 2013.  
 -----, *Samā' Qarība min Bayt-nā*, Beirut /Algiers: Manshūrāt Difāf /Manshūrāt al-Ikhtilāf, 2015.  
 Taysīr Khalaf, *Madhbaḥat al-Falāsifa*, Beirut: al-Mu'assasa al-'Arabiyya li-l-Dirāsāt wa-l-Nashr, 2016.  
 Walīd al-Sābiq, *Aṣl al-'Ālam*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2016.  
 - ---, *Mā ba'da al-Khaṭī'a al-Ūlā*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2017.  
 ★ Zahrā' 'Abdullā, *Alā Mā'idat Dā'ish*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2017.

(作成：森 晋太郎)

## 2011年以降に刊行されたシリア人作家による作品リスト

(ただし、必ずしも現在の政治情勢を描いているわけではありません。★は女性作家)

- 'Abdullāh Maksūr, *Ayyām fī Bābā 'Amr*, Amman: Dār Faḍā'āt, 2013.  
 ---, *'Ā'id ilā Ḥalab*, Amman: Dār Faḍā'āt, 2013.  
 -----, *Ṭarīq al-Ālām*, Amman: Dār Faḍā'āt, 2015.
- 'Adnān Farzāt, *Kāna al-Ra'īs Ṣadīqī*, Kuwait: al-Mabda' li-l-Nashr wa-l-Tawzī', 2013.  
 Ayman Mārdīnī, *Ghā'ib 'an al-'Ashā' al-Akhūr*, Beirut: Riyāḍ al-Rayyis, 2015.
- ★ Dīma Wannūs, *al-Khā'ifūn*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2017.  
 Fādī 'Azzām, *Bayt Hudud*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2017.  
 Fawwāz Ḥaddād, *al-Sūriyyūn al-A'dā'*, Beirut: Riyāḍ al-Rayyis, 2014.  
 Ghāzī Ḥusayn al-'Alī, *Laylat al-Imbirāṭūr*, Beirut /Algiers /Rabat: Manshūrāt Difāf /Manshūrāt al-Ikhtilāf /Dār al-Amān, 2014.
- ★ Ghāda al-Sammān, *Yā Dimashq Wadā'an: Fusayfsā' al-Tamarrud*, Beirut: Manshūrāt Ghāda al-Sammān, 2015.  
 Ḥaydar Ḥaydar, *Maḥqūd*, Damascus: Ward li-l-Nashr wa-l-Tawzī', 2016.
- ★ Hayfā' Bīṭār, *Wujūh min Sūriyā*, Beirut: Dār al-Sāqī, 2013. 【短編集】  
 -----, *Ṭifl al-Tuffāḥ*, Beirut: al-Dār al-'Arabiyya li-l-'Ulūm Nashirūn, 2016. 【短編集】  
 ---, *al-Shahhādha*, Beirut /Algiers /Rabat: Manshūrāt Difāf /Manshūrāt al-Ikhtilāf /Dār al-Amān, 2017.
- ★ Ibtisām Turayṣī, *Mudun al-Yamām*, Cairo: Maktabat al-Dār al-'Arabiyya li-l-Kitāb, 2014.  
 , *Lamār*, Cairo: Maktabat al-Dār al-'Arabiyya li-l-Kitāb, 2015.  
 , *Laylat al-Kādmīyūm*, Sharjah: Dār Riwayāt, 2017.
- Islām Abū Shukayr, *al-Qunfudh*, Amman: Dār Faḍā'āt, 2013.  
 -----, *Zujāj Maḥūn*, Milan: Manshūrāt al-Mutawassit, 2016.
- Jān Dūst, *Dam 'alā al-Mī'dhana*, Cairo: Maqām li-l-Nashr wa-l-Tawzī', 2014.  
 Khalīl Ṣuwaylīh, *Jannat al-Barābira*, Cairo: Dār al-'Ayn, 2014.  
 , *Qānūn Ḥirāsāt al-Shahwa*, Damascus: Dār Naynawā, 2015.  
 -----, *Ikhtiyār al-Nadam*, Beirut: Nawfal, 2017.
- Khālīd Khalīfa, *Lā Sakākīn fī Maḥābikh hādhihi al-Madīna*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2013.  
 -----, *al-Mawt 'Amal Shāqq*, Beirut: Nawfal, 2016.
- ★ Līnā Hawyān al-Ḥasan, *Nāzik Khānum*, Beirut /Algiers: Manshūrāt Difāf /Manshūrāt al-Ikhtilāf, 2013.  
 -----, *Rijāl wa Qabā'il*, Damascus: Wizārat al-Thaqāfa, 2013.  
 -----, *Almās wa Nisā'*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2014.  
 -----, *al-Dhi'āb lā tansā*, Beirut: Dār al-Ādāb, 2016.  
 -----, *Bint al-Bāshā*, Beirut: Manshūrāt Difāf, 2017.
- ★ Mahā Ḥasan, *Ṭubūl al-Ḥubb*, Beirut: Riyāḍ al-Rayyis, 2013.

## 「あとがき」

本書は二〇一七年六月一七日、東京大学東洋文化研究所を会場に、中東現代文学研究会が主催したシンポジウム「《文学》からシリアを考える——独裁、内戦、そして希望」の記録です。

中東現代文学研究会は二〇〇八年に発足しました。日本の中東現代文学研究者が集まり、年二回、一月と六月に研究例会を開催しながら活動を重ねています。二〇一五年度からは、「現代中東文化における「ワタン（祖国）」的心性をめぐる発展的研究」をテーマに、科学研究費補助金基盤研究（B）の助成を得て、研究活動を進めており、本書はその研究成果の一つです。

二〇一〇年度からは、毎年六月に東京で一般市民向けに、さまざまなテーマで公開講演会を開催しています。二〇一七年度は、二〇一一年以来「内戦」の悲劇に見舞われているシリアをテーマにシンポジウムを企画しました。参加者は一〇〇人を超え、シンポジウムは五時間に及びました。シリアの状況を憂慮し、深い関心を寄せてご来場くださいましたみなさま、基調講演な

らびにパネルディスカッションに登壇してくださった研究会メンバーのみなさん、そして、ディスカッサントとして参加してくださいました鶴飼哲さん、ナジーブ・エルカシユさんにお礼申し上げます。

また、講演会の開催にあたり、会場を提供してくださいました東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」、共催してくださいました科学研究費補助金新学術領域研究計画研究B01「規範とアイデンティティ——社会的紐帯とナシヨナリズムの間」に感謝申し上げます。

なお本書は、科学研究費補助金新学術領域研究計画研究B01「規範とアイデンティティ——社会的紐帯とナシヨナリズムの間」の助成により刊行されました。

中東現代文学研究会

岡 真理

**編集スタッフ**

編集・制作：山本 薫、岡 真理（中東現代文学研究会）

編集補助：羽切友希 <(株)プラメイク>

本文デザイン・装丁：松村紗恵 <(株)プラメイク>

進行管理：呉 玲奈 <(株)プラメイク>

中東現代文学リブレット⑨

シンポジウム「《文学》からシリアを考える」

---

2018年3月31日発行 初版第1刷発行

編者 岡 真理（中東現代文学研究会）

発行者 岡 真理

発行所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院 人間・環境学研究科

岡 真理研究室 気付

中東現代文学研究会

電話／FAX 075-753-6641

ISBN978-4-908679-05-6

出版協力 (株)ユニオン・エー

---

